山口県埋蔵文化財センター調査報告　第69集

東禅寺（とうぜんじ）・黒山（くろやま）遺跡

（岡上ノ原（おかうえのはら）・後子庵（ごしあん）地区）

２００９

財団法人　山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、一般県道山口秋穂線　単独道路改良工事に伴い山口県山口土木建築事務所の委託を受けて、山口県ひとづくり財団が実施した、山口市鋳銭司地内に所在する東禅寺・黒山遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

山口市鋳銭司地区には、国指定史跡の周防鋳銭司跡をはじめとして古代～近世の遺跡が点在しています。また、東禅寺・黒山遺跡は過去にも調査が実施され、平安時代から中世にかけての遺構・遺物が多数発見されています。

今回の調査の結果、平安時代から中世にかけての集落跡が発見されました。掘立柱建物跡や竪穴状遺構、溝状遺構、土坑などが検出され、土師器や瓦質土器など多量の遺物が出土しました。また、緑釉陶器片が出土し、周防鋳銭司跡との関連も考えられます。これらの資料は当時の人々のくらしを考える上で極めて貴重で、ふるさとの歴史に新しい事実を加えるものです。

本書はその調査成果をまとめたものであり、収録された資料が、教育・学術・文化の振興のために広く活用されることを願っています。

おわりに、当発掘調査の実施並びに報告書の作成に当たってご協力をいただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成21年３月

財団法人　山口県ひとづくり財団
理事長　　西村　　亘

例　言

1　本書は、平成20年度に実施した、東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）（山口県山口市鋳銭司地内）の発掘調査報告である。

2　調査は、一般県道山口秋穂線　単独道路改良工事に伴い、財団法人山口県ひとづくり財団が山口県山口土木建築事務所の委託を受けて実施したものである。

3　調査組織は次のとおりである。

調査主体　財団法人山口県ひとづくり財団　山口県埋蔵文化財センター

調査担当　主　　査　河村　吉行
文化財専門員　森下　穏雄
文化財専門員　松林　寛樹
調　査　員　中野　萌

4　調査にあたっては、山口県教育委員会、山口市教育委員会、山口県山口土木建築事務所並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

5　本書の第１図は、国土地理院発行の５万分１地形図「小郡」（平成18年９月１日発行）を複製使用した。また第２図調査区設定図は、山口市役所都市整備部都市計画課から提供を受けた都市計画図をもとに作成した。

6　石材鑑定については、山口県立山口博物館　亀谷　敦氏に依頼した。記して謝意を表す。なお、石材鑑定は表面観察によるものである。

7　本書に使用した方位は、遺構配置図に関しては国土座標（世界測地系）で示し、個別遺構に関しては磁針方位で示している。また、標高は海抜標高（m）である。

8　本書に使用した土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局(監修)『新版標準土色帖』Munsell方式に従った。

9　図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

10　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＡ：柵列　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＣ：竪穴状遺構　ＳＤ：溝状遺構　ＳＥ：井戸
ＳＫ：土坑　ＳＰ：柱穴

11　本書の挿図・写真は、河村・森下・松林・中野が分担して作成した。各章の執筆担当は次のとおりで、編集は森下が行った。

Ⅰ：中野　Ⅱ：松林　Ⅲ－１：中野　Ⅲ－２：河村　Ⅳ：森下

本 文 目 次

Ⅰ　位置と環境…… 1

Ⅱ　調査の経緯と概要…… 3

Ⅲ　調査の成果
1　遺　構
（1）　Ⅰ地区……9
（2）　Ⅱ地区……17
（3）　Ⅲ地区……33
2　遺　物
（1）　土器……35
（2）　石製品・金属製品ほか……59

Ⅳ　まとめ…… 75

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……１
第２図　調査区設定図……４
第３図　Ⅰ地区遺構配置図……６
第４図　Ⅱ地区遺構配置図……７・８
第５図　Ⅲ地区遺構配置図……９
第６図　ＳＢ１・２実測図……10
第７図　ＳＢ３・４実測図……11
第８図　ＳＢ５実測図……12
第９図　ＳＢ６実測図……13
第10図　ＳＢ７・８実測図……14
第11図　ＳＥ1002、ＳＫ1001・1120実測図……16
第12図　ＳＫ1087実測図……17
第13図　Ⅰ地区ＳＤ１・２・３・４土層断面図…18
第14図　ＳＰ1116・1138・1154・1186実測図……19
第15図　ＳＰ1206・1222・1251・1252・1275
実測図……20
第16図　ＳＢ９・10実測図……21
第17図　ＳＢ11・12実測図……22
第18図　ＳＢ13・14実測図……23
第19図　ＳＢ15・16実測図……24
第20図　ＳＢ17実測図……25
第21図　ＳＢ18実測図……26
第22図　ＳＫ2005・2089・2115・2358実測図……27
第23図　ＳＫ2359・2367、ＳＰ2160・2241・
2320実測図……28
第24図　Ⅱ地区ＳＤ１・２・３土層断面図……29
第25図　Ⅱ地区ＳＤ４・５・６土層断面図……30
第26図　ＳＣ１実測図……31
第27図　ＳＣ２・３実測図……32
第28図　掘立柱建物跡出土土器実測図……36
第29図　土坑出土土器実測図（１）……37
第30図　土坑出土土器実測図（２）……38
第31図　ＳＥ1002出土土器実測図……38
第32図　Ⅰ地区ＳＤ１出土土器実測図（１）……40
第33図　Ⅰ地区ＳＤ１出土土器実測図（２）……41
第34図　Ⅰ地区ＳＤ１出土土器実測図（３）……43
第35図　Ⅰ地区ＳＤ１出土土器実測図（４）……45
第36図　Ⅰ地区ＳＤ１出土土器実測図（５）……47
第37図　Ⅰ地区ＳＤ１出土土器実測図（６）……49
第38図　Ⅰ地区ＳＤ１出土土器実測図（７）……50
第39図　Ⅰ地区ＳＤ２・４及びⅡ地区ＳＤ１
出土土器実測図……51
第40図　Ⅱ地区ＳＤ２・３・５・６・７・
10・12出土土器実測図……53
第41図　Ⅱ地区ＳＤ４及びⅢ地区ＳＤ２出土
土器実測図……55
第42図　柱穴出土土器実測図……57
第43図　ＳＣ２・３出土土器実測図……58
第44図　Ⅰ地区灰褐色土出土土器実測図（１）……60
第45図　Ⅰ地区灰褐色土出土土器実測図（２）……61
第46図　Ⅰ地区黒褐色土及びⅡ地区赤褐色粘
質土出土土器実測図……62
第47図　石製品・金属製品ほか実測図……63

表 目 次

第1表　掘立柱建物跡一覧表 …… 33

第2表　土坑・柱穴一覧表 …… 33

第3表　溝状遺構一覧表 …… 34

第4表　土器観察表 …… 64

第5表　石製品・金属製品ほか観察表 …… 74

図　版　目　次

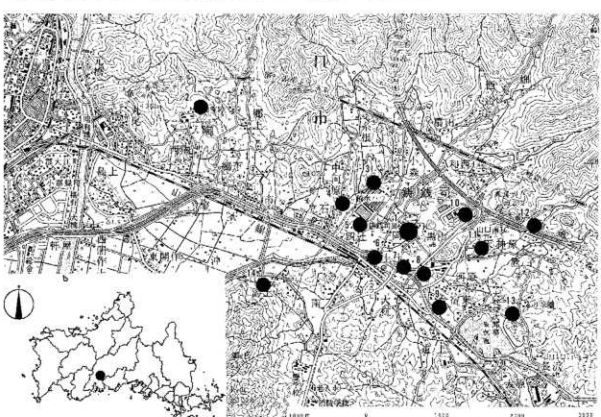
図版１　遺跡遠景（南から）
図版２　遺跡全景（南から）
図版３　Ⅰ地区全景（南から）
図版４　Ⅱ地区全景（南から）
図版５　Ⅲ地区全景（東から）
　ＳＣ１完掘状況（西から）
図版６　ＳＣ２・３検出状況（東から）
　ＳＢ９完掘状況（東から）
図版７　ＳＢ18完掘状況（東から）
　Ⅱ地区ＳＤ３・４・５・６・７完掘状況
　（東から）
図版８　Ⅰ地区ＳＤ１遺物出土状況（北から）
　Ⅰ地区ＳＤ１遺物出土状況（東から）
　ＳＥ1002集石状況（西から）
　ＳＫ1001遺物出土状況（北から）
　ＳＫ1001完掘状況（西から）
　ＳＫ1120完掘状況（南から）
　ＳＫ1087遺物出土状況（北から）
　ＳＫ1087完掘状況（南から）
図版９　ＳＰ1116焼土・木炭充填状況（北から）
　ＳＰ1138遺物出土状況（北から）
　ＳＰ1154遺物出土状況（北から）
　ＳＰ1186柱根込め石出土状況（北から）
　ＳＰ1206遺物出土状況（西から）
　ＳＰ1222柱根込め石出土状況（北から）
　ＳＰ1251遺物出土状況（東から）
　ＳＰ1252遺物出土状況（西から）
図版10　Ⅱ地区ＳＤ１東西流路完掘状況（西から）
　Ⅱ地区ＳＤ１以南調査区全景（北から）
　Ⅱ地区ＳＤ２完掘状況（北西から）
　Ⅱ地区ＳＤ３・４完掘状況（西から）
　Ⅱ地区ＳＤ５・６・７完掘状況（西から）
　ＳＫ2005完掘状況（東から）
　ＳＫ2089完掘状況（西から）
　ＳＫ2115礫出土状況（南から）
図版11　ＳＫ2358完掘状況（東から）
　ＳＫ2359遺物出土状況（南から）
　ＳＫ2359完掘状況（東から）
　ＳＫ2367遺物出土状況（西から）
　ＳＰ2160礫出土状況（西から）
　ＳＰ2320遺物出土状況（東から）
　ＳＰ2241遺物出土状況（南から）
　Ⅲ地区ＳＤ１・２完掘状況（西から）
図版12　出土土器①
図版13　出土土器②
図版14　出土土器③
図版15　出土土器④
図版16　出土土器⑤
図版17　出土土器⑥
図版18　出土土器⑦
図版19　出土土器⑧
図版20　出土土器⑨
図版21　出土土器⑩
図版22　出土土器⑪
図版23　出土土器⑫
図版24　出土土器⑬
図版25　出土土器⑭
図版26　出土土器⑮
図版27　出土土器⑯
図版28　出土土器⑰
図版29　出土土器⑱、出土石製品・金属製品ほか

Ⅰ　位置と環境

東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）は、山口市鋳銭司地区に所在する遺跡である。山口市鋳銭司地区は、山口県の瀬戸内側の中央を流れる椹野川下流域に広がる古南平野に位置する。平野の北側には標高約300～400ｍの山口山地が、南側には標高約200～300ｍの秋穂山地がそびえる。東側は谷中分水帯を境に防府市台道地区と接する。南西部には近世以降の干拓地が広がる。本遺跡は、山口山地の黒河内山山麓に形成された扇状地上に立地する。山口山地を水源として、東側から高橋川、金毛川、綾木川の三つの小河川が平野を南流する。これらの小河川は大雨の度に氾濫し、周辺地域一帯に被害をおよぼしてきた。なお、古代から中世にかけての海岸線は、標高６～７ｍの地点まで湾入していたと考えられており、当該期の当地域南側は海岸に面していたものと推定される。

本遺跡周辺で、最も古い生活の痕跡がうかがえるのは、長沢池遺跡である。遺跡周辺では、旧石器・縄文時代の石器や、縄文土器などが採集されている。なお、本遺跡周辺でも、縄文時代の石器が採集されている。

弥生・古墳時代の遺跡はあまり確認されておらず、当該期の様相は不明である。遺跡が少ない原因として、低地帯に立地することや大きな河川をもたないことなどから、自然灌漑による水田化が困難で耕地化が遅れ、それに伴う集落も営まれなかった可能性が考えられる。



1．東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）　2．陶窯跡　3．八ヶ坪遺跡　4．下糸根遺跡
5．周防鋳銭司跡　6．上辻遺跡　7．鋳銭司大蔵遺跡　8．今宿西遺跡　9．今宿東遺跡
10．桐ヶ浴・尼口山遺跡　11．天神原遺跡　12．弥市原遺跡　13．長沢池遺跡　14．潟上遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

古代の当地域は、周防国吉敷郡八千郷に属していたと考えられている。当地域の南側には古代山陽道が通っていたとされており、この八千郷は古代山陽道の駅が設置された駅家郷であった。本遺跡の西側には、古代の生産遺跡である陶窯跡や周防鋳銭司跡がある。陶窯跡は奈良時代から平安時代にかけての須恵器の窯跡であり、山口山地から派生する丘陵の南斜面に推定50基以上の窯が存在したと考えられている。この陶窯跡で生産された須恵器は周防鋳銭司や周防国府に供給されたものと考えられる。周防鋳銭司は、天長２(825)年に長門鋳銭司が周防国に移されて設置された、官営工房跡である。皇朝十二銭のうち８種を鋳造していた。昭和41年に学術調査が行われ、各種遺構や鋳造関連の遺物が検出された。昭和48年には、「周防鋳銭司跡」として国史跡に指定されている。これらの生産遺跡は、当地域の西隣の陶地域から防府市台道地域にかけて、良質の陶土が採掘されることや、銅鉱石や燃料となる薪炭の森林資源など良好な資源に恵まれていたこと、周防国府の西方外縁に位置すること、陸路・海路の交通の便の良かったことなどの、好条件に恵まれていたため、律令制のもと発展していたものと考えられる。

周防鋳銭司の西側には、八ヶ坪遺跡、下糸根遺跡が存在する。これらの遺跡からは古代から中世にかけての掘立柱建物跡や土坑などの遺構が検出されている。八ヶ坪遺跡からは、墨書土器や木簡、緑釉陶器、坩堝、銅滓などが出土しており、周防鋳銭司関連の遺跡と考えられている。本遺跡の平成７～11年度の調査でも、古代から中世の各種遺構が検出され、上辻遺跡、鋳銭司大蔵遺跡、今宿西遺跡からも当該期の遺構が検出されている。これらのことから、奈良時代から平安時代にかけて、周防鋳銭司や陶窯跡などの生産遺跡の発展とともに、それらの工人の集落や関連遺跡が当地域一体に展開していたものと考えられる。

律令制の崩壊とともに、従来の土地制度が変容し、在地の有力階層により本格的に水田開発が進められ、本地域一帯は工業地帯的な様相から農村地帯的な様相に変化していった。大内氏が台頭すると、当地域は潟上庄に属していたと考えられている。大内氏の拠点山口と外港である秋穂浦とを結ぶ秋穂街道と、山陽道との交点であった本遺跡の南方に位置する四辻周辺は、大変なにぎわいをみせたとされる。また、中世になると集落遺跡の立地にも変化が生じ始める。本遺跡の南東側、古代山陽道の沿線の低地帯に位置する上辻遺跡、鋳銭司大蔵遺跡、今宿西遺跡、今宿東遺跡の遺構の様相から、平安時代から室町時代にかけて、集落の中心が西側から南東側へ、低地から微高地上へと移動することが判明した。また、本遺跡の北東に位置する桐ヶ浴・尾口山遺跡、天神原遺跡、弥市原遺跡では、谷間の扇状地や丘陵の斜面上、微高地上にも集落が形成されている。

近世に入ると、治水土木技術の進歩により、長沢池をはじめとする多数の灌漑用溜池が築堤された。享保13（1728）年に作成された「地下上申絵図」によると、本遺跡一帯は水田化し、集落は山陽道沿線や台地上に立地していた様子がうかがえる。

参考文献
山口県教育委員会『歴史の道調査報告書　山陽道』1983年
山口県教育委員会文化課編『弥市原・東禅寺』建設省山口工事事務所・山口教育委員会　1982年
山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター編『上辻・鋳銭司大蔵・今宿西』山口県教育委員会・建設省山口工事事務所　1984年
山口県教育委員会・建設省山口工事事務所編『今宿東遺跡』山口県教育委員会　1986年
山口県教育財団『東禅寺・黒山遺跡Ⅰ・Ⅱ』1996・1997年
山口県埋蔵文化財センター『東禅寺・黒山遺跡Ⅲ～Ⅴ』1998～2000年
山口県埋蔵文化財センター『東禅寺・黒山遺跡（東大円・上徳田地区）』2003年
山口市教育委員会『周防鋳銭司跡』1978年
山口市教育委員会『桐ヶ浴・尾口山遺跡』1993年
山口市教育委員会『八ヶ坪遺跡』1992年
山口市教育委員会『山口市内遺跡詳細分布調査（陶地区）』1999年
山口市教育委員会『下糸根遺跡』2000年
山口市教育委員会『陶窯跡群Ⅱ』2007年
山口市史編集委員会編『山口市史』山口市　1982年

Ⅱ　調査の経緯と概要

県道山口秋穂線道路改良事業の計画に伴い、当該工事予定地区内に周知の埋蔵文化財包蔵地である「東禅寺・黒山遺跡」が一部含まれていることなどから、平成19年度に山口県教育委員会によって工事予定地について事前の試掘調査が行われ、中世を中心とする時期の集落跡の埋存が確認された。

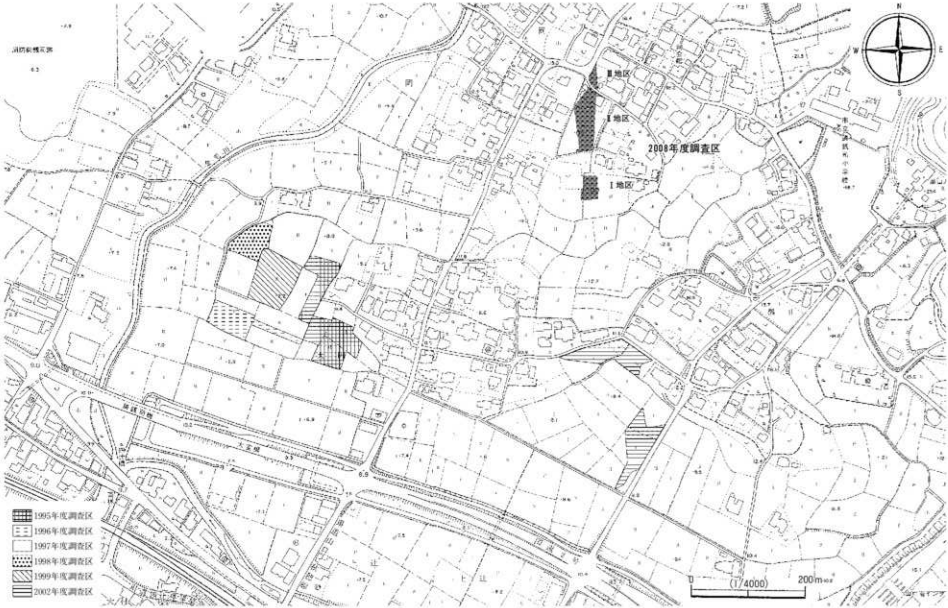
この結果を受け、山口県教育委員会では山口県山口土木建築事務所と協議を行い、平成20年度に発掘調査を実施することとした。これに伴って、当該調査については山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが山口県山口土木建築事務所から受託して実施することとなった。

なお、「東禅寺・黒山遺跡」に関しては、当センターが平成７年度から６年次にわたって発掘調査を行っており（第２図）、古代～中世の集落跡が確認されるとともに須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦質土器等をはじめ多種多量の遺物が出土している。

現地調査を始めるに当たって、調査対象地区の現況確認や関連資料調査、山口県山口土木建築事務所との打ち合わせ等事前の諸準備を行うとともに、山口市教育委員会をはじめ近隣の小・中学校、警察署、自治体などに、調査期間中における安全確保のための理解と協力を要請した。また、作業の円滑な進捗を図るため、地元の協力を得ながら鋳銭司在住の発掘経験者と地元の同地区から作業員を募った。調査面積は約1,955㎡であり、対象地区の現況地形等を考慮しながら、便宜上三つの調査区に分けてⅠ・Ⅱ・Ⅲ地区とした（第２図）。そして、全地区の表土除去・遺構検出・遺構の掘り込みを各々並行して実施することとした。こうした事前の諸準備を経て、９月25日に現地調査事務所を設置し、10月１日より作業員を動員して本格的な発掘調査を開始した。最初に、各地区数カ所に設置したトレンチの掘り込みにより遺構面の再確認を行い、重機による表土除去を行った。その後、11月中旬まで全地区の遺構検出と部分的に広がりの認められた遺物包含層の人力による掘り込みを行った。この間、比較的好天に恵まれたが、遺物包含層の厚さと包含層中に掘り込まれた溝状遺構検出のため予想以上の作業日数を要した。遺構検出の結果、掘立柱建物跡・土坑・柱穴・溝状遺構・竪穴状遺構等の遺構が多く分布し、特にⅠ地区とⅡ地区中央部は遺構の分布密度が高く、逆にⅢ地区は低いことが確認できた。その後、遺構実測のための国土座標杭を設置し、Ⅱ地区からⅠ地区へという順序で遺構の掘り込みを行うこととした。Ⅲ地区については面積が狭いため随時行うこととした。11

表土除去

遺構の検出


Ⅲ地区
Ⅱ地区
Ⅰ地区
2008年度調査区
1995年度調査区
1996年度調査区
1997年度調査区
1998年度調査区
1999年度調査区
2002年度調査区
(1/4000)
200m

第 2 図　調査区設定図

国土座標杭設置

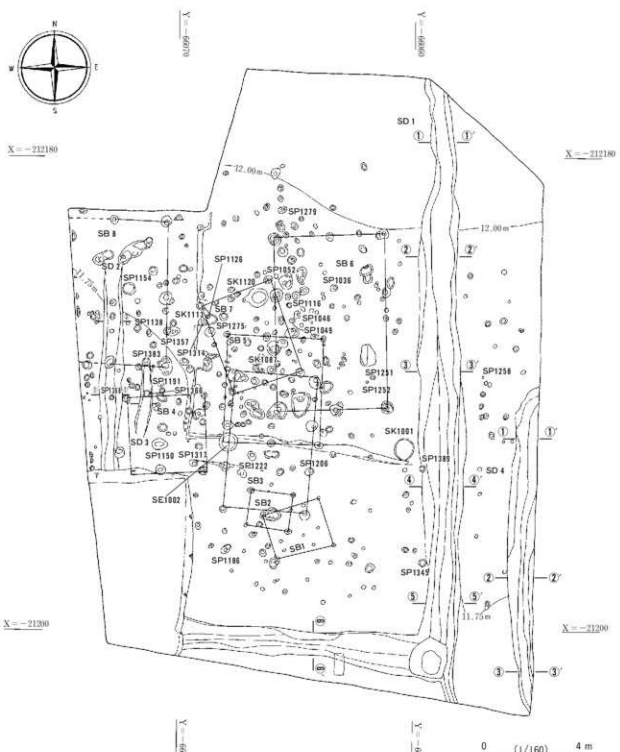
発掘体験学習

月下旬から始めた掘り込み作業は、遺構数が多かったが、作業員を増員したため順調に進めることができた。

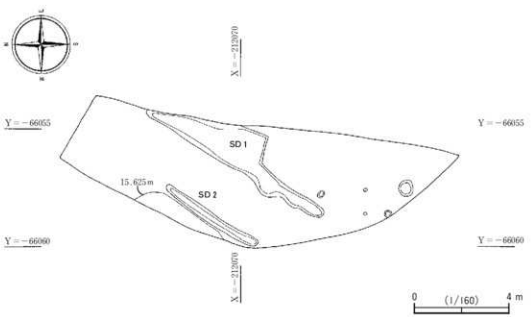
また、調査活動中盤の11月12日には、地元の鋳銭司小学校の児童21名と市内の湯田中学校の生徒２名が、それぞれ発掘体験学習と職場体験学習のため来跡した。遺物包含層の掘り込み等を行ったが、数多くの遺物を発見し歓声を挙げるなど有意義な学習の場となった。

遺構の掘り込みがほぼ一段落した調査の結果として、18棟の掘立柱建物跡、土坑、溝などが確認されるとともに、瓦質土器や陶磁器など大量の遺物が出土した。特に緑釉陶器や灰釉陶器などの出土は、周防鋳銭司跡とも関連して、この地域の官衙的施設の存在を間接的に示唆する資料となった。また、これらの多くの資料は、これまでの６次にわたる調査結果と合わせて、この地域の集落構造を推察する上で貴重なものとなった。遺構の全容が判明した12月20日には空中写真撮影を行い、その後、全地区のトータルステーションによる実測を行い、遺構の配置状況を記録した。さらに地形を記録するためコンター測量等を行って、１月９日には現地調査は全て終了した。

その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料の整理、出土遺物の復元・実測・写真撮影等を行い、この報告書を刊行するに至った。


N
W
E
S
Y=−6070
Y=−6060
X=−21210
X=−21200
SD 1
SD 2
SD 3
SD 4
SB 1
SB 2
SB 3
SB 4
SB 5
SB 6
SB 7
SB 8
SK1001
SK1085
SK1111
SK1120
SK1222
SE1002
SP1126
SP1134
SP1138
SP1151
SP1156
SP1157
SP1158
SP1159
SP1160
SP1161
SP1162
SP1163
SP1164
SP1165
SP1166
SP1167
SP1168
SP1169
SP1170
SP1171
SP1172
SP1173
SP1174
SP1175
SP1176
SP1177
SP1178
SP1179
SP1180
SP1181
SP1182
SP1183
SP1184
SP1185
SP1186
SP1187
SP1188
SP1189
SP1190
SP1191
SP1192
SP1193
SP1194
SP1195

第 4 図　Ⅱ地区遺構配置図



第５図　Ⅲ地区遺構配置図

Ⅲ　調査の成果

１　遺構

（１）Ⅰ地区

今回の調査では、掘立柱建物跡８棟、土坑６基、井戸１基、溝４条、柱穴多数を検出した。基本層序は、上から順に、１層：耕作土、２層：灰褐色土（遺物包含層）、３層：黒褐色土（遺物包含層）、４層：橙色粘質土（地山）となる。遺構は４層：地山上面から掘り込まれる。

遺構の分布密度は、ＳＤ１に囲まれた調査区中央部西よりに集中する傾向にある。調査区北側は、３層：遺物包含層を除去すると岩盤の地山が露出することから、いずれかの段階で大きく削平を受けていると考えられる。このことから、北側の遺構の大部分が削平されている可能性が考えられる。

掘立柱建物跡

ＳＢ１（第６図）

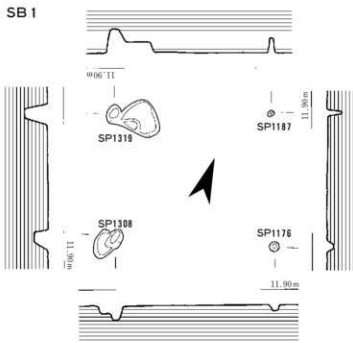
Ⅰ地区中央部南よりに位置し、ＳＢ２・ＳＢ３と重複する。１間×１間の建物で、棟方向は東西である。柱穴の規模は、東側梁の柱穴が直径約32cm、深さが22～36cmである。西側梁の柱穴が、直径10～15cm、深さが10～23cmとなり、東西の梁で柱穴の規模が異なる。遺物は土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

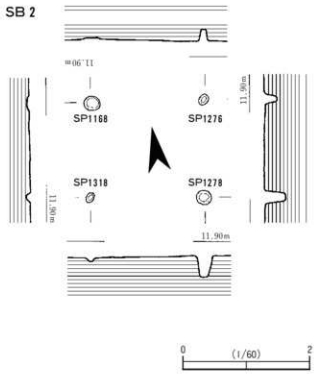
ＳＢ２（第６図）

Ⅰ地区中央部南よりに位置し、ＳＢ１・ＳＢ３と重複する。１間×１間の建物で、棟方向は東西である。柱穴の規模は直径18～24cmで、深さは、西側梁の柱穴が２～７cm、東側梁の柱穴が21～35cmとなり、西側の柱穴は浅くなる。遺物は土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ３（第７図）

Ⅰ地区中央部に位置し、ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ５～７と重複する。３間×１間の建物で、棟方向は南北である。柱穴の規模は直径29～57cm、深さは32～57cmである。遺物は土師器埦（14）のほか、土





第６図　ＳＢ１・２実測図

師器片、瓦質土器片などが出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ４（第７図）

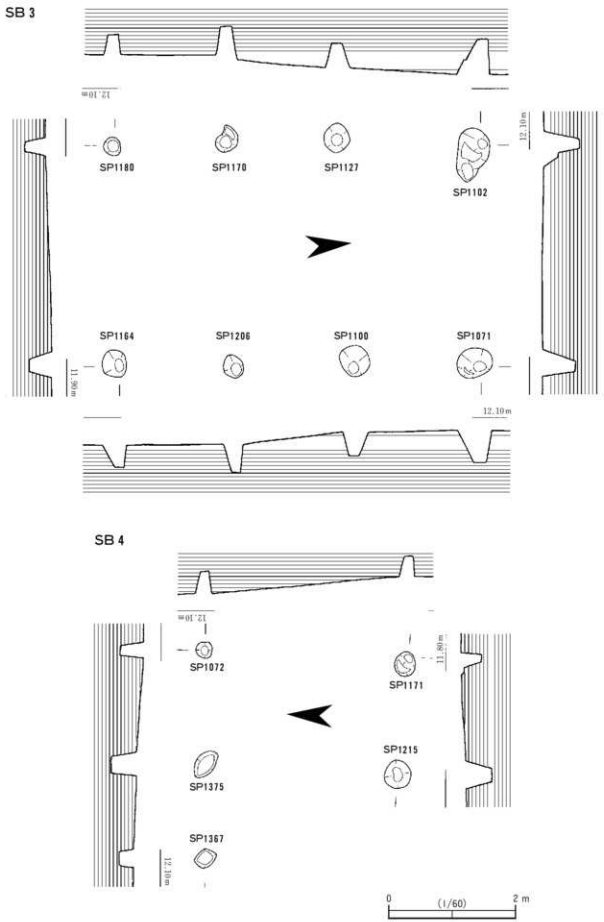
Ⅰ地区中央部西側に位置する。２間×１間の建物で、棟方向は東西である。南西隅の柱穴は検出してないが、後世の削平を受けたものと考えられる。柱穴の規模は直径25～44cm、深さは24～40cmである。遺物は土師器坏（13）のほか、土師器片、土師質土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ５（第８図）

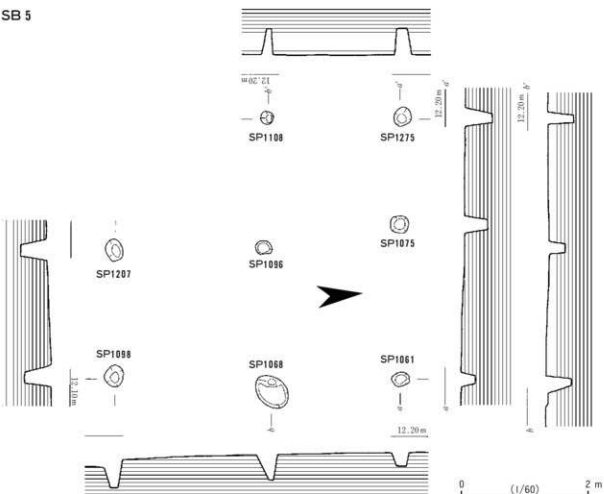
Ⅰ地区中央部に位置し、ＳＢ３・ＳＢ６・ＳＢ７と重複する。出土土器の様相から、ＳＢ７より先行する遺構である。建物南西端の柱穴は、ＳＥ1002によって切られているものと考えられる。２間×２間の総柱建物で、棟方向は南北である。柱穴の規模は直径20～50cm、深さが22～41cmである。遺物は土師器坏（10･12）のほか、土師器片、瓦質土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ６（第９図）

Ⅰ地区中央部に位置し、ＳＢ３・ＳＢ５・ＳＢ７と重複する。３間×２間の建物で、棟方向は南北である。桁行東側の北から３番目の柱穴を欠く。今回の調査で検出した掘立柱建物跡では、最大級の建物である。柱穴の規模も直径42～65cm、深さが24～56cmと、比較的規模が大きい。遺物は土師質土器足鍋（16）、瓦質土器足鍋（17）のほか、土師器片、土


SB 3
12.10m
SP1180
SP1170
SP1127
SP1102
12.10m
SP1164
SP1206
SP1100
SP1071
11.90m
12.10m
SB 4
12.10m
SP1072
SP1171
11.80m
SP1215
SP1375
SP1367
12.10m
0
(1/60)
2 m

第 7 図　SB 3 ・ 4 実測図



第８図　ＳＢ５実測図

師質土器片、瓦質土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ７（第10図）

Ｉ地区中央部やや西よりに位置し、ＳＢ３・ＳＢ５・ＳＢ６と重複する。出土土器の様相からＳＢ５より後出する。２間×２間の建物で、棟方向は南北である。柱穴の規模は直径21～43㎝、深さは12～56㎝である。遺物は土師器皿（３）・坏（５）が出土している。そのほか、土師器片、瓦質土器片、土師質土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ８（第10図）

Ｉ地区北西隅に位置する。現状で２間×１間の建物で、調査区外の西側へ建物が拡大する可能性が高い。柱穴の規模は直径が39～52㎝、深さが22～56㎝である。遺物は土師器坏（６）が出土している。

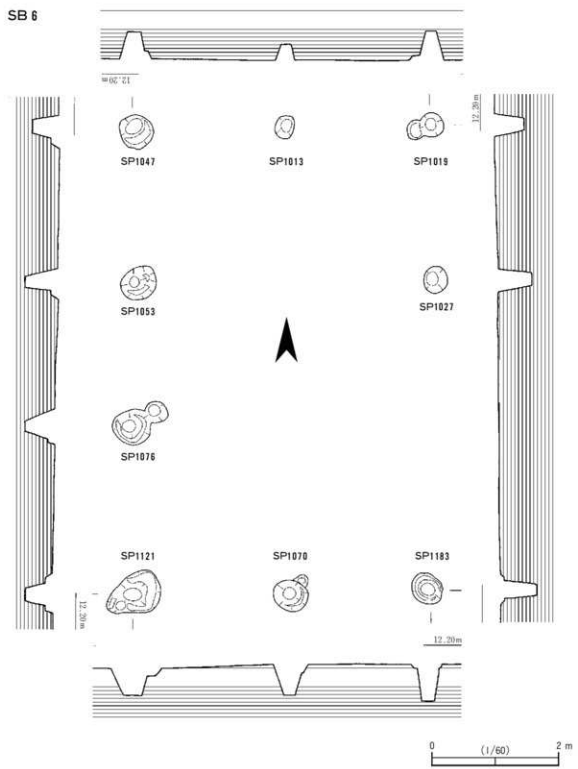
土坑

ＳＫ1001（第11図　図版８）

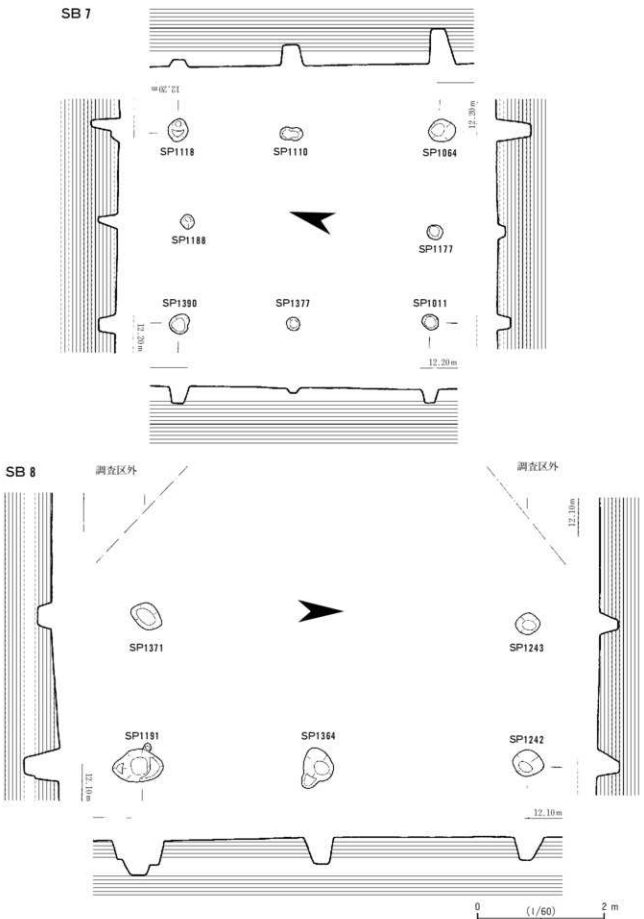
Ｉ地区中央部東より、ＳＤ1の西側に位置する。平面形は直径80～93㎝の円形を呈し、深さは10㎝である。埋土は単層で、にぶい黄褐色粘質土である。遺構の南東部で完形に近い状態の土師器坏が３点（18～20）、黒色土器埦が１点（21）出土した。そのほか、瓦質土器坏（22）や土師質土器甕（23）など多数出土している。いずれも床面から浮いた状態で出土しており、一括して廃棄された土器群であると考えられる。

ＳＫ1087（第12図　図版８）

Ｉ地区中央部に位置する。平面形は長軸55cm、短軸31cmのいびつな不整円形を呈し、底部は二段掘りで、深さは45cmである。二つの柱穴が切りあっている可能性も考えられたが、埋土が褐色土の単層であり一つの遺構とした。遺物は土師器皿（24～29）・坏（30～32）、土師質土器足鍋（33・34）・擂鉢（35）・羽釜（36）などが出土している。



第９図　ＳＢ６実測図



第10図　SB 7 ・ 8 実測図

ＳＫ1120（第11図　図版８）

Ⅰ地区中央部のやや北西よりに位置する。平面形は直径約80cmの円形土坑を主体として、東側に柱穴状の張り出しをもつような形を呈する。深さは52cm。遺物は土師器皿（37・38）・坏（39～43）、瓦質土器鍋（44）が出土している。

井戸

ＳＥ1002（第11図　図版８）

Ⅰ地区中央部西よりに位置する。平面形は直径79～83cmの円形を呈する。湧水のため、遺構検出面から55cmの地点で掘り下げを中止した。ＳＢ５の構成柱穴を切ることから、ＳＢ５よりも後出の遺構である。素掘の井戸で、内部からは土師器、瓦質土器（78・79・84～86）、土師質土器（80・82・83）、国産陶器（81）などの土器類や、拳大の礫が多数出土した。これらの礫や土器類は、井戸の廃絶の際に、投棄されたものと考えられる。

溝状遺構

ＳＤ１（第３・13図　図版８）

Ⅰ地区東部を南北に縦断し、南端部で西に曲がって東西に流れる溝である。東西流路の西端部は削平を受けている。検出長は34.96ｍ、幅は南北流路の北部で約90cm、中央部で178cm、東西流路の中央部で96cmとなる。深さは15～38cmである。東西流路と南北流路の交点になる地点は深さが一段と深くなり、溜め枡状の機能を有していたものと考えられる。同様の溜め枡状遺構をもつ溝の構造が、Ⅱ地区のＳＤ２でもみられる。断面形は南北流路では逆台形で、東西流路では皿状である。遺物は中世から近世のものが混在して出土しており、底部付近からも17世紀後半代の遺物が出土していることから、17世紀後半頃まで溝として機能していたものと思われる。

ＳＤ２（第３・13図）

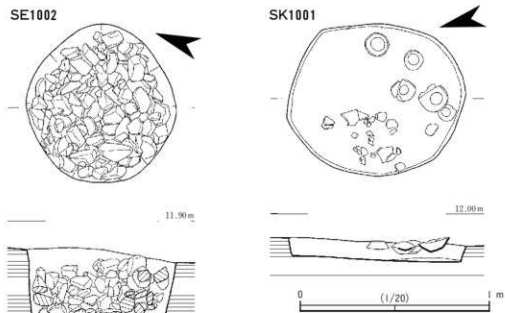
Ⅰ地区西部に位置し、ＳＤ１南北流路とほぼ並行して調査区を南北に縦断する。南端部は後世の削平を受けて消滅しており、検出長は8.32ｍである。幅は69～100cmで、深さは５～27cmである。断面形は皿状を呈する。遺物は土師器坏（250）、瓦質土器足鍋（251）が出土している。そのほか、土師器片、瓦質土器片、土師質土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＤ３（第３・13図）

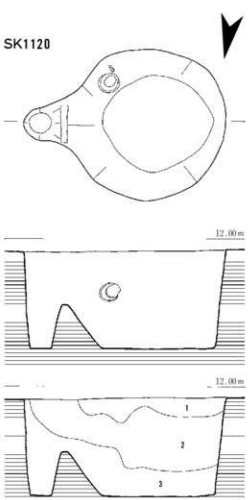
Ⅰ地区西部、ＳＤ２の東側に位置し、ＳＤ２に並行して南北に流れる。長さは3.12ｍ、幅は33～50cm、深さは３～６cmで、他の柱穴などに切られていることから、上面は削平を受けているものと思われる。断面形は皿状を呈する。遺物は土師器片、瓦質土器片、土師質土器片が出土しているが、いずれも小片のため図化していない。

ＳＤ４（第３・13図）

Ⅰ地区東端に位置し、調査区を南北に縦断する。調査区北端と南端では、やや東に湾曲ぎみとなる。検出長は12.96ｍ、幅は70～112cm、深さは４～20cmで、溝の幅は北側につれて広くなる。断面形は皿状を呈する。遺物は土師器坏（252・253）、土師質土器（254・255）、国産陶磁器（256～259）などが出土している。



第11図　SE1002、SK1001・1120実測図



柱穴

ＳＰ1116（第14図　図版９）

Ｉ地区中央部に位置する。平面形は直径21～24cmの円形を呈し、深さは21cmである。埋土は単層で、褐色土である。埋土中から、焼土と炭化物が集中して検出されたが、遺構壁面に被熱痕はない。遺物は出土していない。

ＳＰ1138（第14図　図版９）

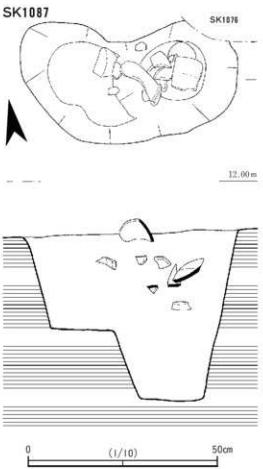
Ｉ地区西部に位置する。平面形は直径61～64cmの円形を呈し、深さは76cmである。埋土は単層で、褐色土である。埋土中から、土師器皿（324・326）が出土している。

ＳＰ1154（第14図　図版９）

Ｉ地区西部に位置する。平面形は直径50～56cmの円形を呈し、深さは８cmである。埋土は単層で、炭化物を含む褐色土である。埋土中から、土師器坏（333）が出土している。

ＳＰ1186（第14図　図版９）

Ｉ地区南西部に位置する。平面形は長軸48cm、短軸32cmの長円形を呈し、深さは41cmである。底面は二段掘りである。埋土は単層で、褐色土である。埋土上層で人頭大の角礫を検出した。遺物は出土していない。



第12図　SK1087実測図

ＳＰ1206（第15図　図版９）

Ⅰ地区中央部南よりに位置する。平面形は直径30～37cmのややいびつな円形を呈する。深さは46cmで、埋土は単層で、褐色土である。遺物は土師器片、瓦質土器足鍋が出土している。いずれも残存状況が悪く、図化していない。

ＳＰ1222（第15図　図版９）

Ⅰ地区中央部南よりに位置する。平面形は直径34～39cmのややいびつな円形を呈する。深さは51cmである。埋土は単層で、褐色土である。10～16cm大の角礫が重なりあうように出土している。遺物は出土していない。

ＳＰ1251（第15図　図版９）

Ⅰ地区中央部東よりに位置する。平面形は直径22cmの円形を呈し、深さは26cmである。埋土は単層で、炭化物を多く含む褐色土である。遺物は土師質土器甕（352）が出土している。そのほかに土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＰ1252（第15図　図版９）

Ⅰ地区中央部東よりに位置する。平面形は直径11～13cmのややいびつな円形を呈し、深さは18cmである。埋土は単層で、褐色土である。遺物は土師器坏（328）、銅滓が出土している。

ＳＰ1275（第15図）

Ⅰ地区中央部に位置するＳＢ５の構成柱穴である。平面形は直径28～30cmの円形を呈し、深さは45cm。埋土は単層で、にぶい黄褐色土である。底面から花崗岩の円礫が出土している。他の構成柱穴とくらべ底面の標高が低いため、根石として設置された可能性が考えられる。しかし、ＳＢ５のほか、今回の調査で検出した掘立柱建物跡の構成柱穴では根石が確認されておらず、確証はもてない。遺物は土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

（２）Ⅱ地区

今回の調査で検出した遺構は掘立柱建物跡10棟、柵列１基、土坑20基、溝状遺構14条、柱穴多数、竪穴状遺構３基である。基本層序は上から順に、１層：表土（耕作土もしくは住宅造成土の客土）、２層：水田盤土（１層が耕作土の場合）、３層：明赤褐色粘土（地山）となる。この３層：地山が遺構面となる。調査区北西部分国土座標Ｘ＝-212100、Ｙ＝-66070付近の地山面が落ち込む箇所では、２層と３層の間に赤褐色粘質土が堆積している。この赤褐色粘質土には土師器片が多く含まれる。

調査区中央では、遺構面が大きく段落ちする箇所があり、その段落ちを境として、段落ち上面（調査区東側）では調査区中央部に、段落ち下面（調査区西側）では調査区中央よりやや北側に遺構が集中する傾向にある。また、調査区東側ではＳＤ１を境に南側では遺構が希薄になるため、ＳＤ１が南

北の区画溝としての機能を有していたものと考えられる。

掘立柱建物跡

ＳＢ９（第16図　図版６）

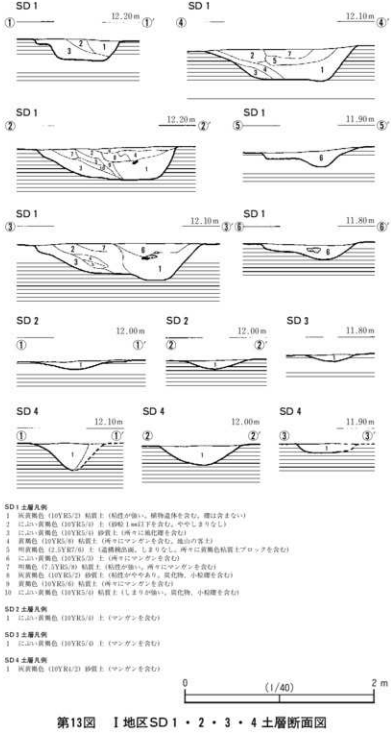
Ⅱ地区中央部南よりに位置する。２間×２間の建物で、棟方向は南北である。柱穴の規模は直径36～49cm、深さは15～22cmである。遺物は土師器皿（４）が出土している。このほかに土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ10（第16図）

Ⅱ地区中央部東側に位置し、ＳＢ11と重複する。１間×１間の建物で、棟方向は南北である。柱穴の規模は直径13～25cm、深さが９～20cmである。遺物は土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ11（第17図）

Ⅱ地区中央部東側に位置し、ＳＢ10・ＳＢ12と重複する。２間×１間の建物で棟方向は南北である。柱穴の規模は直径16～34cm、深さは12～43cmである。遺物は土師質土器片が出土しているが、小片のため図化していない。



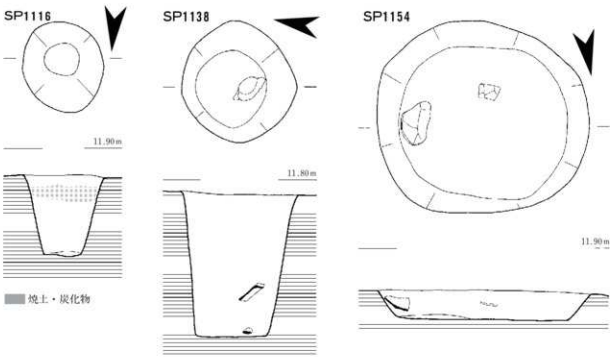
第13図　Ⅰ地区SD１・２・３・４土層断面図

ＳＢ12（第17図）

Ⅱ地区中央部東側に位置し、ＳＢ11と重複する。１間×１間の建物で、棟方向は東西である。柱穴の規模は直径19～28cmで、深さは7～26cmである。遺物は瓦質土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ13（第18図）

Ⅱ地区中央部西側に位置し、ＳＢ14・ＳＢ15と重複する。建物の西半分は調査区外にのびる可能性が高く、現状では２間×１間の建物であるが、本来は梁行が２間、桁行が２間以上の、棟方向が東西



第14図　SP1116・1138・1154・1186実測図

の建物になると考えられる。柱穴の規模は直径31～42cm、深さが6～41cmである。遺物は土師器坏（7）が出土している。そのほか、土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ14（第18図）

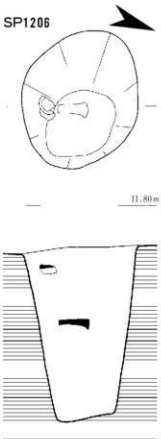
Ⅱ地区中央部西側に位置し、ＳＢ13・ＳＢ15・ＳＢ16・ＳＢ17と重複する。2間×1間の東側に庇が取り付く建物で、棟方向は東西である。南西隅の柱穴は調査区外にあたるため、検出していない。柱穴の規模は身舎が直径30～60cm、深さ17～38cmで、庇部分が直径18～20cm、深さが5～9cmである。遺物は土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

ＳＢ15（第19図）

Ⅱ地区中央部西側に位置し、ＳＢ13・ＳＢ14・ＳＢ16・ＳＢ17と重複する。現状では2間×2間の建物である。南西隅の柱穴は調査区外にあたるため、検出していない。また、ＳＢ17の構成柱穴を切ることから、ＳＢ17よりも後出の遺構である。柱穴の規模は直径35～39cm、深さが19～61cmである。遺物は土師器皿（1）・坏（9）が出土している。

ＳＢ16（第19図）

Ⅱ地区中央部西側に位置し、ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ17と重複する。現状で2間×2間の建物で北側梁の中央と南西隅の柱穴は調査区外にあたるため、検出していない。柱穴の規模は直径23～45cm、深



さが7～60cmである。遺物は土師器坏(8)、土師質土器擂鉢(15)が出土している。

ＳＢ17（第20図）

Ⅱ地区中央部西側に位置し、ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ16と重複する。北東隅の柱穴を欠くが、2間×2間の建物で、棟方向は東西である。ＳＰ2350がＳＫ2359に切られるため、ＳＫ2359に先行する遺構である。柱穴の規模は直径22～46cm、深さが11～53cmである。遺物は土師器皿（2）・坏（11）が出土している。

ＳＢ18（第21図　図版7）

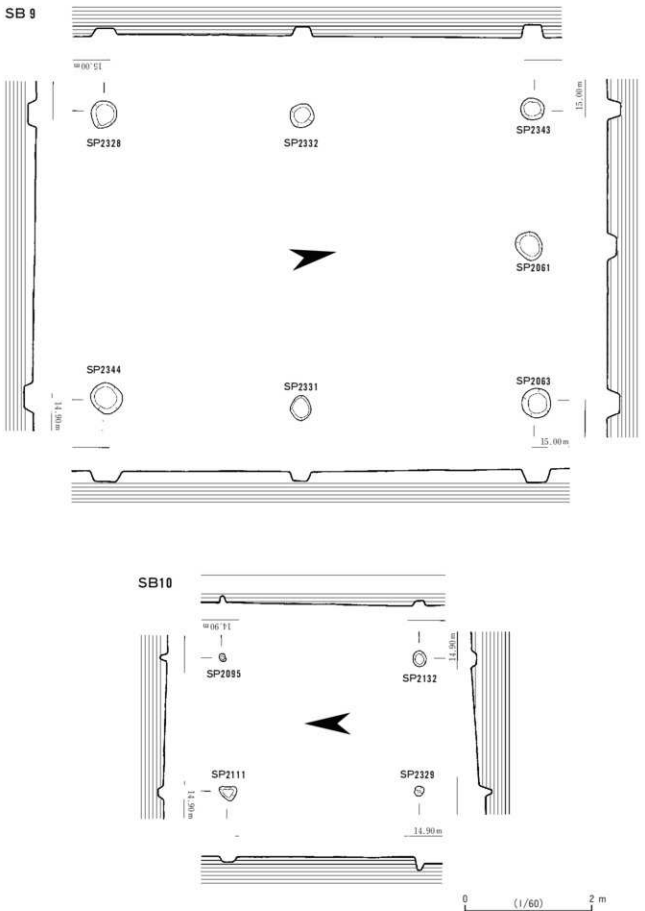
Ⅱ地区中央部北よりに位置する。3間×2間の建物で、棟方向は南北である。柱穴の規模は直径17～40cm、深さ15～50cmである。桁方向の北から2番目の列は梁中央にも柱穴をもつが、庇としては柱間が広いため、住空間の区切りとして設けられたものと考えられる。遺物は土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

櫓列

ＳＡ1（第4図）

Ⅱ地区南部で検出した4間（6.7m）の櫓列である。主軸は南北方向で、ＳＤ1南北流路の東側に位置する。遺物等は出土してい

第15図　SP1206・1222・1251・1252・1275実測図



第16図　SB９・10実測図

ない。

土坑

ＳＫ2005（第22図　図版10）

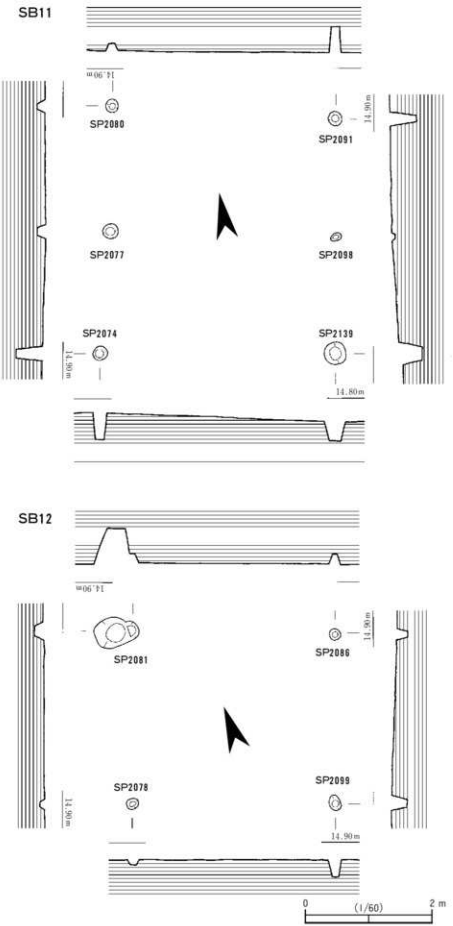
Ⅱ地区中央部南よりに位置する。長軸180cm、短軸93cmのいびつな長円形を呈する。底部は二段掘りで、深さは24cmである。遺物等は出土していない。

ＳＫ2089（第22図　図版10）

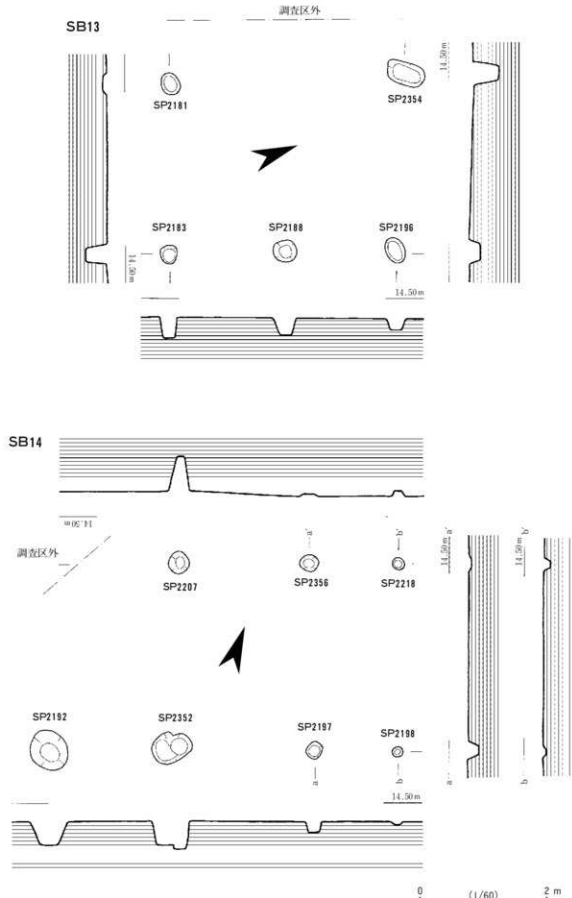
Ⅱ地区中央部東端に位置する。遺構の東半分は調査区外にあたり、西半分のみ検出した。現状で、平面形は長軸128cm、短軸54cmの不整円形で、深さは20cmである。遺物は土師器 Ⅲ（54～56）・坏（57～60）、瓦質土器足鍋（61）が出土した。遺物のほかに、遺構内からは拳大から人頭大の礫が検出された。すべて土坑内に廃棄されたものと考えられる。

ＳＫ2115（第22図　図版10）

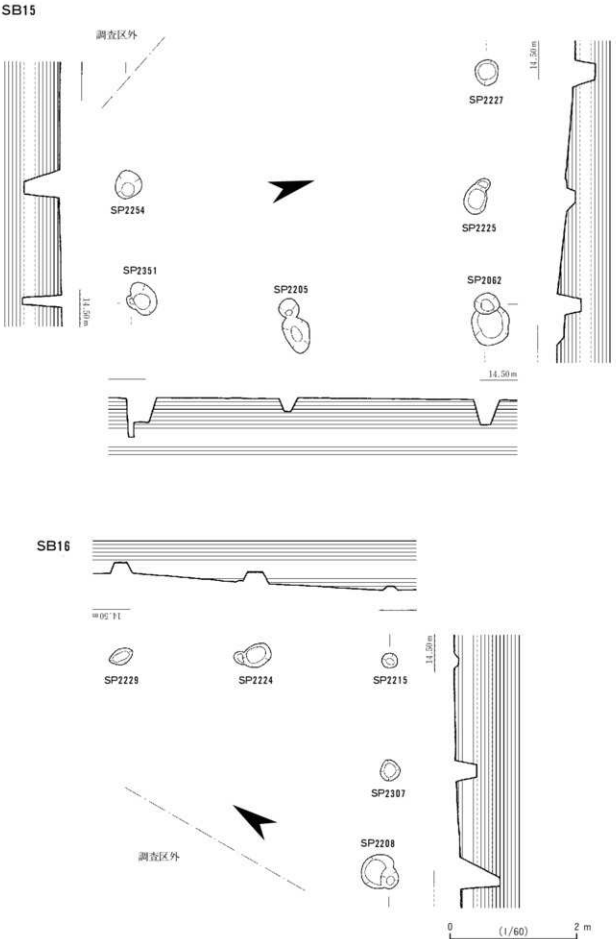
Ⅱ地区中央部東端に位置する。ＳＤ２に切られることから、ＳＤ２より先行する遺構である。平面形は長軸92



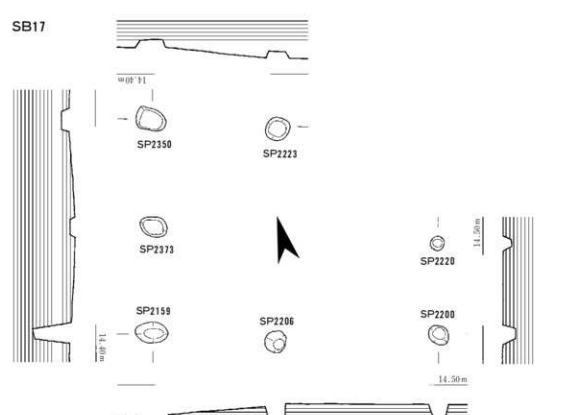
第17図　SB11・12実測図



第18図　SB13・14実測図



第19図　SB15・16実測図



第20図　SB17実測図

cm、短軸66cmの長円形を呈する。深さは13cm。遺構内からは20～30cm大の礫が出土しているが、すべて地山に含まれる礫である。遺物は瓦質土器擂鉢（70）が出土している。

ＳＫ2358（第22図　図版11）

Ⅱ地区中央部西端に位置する。遺構の西半分は調査区外にあたり、東半分のみを調査した。現状で、平面形は長軸121cm、短軸70cmの半円形を呈し、深さは26cmである。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化していない。

ＳＫ2359（第23図　図版11）

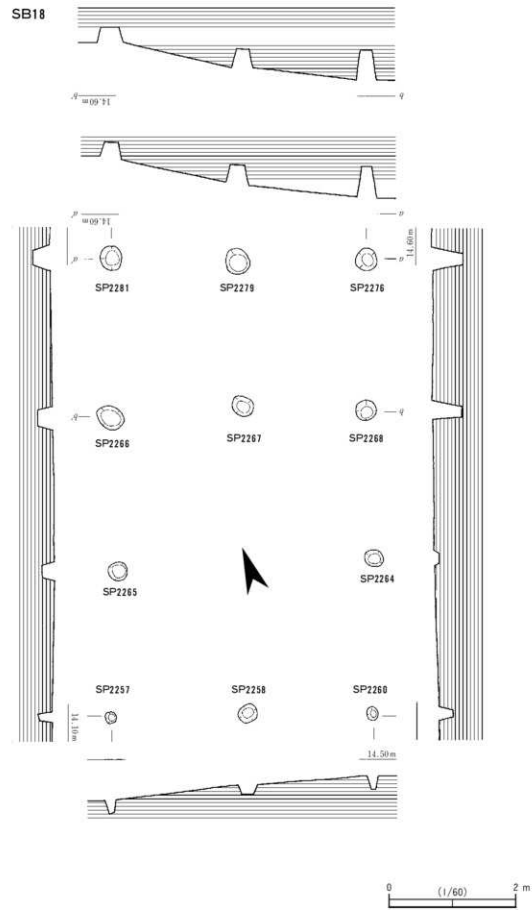
Ⅱ地区中央部西端に位置する。平面形は長軸162cm、短軸52cmの長円形を呈し、深さは６cmである。ＳＢ17の構成柱穴であるＳＰ2350を切ることから、ＳＢ17よりも後出の遺構である。埋土は単層で、にぶい黄褐色土である。遺物は土師器皿（62～65）・坏（66～69）が出土しており、供膳具が一括廃棄されている様相を呈する。

ＳＫ2367（第23図　図版11）

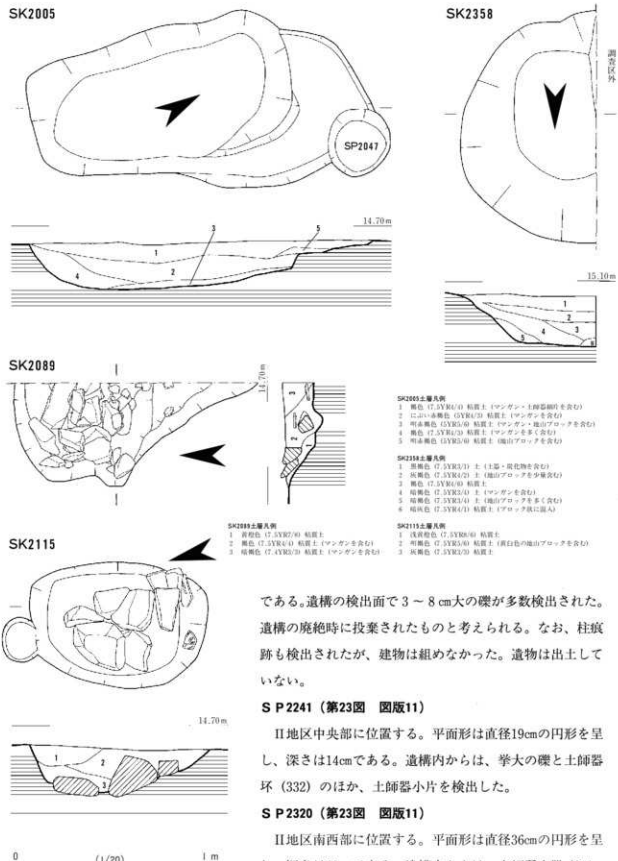
Ⅱ地区中央部南東より、ＳＢ９の東側に位置する。平面形は長軸161cm、短軸98cmのいびつな長円形を呈し、深さは21cmである。遺構内からは土師器坏（71）、瓦質土器足鍋（72）・鍋（73）、砥石（454）と、拳大から人頭大の礫を検出した。

ＳＰ2160（第23図　図版11）

Ⅱ地区中央部東側に位置し、ＳＤ２に切られる。平面形は直径26～29cmの円形を呈し、深さは41cm



第21図　SB18実測図



第22図　SK2005・2089・2115・2358実測図

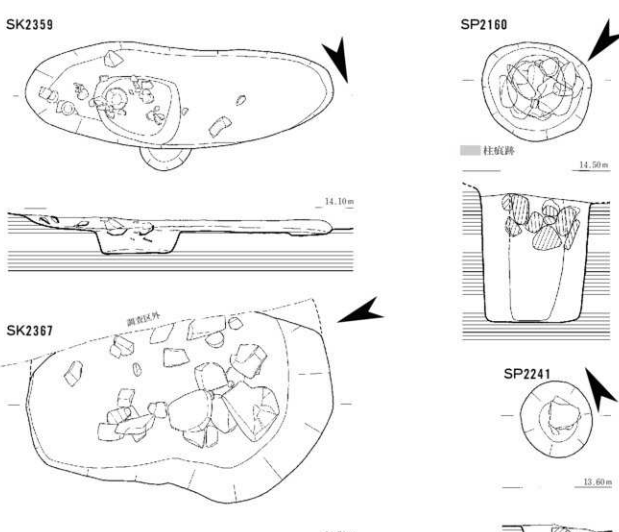
である。遺構の検出面で3～8㎝大の礫が多数検出された。遺構の廃絶時に投棄されたものと考えられる。なお、柱痕跡も検出されたが、建物は組めなかった。遺物は出土していない。

ＳＰ2241（第23図　図版11）

Ⅱ地区中央部に位置する。平面形は直径19cmの円形を呈し、深さは14cmである。遺構内からは、拳大の礫と土師器坏（332）のほか、土師器小片を検出した。

ＳＰ2320（第23図　図版11）

Ⅱ地区南西部に位置する。平面形は直径36cmの円形を呈し、深さは20cmである。遺構内からは、土師質土器（351・353・354）が折り重なるようにして出土した。土師質土器甕（351）は、東側に位置するＳＤ１出土の破片と接合した。



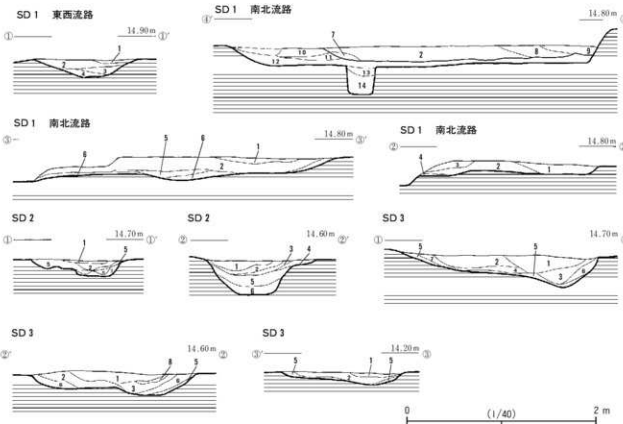
第23図　SK2359・2367、SP2160・2241・2320実測図

溝状遺構

Ⅱ地区では14条の溝状遺構を検出した。これらのうち規模が大きく主要な遺構について、ここでは説明を加える。そのほかの溝状遺構については第２表に一覧を掲示する。

ＳＤ１（第４・24図　図版10）

Ⅱ地区南部に位置する。ＳＢ９の南側を東西に流れ、国土座標Ｙ＝-66070の地点付近で、南側に流路が曲がる。南北流路では西側の溝の立ち上がりが確認できず、南北流路は段落ちの可能性もある。南北流路側では、底面で柱穴や落ち込みなどの遺構を検出した。検出長は27.52ｍで、幅は92～172cm、深さは7～14cmである。南北流路の断面形は、擂鉢状となる。遺物は土師器（260～268）、瓦質土器（269・273・274・281）、土師質土器



第24図　Ⅱ地区SD１・２・３土層断面図

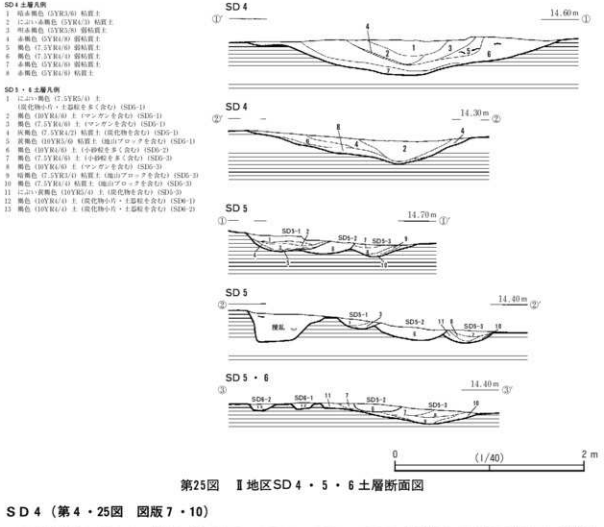
(270～272・275～277・280)、国産陶磁器（278・279）などが出土している。

ＳＤ２（第４・24図　図版10）

Ⅱ地区中央部東側に位置する。東端部では南北に流れ、国土座標Ｘ＝-212120付近で東西方向へ流路を変え、５ｍほど西に行くと再び南北方向へと流路を変える。検出長は12.08ｍ、幅は34～121㎝、深さは4～10㎝である。東西流路と南北流路の交点では、Ⅰ地区ＳＤ１でみられたような溜め枡状に溝が掘削されている。この溜め枡状遺構の規模は長さ2.5ｍ、幅70～100㎝、深さ34㎝である。断面形は逆台形である。遺物は土師器坏（282～284）、瓦質土器（285・286）が出土している。

ＳＤ３（第４・24図　図版７・10）

Ⅱ地区北部に位置し、ＳＤ４～６と並行して調査区を東西に縦断する。検出長は8.64ｍ、幅は94～209㎝、深さは５～26㎝である。断面形はいびつな逆台形である。遺物は土師器皿（287）、瓦質土器（288～293）、鉛弾（460）などが出土している。



第25図　Ⅱ地区SD４・５・６土層断面図

ＳＤ４（第４・25図　図版７・10）

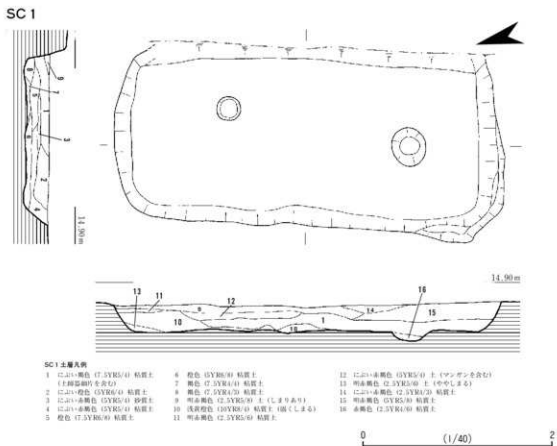
Ⅱ地区北部、ＳＤ３の北側に位置する。ＳＤ３・ＳＤ５・ＳＤ６と並行して調査区を東西に縦断する。検出長は11.36ｍ、幅は76～333ｃｍ、深さは２～31ｃｍである。溝の西端は地形の低くなる溝の南西部（国土座標Ｘ＝-212100付近）へ向かって流れる。断面形は皿状となる。遺物は土師器（309･310）、瓦質土器（311・314・315・318・319）、土師質土器（312・313・316・317）が出土している。

ＳＤ５（第４・25図　図版７・10）

Ⅱ地区北端部に位置し、ＳＤ３・ＳＤ４・ＳＤ６と並行して調査区を東西に縦断する。若干の時期差をもつと考えられる流路の違いにより、北から順にＳＤ５-１、ＳＤ５-２、ＳＤ５-３にわけられ、土層観察の結果から、流路は南から変化したものと考えられる。検出長はＳＤ５-１が1.74ｍ、ＳＤ５-２が4.72ｍ、ＳＤ５-３が8.72ｍである。断面形はいずれも皿状となる。遺物は土師器（294・295）、瓦質土器（296～298）、土師質土器（299）が出土している。

ＳＤ６（第４・25図　図版７・10）

Ⅱ地区北端部、ＳＤ５の北に位置する。ＳＤ３～５と並行する東西流路である。ＳＤ５と同じく時期差による流路の違いにより、ＳＤ６-１、ＳＤ６-２にわかれる。検出長はそれぞれ、3.8ｍ、3.1ｍで、断面形はいずれも逆台形である。遺物は陶器擂鉢（300）が出土しているほか、土師器、土師質土器、瓦質土器が出土しているが、いずれも小片のため図化していない。



第26図　SC１実測図

竪穴状遺構

Ⅱ地区ではこの種の遺構を３基検出した。いずれも方形系統の平面形を呈すが、明確な柱穴をもたず、竪穴住居とするには構成要件がそろわないため、竪穴状遺構とした。

ＳＣ１（第26図　図版５）

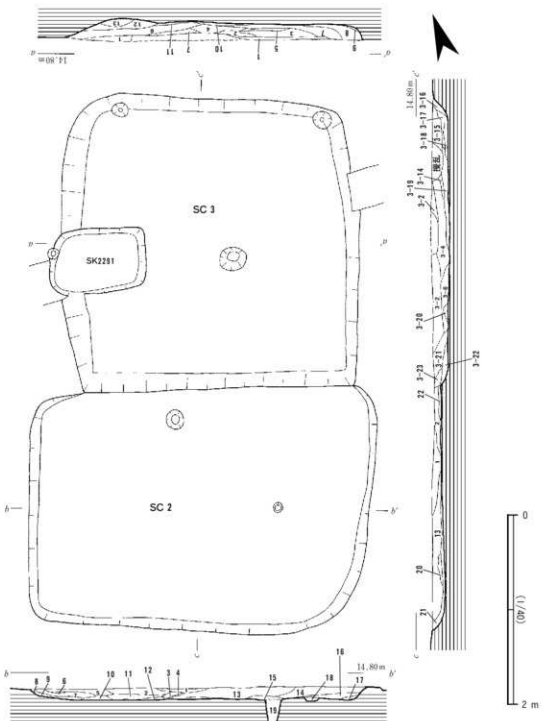
Ⅱ地区南東端部に位置する。遺構の東半分は調査区外にあたるため、西半分のみ調査を行った。現状で長辺4.1ｍ、短辺1.9ｍの隅丸長方形の平面形を呈する。床面で柱穴状の掘り込みを２カ所検出したが、いずれも深さが３～４㎝と浅く、また配置も不規則なことから、柱穴と判断しがたい。遺物は出土していない。

ＳＣ２（第27図　図版６）

Ⅱ地区中央部東側に位置する。ＳＣ３と重複する。土層観察の結果、ＳＣ３がＳＣ２を切ることが判明した。長辺3.0～3.5ｍ、短辺2.1～2.4ｍの隅丸長方形の平面形を呈する。北辺中央部付近の床面で柱穴を１個検出したが、この遺構に伴うものではないと考えられる。遺物は土師器皿（355・356）、瓦質土器（357～362）、土師質土器（363～365）、国産磁器（366）が出土している。

ＳＣ３（第27図　図版６）

Ⅱ地区中央部東側に位置し、ＳＣ２と重複する。土層観察の結果、ＳＣ２を切り、ＳＣ２よりも後出する遺構であることが判明した。長辺2.9～3.0ｍ、短辺2.6～2.9ｍの隅丸方形の平面形を呈する。遺構中央部で柱穴を１個検出しているが、本遺構よりも後出の遺構であり、本遺構に伴う柱穴ではない。遺物は土師器坏（367・368）、瓦質土器（370～374）、土師質土器（375）、国産陶器（369）が出土している。



SC 2 土層凡例

1 褐色 (2.5YR4/6) 土（マンガンを含む）
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土（マンガン・炭化物を含む）
3 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土（マンガンを含む）
4 橙色 (7.5YR6/8) 粘質土
5 黄褐色 (10YR5/8) 土（マンガン・地山ブロックを含む）
6 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土（マンガン・土師器細片を含む）
7 明黄褐色 (10YR6/6) 土（マンガンを含む）
8 橙色 (7.5YR6/8) 粘質土（地山ブロックを含む）
9 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土
10 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
11 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土（マンガンを含む）
12 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
13 灰褐色 (7.5YR4/2) 土（マンガン・地山ブロックを含む）
14 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土（マンガン・灰色砂質土ブロックを含む）
15 褐色 (10YR4/4) 土
16 にぶい赤褐色 (5YR4/4) 粘質土（地山ブロックを含む）
17 褐色 (7.5YR4/3) 土（マンガン・地山ブロックを含む）
18 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土
19 褐色 (10YR4/6) 粘質土（SP2007埋土）
20 明褐色 (7.5YR5/8) 粘質土
21 褐色 (10YR4/6) 土（地山ブロックを含む）
22 にぶい褐色 (7.4YR5/3) 土（灰色砂質土を含む）

第27図　SC 2・3 実測図

SC 1 土層凡例

1 褐色 (2.5YR4/6) 土（マンガンを含む）
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土（マンガン・炭化物を含む）
3 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土（マンガンを含む）
4 橙色 (7.5YR6/8) 粘質土
5 黄褐色 (10YR5/8) 土（マンガン・地山ブロックを含む）
6 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土（マンガン・土師器細片を含む）
7 明黄褐色 (10YR6/6) 土（マンガンを含む）
8 橙色 (7.5YR6/8) 粘質土（地山ブロックを含む）
9 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土
10 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
11 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土（マンガンを含む）
12 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
13 灰褐色 (7.5YR4/2) 土（マンガン・地山ブロックを含む）
14 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土（マンガン・灰色砂質土ブロックを含む）
15 褐色 (10YR4/4) 土
16 にぶい赤褐色 (5YR4/4) 粘質土（地山ブロックを含む）
17 褐色 (7.5YR4/3) 土（マンガン・地山ブロックを含む）
18 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土
19 褐色 (10YR4/6) 粘質土（SP2007埋土）
20 明褐色 (7.5YR5/8) 粘質土
21 褐色 (10YR4/6) 土（地山ブロックを含む）
22 にぶい褐色 (7.4YR5/3) 土（灰色砂質土を含む）

第27図　SC 2・3 実測図

（３）Ⅲ地区

Ⅲ地区では土坑１基、溝状遺構２条、柱穴４個を検出した。基本層序は上から順に、１層：耕作土、２層：水田盤土、３層：明赤褐色粘質土（地山）である。遺構密度はⅠ・Ⅱ地区と比較すると、希薄である。遺物等はほとんど出土しておらず、ＳＤ２から土師器坏（320）が出土している程度である。

第１表　掘立柱建物跡一覧表

地区	遺構番号	棟方向	建物の方位	規模（桁行×梁行）	出土遺物	備考
Ⅰ	ＳＢ１	東西	N71°W	１間（2.5m）×１間（2.1m）	土師器	
Ⅰ	ＳＢ２	東西	N83°E	１間（1.8m）×１間（1.5m）	土師器	
Ⅰ	ＳＢ３	南北	N５°E	３間（5.7m）×１間（3.5m）	土師器、瓦質土器	12～13世紀
Ⅰ	ＳＢ４	東西	N87°E	２間（3.3m）×１間（3.2m）	土師器、土師質土器	
Ⅰ	ＳＢ５	南北	N３°E	２間（4.5m）×２間（4.1m）	土師器、瓦質土器	総柱建物 13世紀
Ⅰ	ＳＢ６	南北	N１°W	３間（7.4m）×２間（4.7m）	土師器、瓦質土器、土師質土器	15世紀
Ⅰ	ＳＢ７	南北	N19°W	２間（4.1m）×２間（3.0m）	土師器、瓦質土器、土師質土器	13世紀
Ⅰ	ＳＢ８	南北	N０°E	２間（6.1m）×１間（2.4m）	土師器	13世紀
Ⅱ	ＳＢ９	南北	N７°E	２間（6.8m）×２間（4.6m）	土師器	14～15世紀
Ⅱ	ＳＢ10	南北	N５°W	１間（3.1m）×１間（2.1m）	土師器	
Ⅱ	ＳＢ11	南北	N10°E	２間（3.7m）×１間（3.7m）	土師質土器	
Ⅱ	ＳＢ12	東西	N70°W	１間（3.2m）×１間（2.7m）	瓦質土器	
Ⅱ	ＳＢ13	東西	N70°W	２間（3.6m）×１間（2.7m）	土師器	15～16世紀
Ⅱ	ＳＢ14	東西	N61°E	２間（4.2m）×１間（3.0m）	土師器	東側に庇付
Ⅱ	ＳＢ15			２間（5.4m）×２間（3.7m）	土師器	14～15世紀
Ⅱ	ＳＢ16	南北	N35°W	２間（4.3m）×２間（3.5m）	土師器、土師質土器	14～15世紀
Ⅱ	ＳＢ17	東西	N78°W	２間（4.5m）×２間（3.5m）	土師器	12～13世紀
Ⅱ	ＳＢ18	南北	N24°E	３間（7.2m）×２間（4.1m）	土師器	

第２表　土坑・柱穴一覧表

地区	遺構番号	平面形	規模（cm）		〔現存値〕	出土遺物	備考	時期
			長軸	短軸	深さ			
Ⅰ	ＳＫ1001	円	93	80	10	土師器、黒色土器、瓦質土器、土師質土器		10世紀後半
Ⅰ	ＳＫ1087	不整円	55	31	45	土師器、土師質土器		14世紀後半～15世紀前半
Ⅰ	ＳＫ1120	不整円	106	80	52	土師器、瓦質土器		13世紀
Ⅰ	ＳＥ1002	円	83	79	〔 55 〕	土師器、瓦質土器、土師質土器 国産陶器		15世紀
Ⅰ	ＳＰ1116	円	24	21	21			
Ⅰ	ＳＰ1138	円	64	61	76	土師器		13世紀
Ⅰ	ＳＰ1154	円	56	50	8	土師器		13世紀
Ⅰ	ＳＰ1186	長円	48	32	41			
Ⅰ	ＳＰ1206	円	37	30	46	土師器、瓦質土器		
Ⅰ	ＳＰ1222	円	39	34	51			
Ⅰ	ＳＰ1251	円	22	22	26	土師器、土師質土器		
Ⅰ	ＳＰ1252	円	13	11	18	土師器、銅滓		14、15世紀
Ⅰ	ＳＰ1275	円	30	28	45	土師器	ＳＢ５構成柱穴	13世紀
Ⅱ	ＳＫ2005	長円	180	93	24			
Ⅱ	ＳＫ2089	不整円	128	〔 54 〕	20	土師器、瓦質土器		16世紀前半
Ⅱ	ＳＫ2115	長円	92	66	13	瓦質土器		中世
Ⅱ	ＳＫ2291	隅丸方形	103	68	〔 32 〕		ＳＣ３に切られる	
Ⅱ	ＳＫ2358	半円	121	〔 70 〕	26	土師器		
Ⅱ	ＳＫ2359	長円	162	52	6	土師器		13世紀
Ⅱ	ＳＫ2367	長円	161	〔 98 〕	21	土師器、瓦質土器		15世紀
Ⅱ	ＳＰ2160	円	29	26	41			
Ⅱ	ＳＰ2241	円	19	19	41	土師器		
Ⅱ	ＳＰ2320	円	36	36	20	土師質土器		

（本書掲載関連遺構）

第3表　溝状遺構一覧表

地区	遺構番号	規模			出土遺物	備考
		長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)		
I	SD1	34.96	60～178	15～38	土師器、瓦質土器、土師質土器、近世陶磁器、金属製品	溜め枡状遺構をもつ16～17世紀
I	SD2	8.32	69～100	5～27	土師器、瓦質土器、土師質土器	15世紀
I	SD3	3.12	33～50	3～6	土師器、瓦質土器、土師質土器	
I	SD4	12.96	70～112	4～20	土師器、瓦質土器、土師質土器、国産陶磁器	15～16世紀
II	SD1	27.52	92～172	7～14	土師器、瓦質土器、土師質土器、国産陶磁器	15～16世紀
II	SD2	12.08	34～121	4～34	土師器、瓦質土器	溜め枡状遺構をもつ16世紀
II	SD3	8.64	94～209	5～26	土師器、瓦質土器、土師質土器、鉛弾	14～15世紀
II	SD4	11.36	76～333	2～31	土師器、瓦質土器、土師質土器	15世紀
II	SD5-1	1.74	49～60	2～4	土師器、瓦質土器、土師質土器	15世紀
II	SD5-2	4.72	33～82	4～15	土師器、瓦質土器、土師質土器	15世紀
II	SD5-3	8.72	160～175	5～18	土師器、瓦質土器、土師質土器	15世紀
II	SD6-1	3.80	30～39	4～5	土師器、瓦質土器、土師質土器	
II	SD6-2	3.10	30～130	6～14	土師器、瓦質土器、土師質土器	
II	SD7	4.16	35～74	4～12	土師器、瓦質土器、土師質土器、国産陶磁器	17世紀
II	SD8	0.81	8～12	3～4		
II	SD9	6.48	34～72	9～14		
II	SD10	2.56	18～21	2～6		
II	SD11	5.76	15～66	2～12		14～15世紀
II	SD12	2.80	32～48	3～13	瓦質土器	
II	SD13	0.88	20～29	7～8	瓦質土器	
II	SD14	1.76	18～20	4～17		
III	SD1	8.72	50～179	5～8	土師器、瓦質土器	
III	SD2	0.81	29～45	3～4	土師器	15世紀

2　遺物

出土遺物には土師器（皿・坏・埦・台付皿）・黒色土器（埦）・瓦質土器（足鍋・擂鉢・鍋・羽釜・火鉢・鉢・焙烙・茶釜・香炉）・土師質土器（足鍋・擂鉢・羽釜・火鉢・鉢・甕）・貿易陶磁器（白磁碗）・国産陶器（擂鉢・おろし皿・鉢・埦・皿・小杯）・国産磁器（碗・鉢・湯呑み・小杯・水注・紅皿）などの土器類のほか、石鍋・石臼・碁石などの石製品、煙管・棹秤用分銅などの青銅製品、平瓦・桟瓦などの瓦類がある。なお、国産陶器には、緑釉陶器（埦・皿）・灰釉陶器（長頸壺）が含まれている。時期的には緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器や一部の土師器など10世紀にさかのぼるものが含まれているが、15、16世紀を主体とした12～16世紀代のものが大半である。

遺物は掘立柱建物跡・土坑・井戸・溝・柱穴のほかⅠ・Ⅱ地区遺物包含層から出土したが、量的にはⅠ地区ＳＤ１からの出土量が最も多い。

（１）土器

掘立柱建物跡出土土器（第28図　図版14）

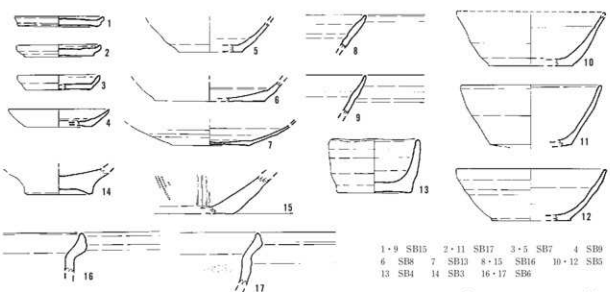
１～14は土師器。１～４は皿。１～３は斜め外上方へ短く引き出す程度の口縁部をもつ。口縁部は、直線的に引き出すもの（１・３）と内湾ぎみに引き出すもの（２）がある。４は体部が内湾ぎみに短く立ち上がり、尖りぎみの口縁部をもつ。５～13は坏。全形を知りうるものは少ない。10は体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部が直線的にやや外反する。内面の体部と口縁部の境付近には、１条沈線がめぐる。11は、直線的に立ち上がる体部から屈曲して口縁部が直線的に内傾する。12は内面の体部と口縁部の境付近に段をもち、体部から口縁部まで緩やかに内湾して立ち上がる。口縁端部の形状は異なるが、９も同様な口縁部形態であろう。11･12とも口縁端部は丸くおさめる。７は極めて薄手で、体部の立ち上がりの状況から口径に比べ器高が低い。底部外面に板目圧痕が残存する。13はロクロ成形で、小形の鉢状をなす。体部は、直立ぎみに短く立ち上がる。14は埦。断面逆台形状の安定した高台を有する。

15は土師質土器擂鉢。体部内面に４条一単位の条線によるおろし目を施す。底部外面に板目圧痕が残存する。16は土師質土器足鍋。口縁部が短く外反し、肥厚する端部内面が強いヨコナデによって内上方へ突出する。17は瓦質土器足鍋。16同様の口縁部形態をもち、頸部外面に強いヨコナデを施し、口縁部を屈曲させる。体部内面は、ヨコハケ仕上げ。

１・９はＳＢ15、２・11はＳＢ17、３・５はＳＢ７、４はＳＢ９、６はＳＢ８、７はＳＢ13、８・15はＳＢ16、10・12はＳＢ５、13はＳＢ４、14はＳＢ３、16・17はＳＢ６出土。

土坑出土土器（第29・30図　図版14～16）

18～23はＳＫ1001出土。18～20は土師器坏。体部が内湾しながら立ち上がり、そのまま緩やかに口縁部に移行するもの(18)、底部と体部の境に明瞭な稜をもたず、体部が直線的に立ち上がり、長めの口縁部が屈曲して直線的に外反するもの(19)、体部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる大型のもの(20)がある。20は静止糸切り。21は黒色土器埦。Ｂ類。外下方へ開く断面逆台形状の高台をもち、体部から口縁部まで緩やかに外反する。内面の口縁端部直下には、１条沈線がめぐる。内外面とも丁寧な横方向のヘラミガキ、底部外面は並行するヘラミガキが施される。22は瓦質土器坏。口縁部は外湾ぎみに短く外反し、端部はやや肥厚する。23は土師質土器甕。口縁部は体部から稜をもたずに緩や



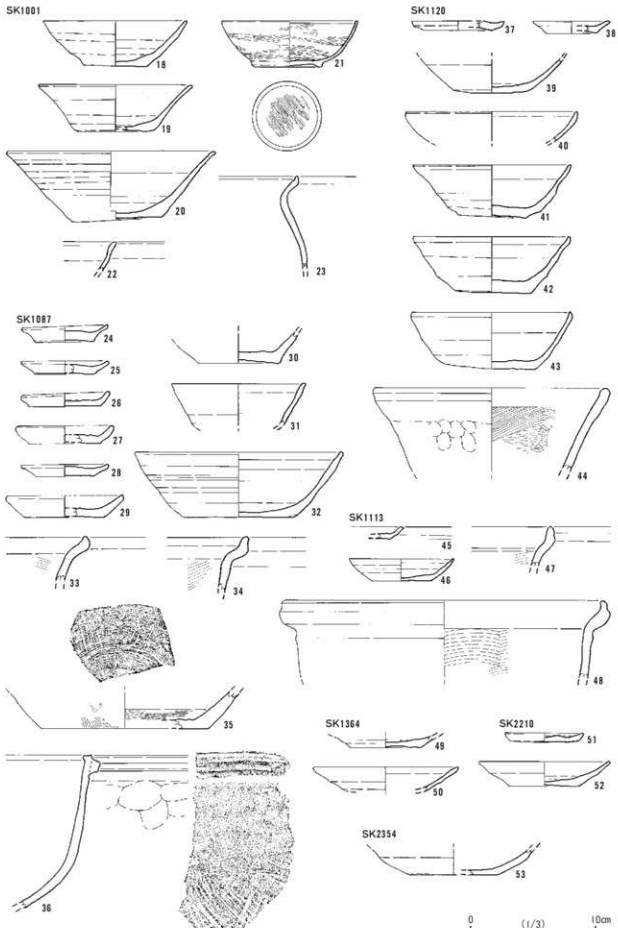
第28図　掘立柱建物跡出土土器実測図

かに外反し、端部内面は内上方へやや突出する。

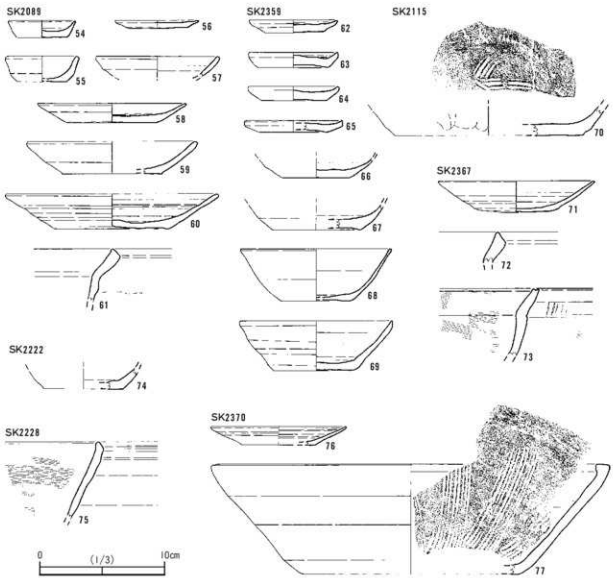
24～36はＳＫ1087出土。24～32は土師器。24～29は皿。体部が直線的に立ち上がり、口縁端部を平坦に面取りし内面が尖るもの（24・25）、底部から口縁部へほぼ同じ器壁で内湾ぎみに立ち上がり、端部を丸く仕上げるもの（26・27）、底部から口縁部へ直線的に立ち上がり、丸い口縁端部内面を尖りぎみに仕上げるもの（28・29）などがある。回転糸切りが底部側面まで及ぶもの（24・25）がみられる。法量的に数種ある。30～32は坏。30は底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的に比較的急角度で立ち上がる。31は体部から口縁部へ直線的に開き、口縁端部に水平な面をもつ小型品。調整がやや粗雑。32は体部が内湾ぎみ緩やかに立ち上がり、口縁端部は内外からの強いヨコナデによって先細りとなる。底部側面には、成形時の粘土帯の付加がみられる。

33・34は土師質土器足鍋。33は体部から口縁部への屈曲が弱く、端部はあまり肥厚せずに外反する。外面の口縁部下半以下に煤が付着する。34は、短く外反する口縁部の端部をさらに上方へ直立させる。33・34とも体部内面ナナメハケ仕上げ。35は土師質土器擂鉢。内面に４条一単位の条線によるおろし目を施す。外面ナナメハケ、内面ヨコハケのちヨコナデ仕上げ。36は土師質土器羽釜。体部は直立ぎみに直線的に立ち上がり、外面の口縁端部よりやや下位に幅広、中くぼみの断面台形状の鍔部を設ける。水平に近い口縁端部の内面は、内側にやや突出する。外面の鍔部直下は、指圧整形痕が顕著に残る。底部は、外面への粗雑な平行タタキにより整形する。底部外面には煤が付着する。

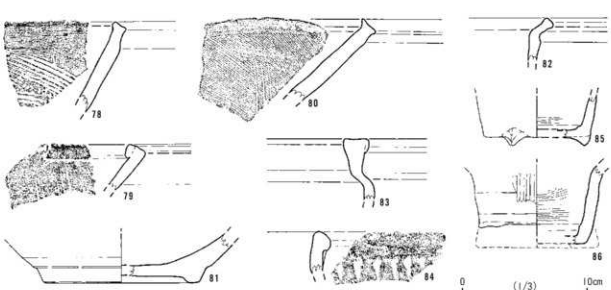
37～44はＳＫ1120出土。37～43は土師器。37・38は皿。底部側面を上方へわずかに引き出しただけのもの（37）、体部から口縁部へ外湾ぎみに短く外反するもの（38）がある。39～43は坏。39は底部と体部の境が不明瞭で、体部が内湾ぎみに緩やかに立ち上がる。40は、体部から口縁部へ内湾しながら緩やかに立ち上がる。内外面にヨコナデによる稜を残さない。41は体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はわずかに屈曲して内湾ぎみに開く。42は体部が直線的に立ち上がり、口縁部は内外面への強いヨコナデによってわずかに内湾ぎみに外反する。口縁部内面に煤が付着する。43は、体部から口縁部まで内湾ぎみに開く。42・43とも口縁端部は面取りぎみになり、内面は尖る。44は瓦質土器鍋。在地



第29図　土坑出土土器実測図(１)



第30図　土坑出土土器実測図(２)



第31図　SE1002出土土器実測図

産の鍋とは異形で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する。口縁端部はやや肥厚し、丸くおさめる。口縁部外面は強くヨコナデされる。体部は外面指圧整形のちナデ、内面ヨコ・ナナメハケ仕上げ。

45～48はＳＫ1113出土。45・46は土師器。45は皿。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は面取りぎみにやや平坦におさめる。口縁部内面に赤色塗彩がみられる。46は坏。体部から口縁部まで内湾ぎみに立ち上がり、端部は尖りぎみにおさめる。口縁部内外面を赤色塗彩する。47・48は瓦質土器足鍋。47は口縁部が内湾ぎみに短く屈曲し、端部を上方へ突出させる。体部内面ナナメハケ仕上げ。48は体部から屈折して外反する口縁部が肥厚し、端部を内上方へ突出させる。頸部外面を強くヨコナデし、体部内面は粗めのヨコハケ仕上げ。体部外面に煤が付着する。

49・50はＳＫ1364出土の土師器坏。49は底部外面に板目圧痕が残存する。50は体部が直線的に立ち上がり、口縁部はやや肥厚して端部を尖りぎみにおさめる。

51・52はＳＫ2210出土。51は土師器皿。斜め外上方へ短く引き出す程度の口縁部をもつ。52は土師器坏。内湾ぎみに開く体部をもち、口縁部外面への強いヨコナデによって口縁部を外反させる。

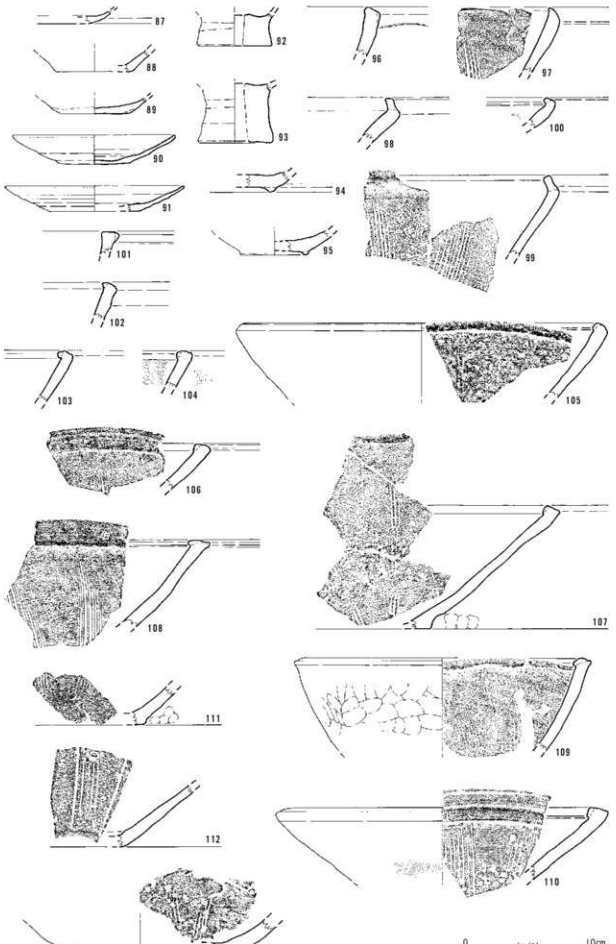
53はＳＫ2354出土の土師器坏。体部は内湾して立ち上がり、底部外面には板目圧痕がみられる。

54～61はＳＫ2089出土。54～60は土師器。54～56は皿。54・55は、口径に比べて器高が高い。体部が内湾して立ち上がり、口縁端部が尖りぎみに先細りになるもの（54）と体部とほぼ同じ器壁で口縁部に移行し、端部を丸くおさめるもの（55）がある。56は斜め外上方へ直線的に短く引き出す程度の口縁部をもつ。底部外面には板目圧痕が残存する。57～60は坏。57は体部から口縁部へそのまま内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。58は口径に比べて器高が低く、体部から口縁部へそのまま直線的に開く。口縁端部は尖りぎみに仕上げる。59は体部から口縁部へほぼ同じ器壁で内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。60は口径に比べて器高が低く、体部から口縁部へそのまま直線的に開く。口縁端部は尖らない。内外面にはヨコナデ整形痕が顕著にみられる。58・60は底部外面に板目圧痕が残存する。61は瓦質土器足鍋。口縁部はしまりのない頸部から短く外反し、端部が肥厚する。

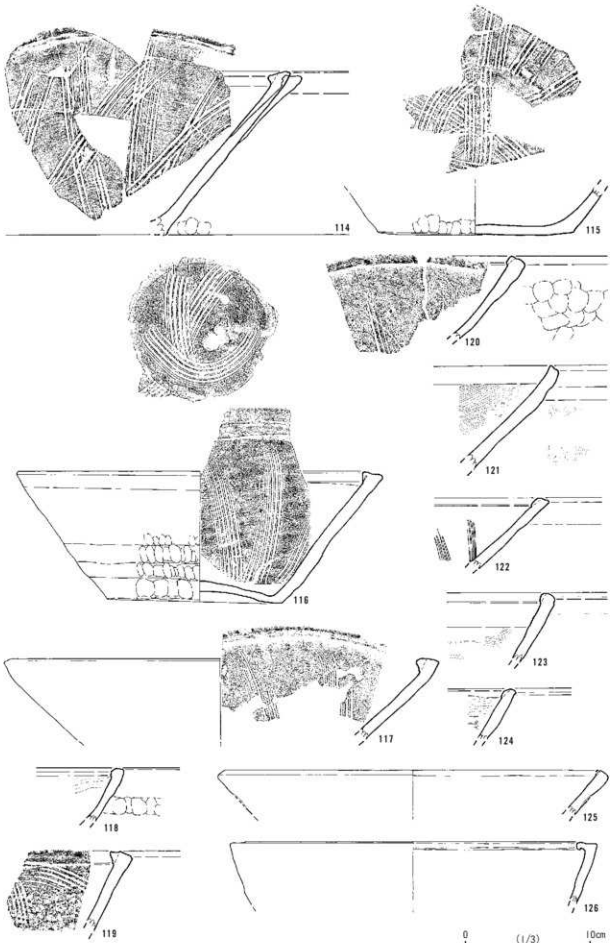
62～69はＳＫ2359出土の土師器。62～65は皿。斜め外上方へ直線的に短く引き出す程度の口縁部をもつ。口縁部が先細りして端部が尖るもの（62）、底・体部とほぼ同じ器壁で口縁部に移行し、端部が面取りぎみに平坦なもの（65）などがある。66～69は坏。66・67は、体部が内湾して立ち上がる。68は器壁が薄く、体部は内湾して立ち上がり、口縁部が外面へのヨコナデによって外反ぎみとなる。69は体部から口縁部へそのまま内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は外そぎぎみにヨコナデし、断面三角形状に尖る。内面底体部の境は、強いヨコナデによって凹線状にくぼむ。

70はＳＫ2115出土の瓦質土器擂鉢。底部内面にも４条一単位の条線によるおろし目を施す。底部外面には板目圧痕、側面には指圧整形痕が顕著に残る。

71～73はＳＫ2367出土。71は土師器坏。底体部とほぼ同じ器壁で口縁部に移行し、端部は丸くおさめる。底部外面に板目圧痕が残存する。72は瓦質土器足鍋。口縁部が短く外反し、端部は肥厚する。端部上面は、強いヨコナデによってくぼむ。73は瓦質土器鍋。体部が内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に弱く外反する。ヨコナデによって口縁端部は内外方へ弱く突出し、上面はくぼむ。口縁端部



第32図　Ⅰ地区SD１出土土器実測図(１)



第33図　Ⅰ地区SD１出土土器実測図(２)

外面平行タタキのちヨコナデ、体部外面はナナメハケのちヨコナデ、内面はヨコハケのちヨコナデ仕上げ。

74はＳＫ2222出土の土師器坏。小型品で、体部が内湾して立ち上がる。

75はＳＫ2228出土の瓦質土器擂鉢。体部から口縁部へそのまま直線的に立ち上がり、口縁端部は内面へのヨコナデによって斜め内上方へ突出ぎみとなる。体部内面ヨコハケ仕上げ。

76・77はＳＫ2370出土。76は土師器坏。口径に比べて器高が低く、体部から口縁部へそのまま直線的に開く。口縁端部はやや内巻きぎみに丸くおさめる。77は土師質土器擂鉢。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は内面への断面三角形状の粘土帯貼付により肥厚する。

ＳＥ1002出土土器（第31図　図版17）

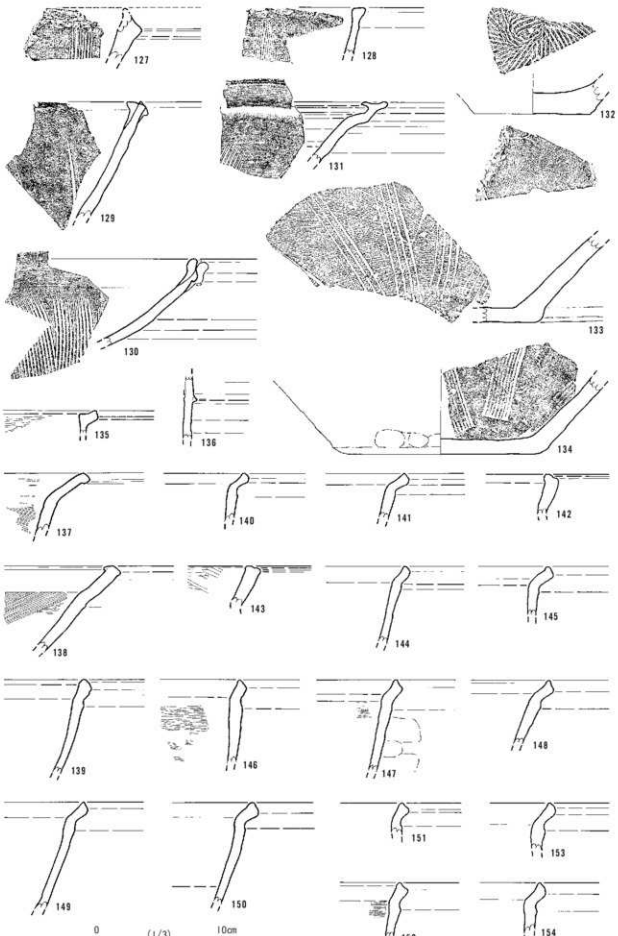
78～81は擂鉢。78・79は瓦質土器、80は土師質土器、81は陶器。78・80はヨコナデによって口縁端部が内・外方へ突出し、上面はくぼむ。78は内面に７条一単位、80は少なくとも４条一単位の条線によるおろし目を施す。いずれも内面ナナメハケ仕上げ。79は、口縁端部が内面への断面蒲鉾形状の粘土帯貼付により肥厚する。内面に７条一単位の条線によるおろし目を施す。81は断面逆台形状の高台を有する底部で、底・体部外面及び内底面を回転ヘラケズりする。

82は土師質土器足鍋。口縁部は短く外反し、端部がやや肥厚する。頸部外面は強くヨコナデする。83は土師質土器火鉢。頸部が短く内傾し、口縁部は直立して開く。口縁端部は粘土帯貼付等によって肥厚し、上面には水平な広い平坦面をもつ。口縁部外面への装飾はみられない。84は瓦質土器火鉢。直立ぎみに立ち上がる口縁部の外面に、ヘラ状工具により逆二等辺三角形状の連続する刺突文を押圧する。85・86は瓦質土器香炉。85は手づくね整形した三足の脚部をもち、体部が直線的に立ち上がる。86は幅広の低い高台を有する。85・86とも体部内面はハケ状工具によって横擦過し、86は外面縦方向をヘラミガキする。

Ⅰ地区ＳＤ１出土土器（第32～38図　図版12・13・17～22）

87は緑釉陶器皿。須恵質で、底部内面に低い段をもつ。釉がかりは極薄で、発色はやや不良。88～95は土師器。88～91は坏。88は体部が直線的に立ち上がる。89は底部側面へ粘土帯を付加し、底部を成形する。90・91は口径に比べて器高が低く、体部から口縁部へそのまま直線的に開く。90は端部がわずかに内湾し、上面は面取りぎみにおさめる。92・93は台付皿。円盤状の脚台部の高さは異なるが、両者とも底部中央を貫通する穿孔が設けられる。94・95は塊。断面逆台形状の低い高台を貼付する。

96～119は瓦質土器擂鉢。体部から口縁部へ内湾ぎみもしくは直線的に開き、外面に粘土帯や突起状の狭小な粘土帯を貼付して口縁端部を肥厚させるもの（96・97）、口縁端部上面に断面長方形状の粘土帯を付加し、口縁部を斜め内上方へ突出させるもの（98・99）、口縁端部内面に断面台形状や蒲鉾形状の低い粘土帯を貼付し、受部をつくり出すもの（100・102～107・110・118）、内面に断面三角形状の粘土帯を貼付し肥厚させた口縁端部の上面を水平に仕上げるもの（114・116・117・119）のほか、外面に断面三角形状の粘土帯を貼付し、口縁端部を肥厚させるもの（101）や口縁端部上面に扁平な粘土帯をかぶせて肥厚させ、内外方に突出させるもの（108・109）などがある。114・115は同一個体。体部は直線的に立ち上がるものが多いが、内湾しながら開くやや小型の鉢状の形態のもの（109）もある。114は片口。116は強い上げ底で、底部中央が接地面からかなり上位にある。



第34図　Ⅰ地区SD１出土土器実測図(３)

体部内面の調整はナデが主体であるが、110は内面をヨコハケ仕上げする。外面には指圧による整形痕が底部側面に残るもの（107・114・115）、底部側面及び体部下半に残るもの（116）、体部上半に残るもの（109・118）などがある。107・113・115は底部外面に板目圧痕が残る。

条線一単位が確認できる内面のおろし目は、4条一単位のもの（97・107・113）、5条一単位のもの（109・111・112・119）、6条一単位のもの（108・116）、7条一単位のもの（114・115・117）、9条一単位のもの（99）などがある。119は内面の条線が口縁部と平行ぎみに施される。115は7条一単位、116は6条一単位の条線によるおろし目を底部内面にも施す。

120～126は土師質土器擂鉢。土師質土器擂鉢には体部が直線的に立ち上がり、口縁部が肥厚せずにやや内湾するもの（121）、口縁端部内面に低い断面台形状や蒲鉾形状の粘土帯を貼付し、受部をつくり出すもの（120・122～125）、口縁端部を鉤手状にほぼ水平に内側へ突出させるもの（126）などがある。120は内面ナナメハケのちヨコナデし、外面に指圧による整形痕が顕著に残る。121は体部外面タテハケ、内面ヨコ・ナナメハケ、123は体部内面ヨコハケ仕上げ。124は内面を二種類のハケ原体により器面調整する。

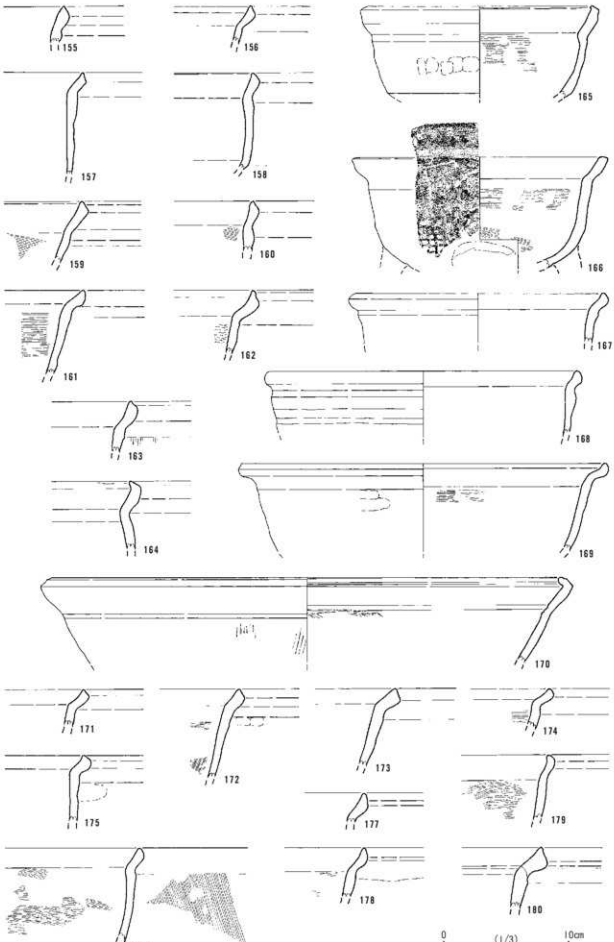
127～134は陶器擂鉢。口縁端部が肥厚して外方へ突出するもの（128）や内外方へ突出するもの（129）、体部が口縁部付近で外湾し、口縁部は反転して直線的に短く斜め外上方へ開き、端部が大きく内外方へ水平に引き出されるもの（131）、体部が内湾して立ち上がり、口縁端部の内面が丸く上方へ突出するとともに外面が丸く垂れ下がるもの（130）などがある。条線一単位が確認できる内面のおろし目は、一部を除いて8～12条一単位で、多条傾向になる。129・130は片口。132は底部内面に放射状の条線を陰刻し、外面に回転糸切り痕が残存する。127・134は備前系。

135は土師質土器羽釜。口縁端部外面直下に、やや外上方に突出する断面長方形状の鍔部を設ける。鍔部上面はヨコナデによりくぼむ。136は鍔部と考えられる断面三角形状の低い突出部をもつ。茶釜の鍔部の可能性がある。外面に煤が付着する。

137・138は土師質土器鍋。137は口縁部が直線的に外反し、端部下端が下垂する。口縁部内面ヨコハケのちヨコナデ、体部内面ヨコハケ仕上げ。138は体部からあまり屈曲せずに外反する口縁部の内面に、突起状の狭小な粘土帯を貼付する。体部内面ヨコ・ナナメハケ仕上げ。

139～170は瓦質土器足鍋。口縁部が短く外上方へ屈曲するものが多いが、口縁部があまり屈曲せずに開き、端部がやや肥厚するもの（139）、やや長く内湾しながら斜め外上方へ開き、端部に平坦面をもつもの（165・166）、口縁部があまり屈曲せずに開き、端部内面に粘土帯を貼付して内上方に突出させるもの（170）などがある。口縁部が短く外上方へ屈曲するものには、頸部外面への強いヨコナデによって口縁部を屈曲させ、口縁部内面へのヨコナデにより端部を内上方に突出ぎみにするものが多い。口縁端部は肥厚するものが多く、丸く肥厚するもの（140・141・168・169）、断面方形状に肥厚するもの（149～152）、玉縁状に肥厚するもの（161～163）などがある。口縁部が肥厚せずに外反するものには、端部が断面方形状のもの（144・146）、内面をやや突出させた断面三角形状のもの（155・157・169）などがある。

体部外面に指圧による整形痕が顕著に残るもの（147・165・171）や内面をヨコ・ナナメハケ仕上げするもの（146・147・152・159～162・165・167・169）、底部外面に格子タタキを施すもの（166）などが



第35図　Ⅰ地区SD１出土土器実測図(４)

ある。外面に煤が付着するもの（149）、炭化物が付着するもの（164・170）、炭化物・煤が付着するもの（157・158）のほか、内面に炭化物が付着するもの（166）がみられる。

171～185は土師質土器足鍋。瓦質土器同様、口縁部が短く外上方へ屈曲するものが多く、端部が肥厚するもの（175・180～182・184・185）、肥厚ぎみもしくは肥厚せずにそのまま端部へ移行するもの（171～174・176）、口縁部が内湾ぎみに直立して開くもの（183）などがある。口縁部の整形は瓦質土器同様、内面へのヨコナデにより端部を内上方に突出ぎみにするものが多い。ハケ仕上げは体部内外面に施されるもの（176）、内面になされるもの（172・174・178・179・183・184）がある。185は、体部上半に指圧による整形痕が顕著に残る。外面に煤が付着するもの（172・173・175・176・182・185）、炭化物が付着するもの（171）がみられる。

186～188は瓦質土器鉢。口縁端部内外面に狭小な粘土帯を付加し、肥厚ぎみにするもの（186）、体部から口縁部まで内湾しながら立ち上がり、口縁端部内面に狭小な粘土帯を付加し、断面三角形状に突出させる浅鉢のもの（187）、体部から口縁部まで内湾しながら立ち上がり、口縁端部外面に粘土帯を付加し肥厚させる深鉢のもの（188）などがある。188は体部外面をヘラミガキする。

189～191は土師質土器鉢。口縁端部内面に粘土帯を付加し、内上方へ突出させるもの（189）、口縁端部内外面及び上面をヨコナデし、端部を肥厚させるもの（190）、187と同器形の浅鉢のもの（191）などがある。191は外面に煤が付着する。192～198は陶器鉢。口縁端部外面に粘土帯を付加し、玉縁状に肥厚させるもの（192・193）、口縁端部を外側に折り返し肥厚させるもの（194・195）、体部から口縁部までほぼ同じ器壁で立ち上がり、口縁端部を水平に仕上げるもの（196）などがある。197は内面及び高台側面・体部、198は内面に施釉する。198は見込み部分に1条沈線がめぐり、胎土目が残存する。192は萩系、193・194は肥前系、196は備前系。

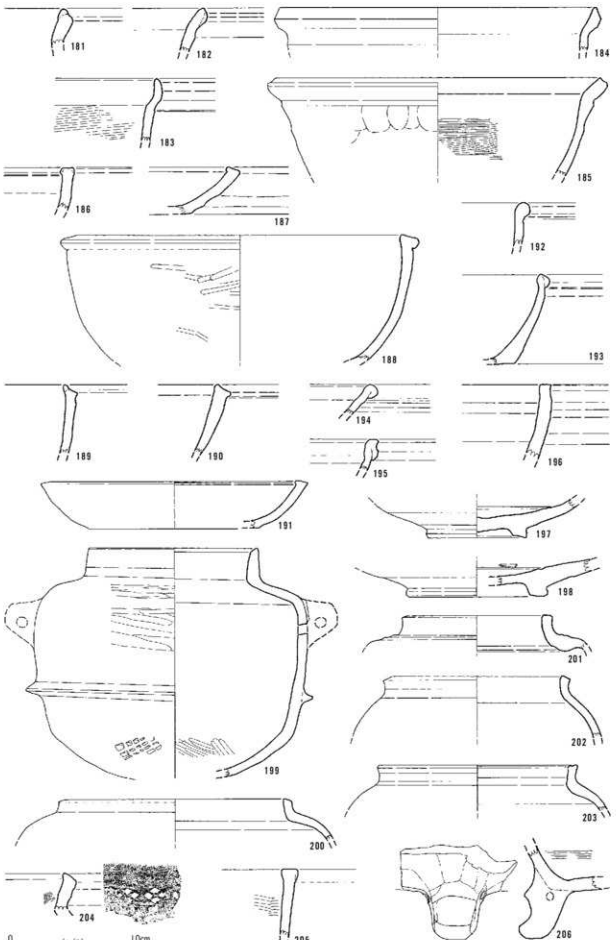
199～203は瓦質土器茶釜。口縁部が直立するもの（199・203）、直線的に内傾するもの（200）、外湾しながら内傾するもの（201・202）などがある。199は双耳の把手を有するものと思われ、体部外面中位に断面三角形状の鍔部がめぐる。底部外面は格子タタキ、体部・口縁部外面及び底部内面はヨコ・ナナメ方向のヘラミガキ、体部内面はヘラナデされる。外面に煤が付着する。

204・205は瓦質土器火鉢。204は口縁部外面に連続する菱形スタンプ文を押捺する。口縁部内面ナナメハケ仕上げ。205は直立する口縁部の端部が肥厚し、上面に平坦面をもつ。内面粗いヨコハケ仕上げ。206は土師質土器火鉢の脚部。脚裾部が猫足状に外反りする。207は陶器おろし皿。格子のおろし目をもち、底部外面に回転糸切り痕が残る。208は瓦質土器焙烙。把手は比較的短小で、底部側面には指圧による整形痕が顕著に残る。

209・210は貿易陶磁器の白磁碗。209は玉縁状の口縁をもち、210は見込みの釉を圏線状に掻き取る。

211～222は陶器壺。211は天目壺。口縁部が外湾ぎみに直立し、端部は短くやや外反して丸くおさめる。内外面に施釉する。碗は体部から口縁部まで内湾しながらそのまま立ち上がり、口縁部は直立ぎみに開くものが大半である。216は腰折れ状の体部で、畳付きにトチンの痕跡が残る。畳付き及び216が高台内面脇及び底部外面が露胎となる以外は、すべて釉掛けされる。212・215・220は、高台が高く削り出される。219・220は竹節状高台。

223～226は陶器皿。224は、底部内面の釉を中央部を残して蛇の目状に掻き取る。224・225は竹節状



第36図　Ⅰ地区SD１出土土器実測図(５)

高台。226は外面無施釉。227は陶器小杯。口縁部は緩やかに外反し、断面逆台形状の低い高台をもつ。畳付き及び底部内面は露胎。228は陶器火鉢の脚部。229は陶器鉢。体部は腰折れし、口縁部は直立する。

230～238は磁器。230は白磁碗。231は青磁碗。外面体部下半及び見込みの釉を圏線状に掻き取る。高台は竹節状高台で、やや高く削り出される。底部内面は露胎。232は白磁小杯。体部は直線的に外方へ開き、口縁部は大きく外反する。畳付きは露胎。肥前系。233は青磁湯呑み。底部外面を浅く削り出す。底部側面は露胎。234は青磁水注。口縁部は大きく外湾して開き、端部は下垂する。235～238は磁器染付。235～237は碗。濃青色の呉須により魚・菊・草花などを染付する。238は皿。高台内に「大川手長」銘を筆書きする。体部には草花文を染付する。

239～244は瓦質土器甕。239・240は、口縁部が肥厚して内傾する大甕。頸部外面は幅広の沈線状にくぼむ。体部内面ヨコ・ナナメハケのちヨコナデ仕上げ。239は体部外面ナナメハケのちナデ仕上げ。241・242は口縁部が短く内傾し、端部外面への粘土帯の付加により外方へ突出させる。243は口縁部が肥厚して短く直立する。口縁部内面は、ナナメハケのちヨコナデ仕上げ。244は口縁部が直立して立ち上がり、端部外面への幅広の断面蒲鉾状の粘土帯の付加により端部が肥厚する。体部内面ヨコ・ナナメハケ仕上げ。245～247は土師質土器甕。245は口縁部が肥厚して内傾する大甕で、胴部内面下部は斜め方向のヘラミガキが施される。246は口縁部が肥厚して直線的に内傾する。体部内面ヨコハケ仕上げ。247は底部外面に板目圧痕が残る。248・249は陶器甕。口縁部を外側に折り返し端部を肥厚させる。備前系。

Ⅰ地区ＳＤ２出土土器（第39図　図版22）

250は土師器坏。ベタ高台状の底部外面に板目圧痕が残る。251は瓦質土器足鍋。口縁部が肥厚して短く外反し、端部上面に変則的な１条沈線がめぐる。

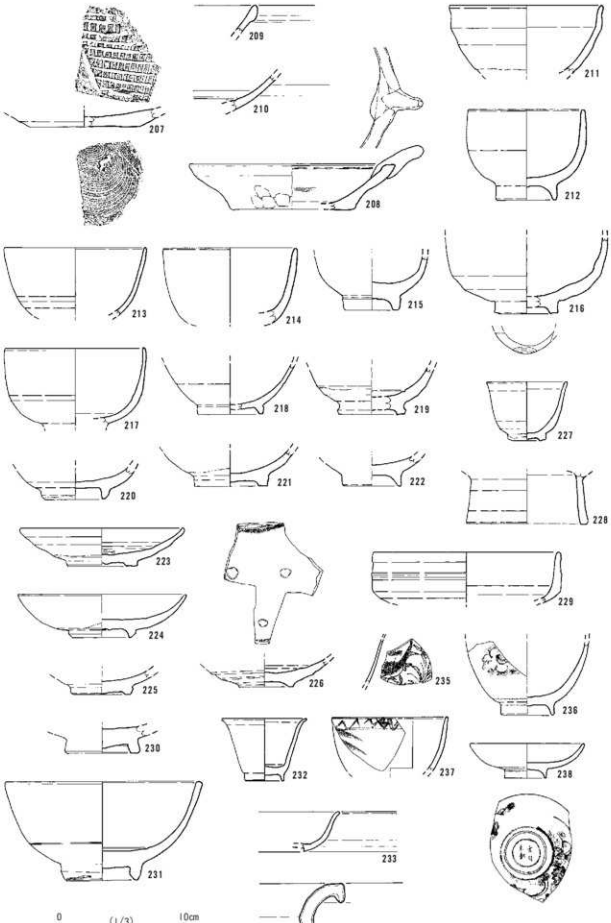
Ⅰ地区ＳＤ４出土土器（第39図　図版13・22）

252・253は土師器坏。体部の器壁は極薄で、253はベタ高台状の底部をもつ。254は土師質土器擂鉢。口縁端部内面に扁平な粘土帯を付加し、肥厚させる。255は土師質土器足鍋。短く外反して肥厚する口縁部は、内面及び上面へのヨコナデによって端部が上方へ突出する。256・257は磁器碗。256は、口縁部外面にヘラによる縦横の線刻が施される。258は青磁小杯。底部外面を削り出し、高台状の底部を造形する。底部側面及び高台内は露胎。259は陶器おろし皿。格子のおろし目をもち、底部外面に回転糸切り痕が残る。

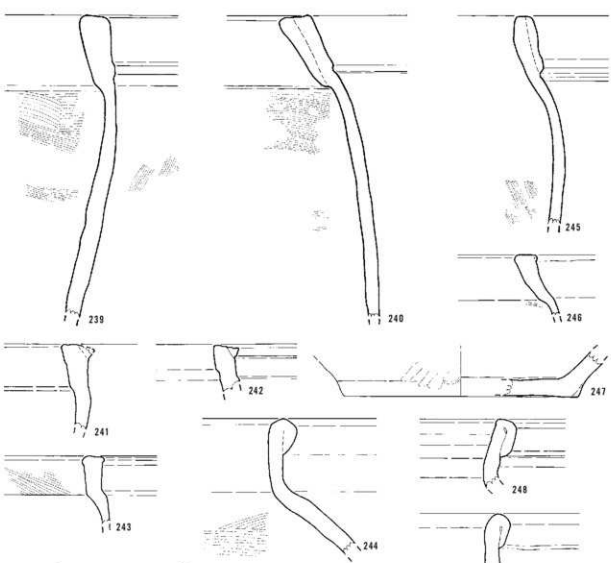
Ⅱ地区ＳＤ１出土土器（第39図　図版13・22・23）

260～268は土師器。260・261は皿。262～268は坏。体部から口縁部まで緩やかに内湾して立ち上がるもの（265・267）、体部から口縁部まで直線的に立ち上がるもの（266・268）などがある。267は口縁端部内面をやや尖りぎみにおさめる。263は粘土帯を付加し、ベタ高台状の底部となる。269は瓦質土器擂鉢。４条一単位の条線によるおろし目を施す。270～272は土師質土器擂鉢。270は口縁端部内面に狭小な粘土帯を付加し、内方へ突出させる。

273・274は瓦質土器足鍋。273は直立して立ち上がる体部をもち、口縁部が断面蒲鉾形状に肥厚して内湾ぎみに短く開く。274は直線的に外反するやや長めの口縁部をもち、端部内面に粘土帯を貼付して



第37図　Ⅰ地区SD１出土土器実測図(６)



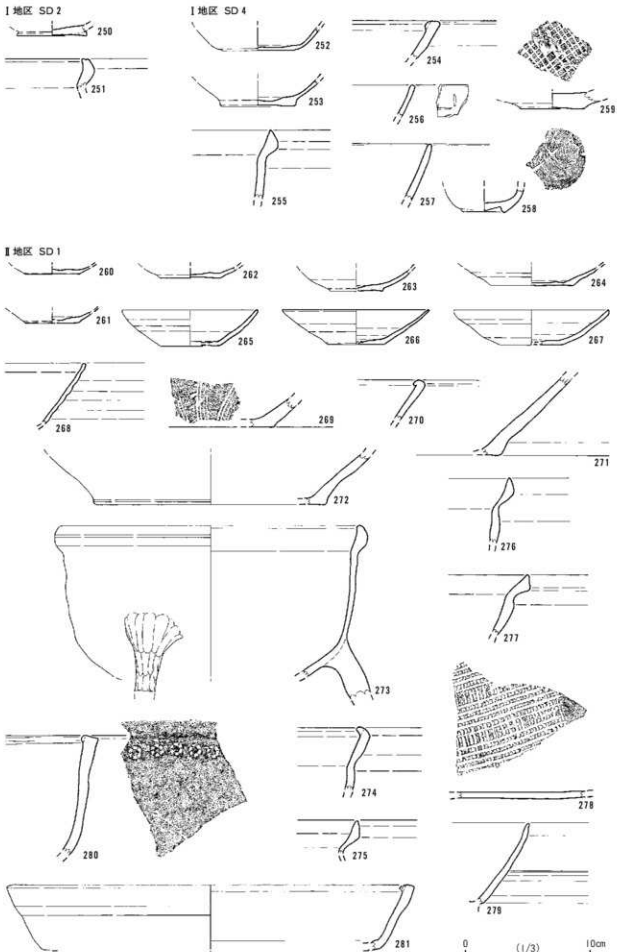
第38図　Ⅰ地区SD１出土土器実測図(７)

内上方に突出させる。275～277は土師質土器足鍋。口縁部内面及び側面へのヨコナデにより、端部内面が三角形状に突出する。273・275・276は、外面に炭化物・煤が付着する。

278は陶器おろし皿。粗雑な格子のおろし目をもつ。279は青磁碗。内湾して立ち上がる体部から反転して、口縁部が外湾ぎみに短く外反する。内外面に貫入がみられる。280は土師質土器火鉢。口縁部は端部内面に狭小な粘土帯を貼付してやや肥厚させ、外面に連続する菊花のスタンプ文を押捺する。281は瓦質土器焙烙もしくは鉢。体部から口縁部まで直線的に立ち上がり、口縁部内面に狭小な粘土帯を付加し、端部を肥厚させる。

Ⅱ地区ＳＤ２出土土器（第40図　図版23）

282～284は土師器坏。282・284は不明瞭な底部と体部の境から、体部がわずかに内湾ぎみに立ち上がる。284は口径に比べて器高が低く、口縁端部を面取りぎみに平坦におさめる。283は、底部外面に板目圧痕が残る。285は瓦質土器足鍋。直線的に外反する口縁部をもち、端部内面に粘土帯を付加し、



第39図　Ⅰ地区SD 2 ・ 4 及びⅡ地区SD 1 出土土器実測図

内上方へ突出させる。286は瓦質土器羽釜。外面の口縁端部からやや下位に、断面不整台形状の鍔部を設ける。内面はヨコハケ仕上げ。

Ⅰ地区ＳＤ３出土土器（第40図　図版23）

287は土師器皿。体部から口縁部まで緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁端部はやや尖りぎみにおさめる。288～290は瓦質土器擂鉢。288･289は同一個体。288は直線的に立ち上がる体部から反転して、口縁部が短く直立する。口縁部内外面及び上面へのヨコナデにより端部が肥厚する。体部内面ヨコハケ仕上げ。289は10条一単位の条線によるおろし目を施す。288･289とも体部内面ヨコハケ仕上げ。290は肥厚する口縁部の内面を中くぼみ状に強くヨコナデする。291は瓦質土器火鉢。外面の体部と口縁部の境付近に、扁平な断面三角形の突帯を貼付する。体部内面はヨコハケ仕上げ。292は瓦質土器甕。肥厚する口縁部の内外面をナナメハケ仕上げする。293は瓦質土器焙烙の把手。指圧整形痕が顕著に残る。

Ⅰ地区ＳＤ５出土土器（第40図　図版23・24）

294・295は土師器。294は皿。295は埦。扁平な断面三角形の高台を貼付する。296～298は瓦質土器足鍋。296は口縁部が肥厚せずに短く屈曲する。297は口縁部が短く外反し、内面及び上面へのヨコナデにより端部内面が尖りぎみに上方へ突出する。298は短く外反する口縁部が肥厚する。299は土師質土器足鍋。

Ⅰ地区ＳＤ６出土土器（第40図　図版24）

300は陶器擂鉢。口縁端部が内上方及び外下方へ突出し、肥厚する。端部上面は平坦。備前系。

Ⅰ地区ＳＤ７出土土器（第40図　図版13・24）

301･302は陶器。301は小杯。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部が外湾しながら緩やかに外反する。高台はやや高く削り出される。畳付き及び底部外面は露胎。302は口縁端部が丸く肥厚する大型の埦。301・302とも萩系。303は輪花の磁器染付皿。外面に唐草文、内面に扇・松を絵付けする。外面高台脇には二重圏線がめぐる。畳付きは露胎。

Ⅰ地区ＳＤ10出土土器（第40図　図版24）

304～306は土師器坏。極薄の器壁で、体部から口縁部まで直線的に開き、端部を丸くおさめるもの（304）と内湾しながら開き、端部を尖りぎみにおさめるもの（306）などがある。306は胎土が白色系。307は土師質土器擂鉢。粘土帯の付加により、端部内面が断面三角形状に内方へ突出する。

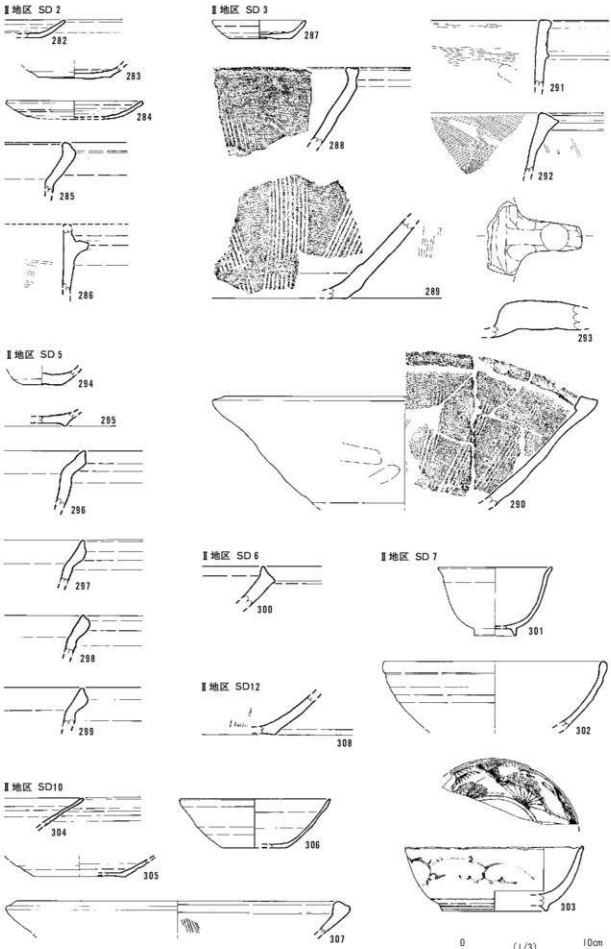
Ⅰ地区ＳＤ12出土土器（第40図　図版24）

308は瓦質土器擂鉢。７条一単位の条線によるおろし目を施す。底部外面は回転糸切り。

Ⅰ地区ＳＤ４出土土器（第41図　図版24・25）

309･310は土師器坏。310は体部から口縁部へ直線的に開き、口縁端部内面が尖る。311は瓦質土器、312・313は土師質土器の擂鉢。肥厚する口縁部は、端部内面に低い断面蒲鉾形状の粘土帯を貼付するもの（311･312）、断面三角形状に近い粘土帯を貼付するもの（313）がある。311は内面をヨコハケ調整し、７条一単位の条線によるおろし目を施す。

314・315は瓦質土器、316・317は土師質土器の足鍋。314は体部が内湾して立ち上がり、やや長めに直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部は肥厚し、端部内面及び上面へのヨコナデによりやや内上方へ



第40図　Ⅱ地区SD２・３・５・６・７・10・12出土土器実測図

突出する。外面に炭化物・煤が付着する。316は体部が直立して立ち上がり、短く屈曲する口縁部をもつ。314同様、口縁端部は肥厚し、端部内面及び上面へのヨコナデによりやや内上方へ突出する。3足の脚部以下の外面には格子タタキが施される。外面に煤が付着する。318は瓦質土器鍋。内湾して内傾する体部をもち、口縁部は短く外反する。体部外面下半に炭化物・煤が付着する。319は瓦質土器火鉢の脚部。裾部で外開きし、端部は肥厚する。内面ナナメハケ仕上げ。

Ⅲ地区ＳＤ２出土土器（第41図　図版24）

320は土師器坏。底部と体部の境が不明瞭で、体部から口縁部へそのまま直線的に開く。口縁端部は丸くおさめる。

柱穴出土土器（第42図　図版13・24～26）

321～339は土師器。321～327は皿。322・323は、斜め外上方へ内湾ぎみに短く引き出す程度の口縁部をもつ。口縁端部は尖るもの（322）、丸いもの（323）、平坦なもの（324）など数種ある。327・328はベタ高台状の底部をなす。328～339は坏。体部から口縁部へ内湾しながらそのまま立ち上がるもの（334・336・337・339）、直線的に立ち上がるもの（338）などがある。口縁部は体部からしだいに先細りになるもの（334）、体部とほぼ同じ器壁で立ち上がり、端部が尖りぎみのもの（336）や端部に平坦面をもつもの（339）などがある。340は黒色土器埦。Ａ類。やや外方へ開く断面逆台形状の高めの高台を貼付する。内面丁寧なヘラミガキ、外面ヨコナデ仕上げ。

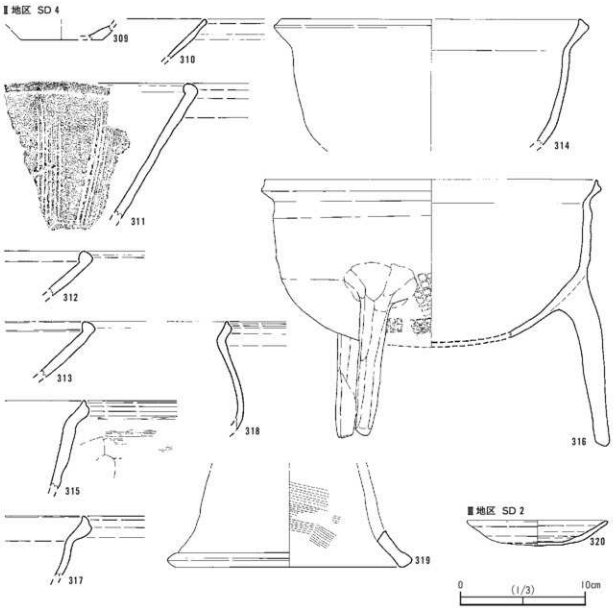
341は瓦質土器擂鉢。口縁部内面に狭小な粘土帯を付加し、端部をやや内方へ突出させる。342～347は足鍋。342・343・346・347は瓦質土器、344・345は土師質土器。口縁部が短く屈曲し、端部が肥厚するものが多い。端部が断面蒲鉾形状に肥厚するもの（343・344）、口縁部内面及び上面へのヨコナデにより端部内面が内上方へ突出ぎみになるもの（342・346・347）などがある。346は体部外面に指圧整形痕が残る。343・345は外面に煤が付着する。

348は貿易陶磁器。玉縁状の口縁部となる白磁碗。口縁部内面に１条沈線がめぐる。349は磁器碗。外面に草花文を絵付けする。口縁端部には釉と釉着した離れ砂が付着する。350は陶器壺。腰折れ状の体部をもち、口縁部は内湾ぎみに開く。体部外面は鉄釉により絵付けする。高台は露胎。肥前系。351～354は土師質土器甕。351は体部内面を斜め方向にヘラケズリする。Ⅱ地区ＳＤ１出土資料と接合。352は小型品で、球形の胴部をもち、口縁部が肥厚して外湾ぎみに開く。口縁端部上面は平坦に近い。体部内面は横方向にヘラケズリする。353は口縁部が直立ぎみに開き、端部が肥厚する。体部内面は縦方向にヘラケズリする。354は外面格子タタキ、内面縦方向のヘラケズリが施される。

321はＳＰ2327、322はＳＰ1049、323はＳＰ1126、324・326はＳＰ1138、325はＳＰ1191、327はＳＰ1046、328はＳＰ1252、329・334・339・346はＳＰ1357、330はＳＰ2204、331・341はＳＰ1150、332はＳＰ2241、333はＳＰ1154、335はＳＰ1389、336はＳＰ1258、337はＳＰ1279、338はＳＰ1366、340はＳＰ1036、342はＳＰ1052、343はＳＰ1314、344はＳＰ1368、345はＳＰ2010、347はＳＰ1383、348はＳＰ1317、349はＳＰ2125、350はＳＰ1345、351・353・354はＳＰ2320、352はＳＰ1251出土。

ＳＣ２出土土器（第43図　図版26）

355・356は土師器皿。355は口径に比べて器高が低く、体部が内湾して立ち上がる。356は体部から口縁部まで直線的に開く。357～360は瓦質土器擂鉢。口縁端部内面に断面蒲鉾形状(357)、台形状(358)、



第41図　Ⅱ地区SD 4 及びⅢ地区SD 2 出土土器実測図

三角形状（359・360）の粘土帯を貼付し、口縁部を肥厚させる。361は瓦質土器足鍋。体部から屈曲して内湾ぎみ立ち上がる口縁部をもち、端部内面が内方へ突出する。362は瓦質土器鍋。口縁端部内面が内上方へ小さく突出する。内面ナナメハケのちヨコナデ。

363～365は土師質土器鉢。363は口縁部が内湾して開く。内面ナナメハケ仕上げ。364・365は、口径と底径が大差ない安定した底部のロクロ成形の異形品。364は口縁部が内折し、底部外面に板目圧痕が残る。365は体部から口縁部まで内湾して立ち上がる。体部～口縁部内面はタテ・ヨコハケのちヨコナデ、底部内面ヨコハケのちナデ仕上げ。366は磁器皿。体部は内湾ぎみに立ち上がり、端部が緩やかに外反する。外面口縁部下位に１条沈線がめぐる。

ＳＣ３出土土器（第43図　図版26・27）

367・368は土師器坏。367は口縁端部内外面に油煙・煤が付着する。369は陶器擂鉢。口縁部が直立して上方へ立ち上がる。５条一単位の条線によるおろし目を施す。備前系。370・371は瓦質土器擂鉢。370は口縁端部内面に断面台形状のやや高い粘土帯を付加し、口縁部を肥厚させる。端部上面は水平な

平坦面をもつ。体部内面はナナメハケのちナデ仕上げ。371は底部内面に側縁に沿って弧状、中央部に直線状に4条一単位の条線によるおろし目を施す。372は瓦質土器鍋。口縁部は体部から直線的に緩やかに外反し、端部内面に断面蒲鉾形状の粘土帯を貼付し口縁部を肥厚させる。内面ヨコハケのちヨコナデ。外面に煤が付着する。

373・374は瓦質土器火鉢。373は体部から口縁部へ直線的に外傾して開き、口縁端部外面直下に二等辺三角形状の連続する刺突文を刻む。口縁部内面ヨコハケのちヨコナデ、体部内面ヨコ・ナナメハケのちナデ仕上げ。374は、しまりの強い頸部から口縁部が肥厚しながら直立ぎみに立ち上がる。口縁部外面には菊花の連続スタンプ文を押捺する。口縁部外面をヨコナデするほかは、器面調整はヘラミガキが基本である。375は土師質土器の火鉢。直立する脚部で、指圧整形痕が残る。

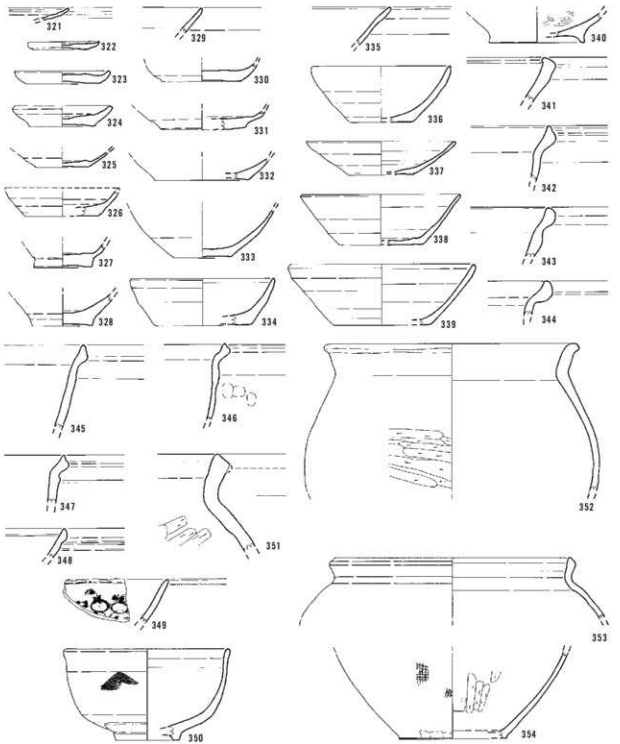
Ⅰ地区灰褐色土出土土器（第44・45図　図版13・27・28）

376・377は緑釉陶器。376は緩やかに外湾しながら開く塊の口縁部。377は口縁部に近い部分の塊の体部。376・377とも須恵質。378・379は土師器。378は坏。体部から口縁部まで内湾しながら緩やかに立ち上がる。底部外面に板目圧痕が残る。379は塊。断面台形状の低い高台をもつ。内面及び底部外面をヘラミガキする。

380～382は瓦質土器擂鉢。380は口縁端部内面及び上面をヨコナデし、端部内面を小さく内方へ突出させる。内面ナナメハケのちヨコナデ仕上げ。381・382は体部から口縁部へ直線的に外傾し、口縁端部がわずかに肥厚する。381は内面を細密なヨコハケ調整する。382は口縁部内面ヨコハケのちヨコナデ、外面タテハケのちナデ仕上げし、口縁端部外面を強く指圧する。383は土師質土器擂鉢。口縁端部内面に扁平な粘土帯を付加し、口縁部がやや肥厚する。内面ヨコハケ仕上げ。384～388は陶器擂鉢。384は口縁端部が上、下方へ突出する。外面口縁部下位に指圧整形痕が残る。385は口縁部外面を強くヨコナデし、端部はそら豆状に肥厚する。内外面に施釉するが、口縁端部上面の釉を掻き取る。須佐系。386・387は口縁部が直立して上方へ立ち上がる。387は8条一単位の条線によるおろし目を施す。388は387と同一個体の底部で、内面は使用により一部条線が摩滅し、平滑。386～388は備前系。

389～395は瓦質土器、396～399は土師質土器の足鍋。瓦質土器足鍋には口縁部が短く屈曲し、端部が肥厚するものが多いが、長めの口縁部が内湾しながら外反し、端部が内上方へ突出するもの（394）もある。土師質土器足鍋には口縁部が強く内湾しながら短く外反するもの（398）、口縁部が体部からあまり屈曲せずに内湾しながら開き、外面の口縁端部からやや下位に扁平な粘土帯を付加するもの（399）などがある。393は体部内面ヨコハケ仕上げ。398は体部内面ヨコハケ、外面タテハケ仕上げ。389・392・395は、頸部下半に指圧による整形痕が残る。397は外面に炭化物・煤が付着する。

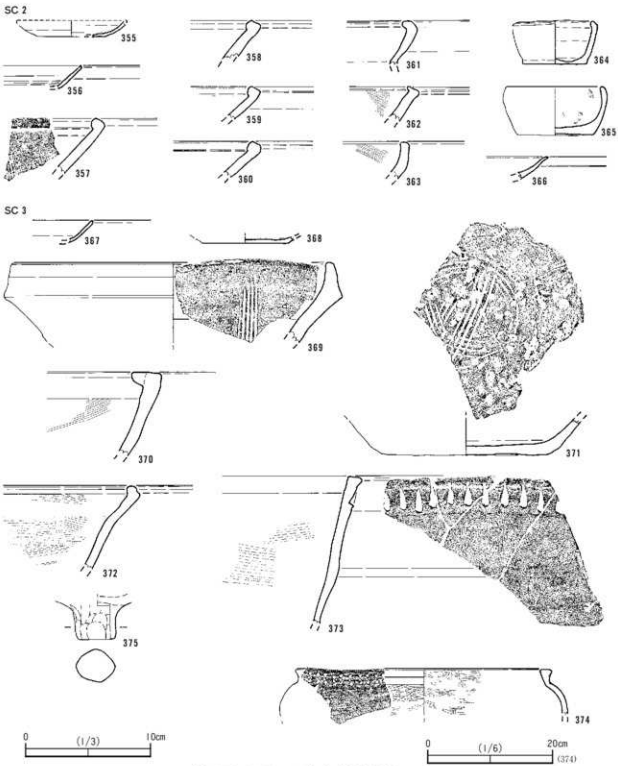
400は瓦質土器、401～403は土師質土器の甕。口縁部が大きく外反するもの（400）や頸部が直立し、口縁部が外湾ぎみに開くもの（401）、短く急角度に外反するもの（402）のほか、口縁部が肥厚するもの（403）などがある。404は土師質土器羽釜。鍔部上面は強いヨコナデによりくぼむ。体部外面及び内面ヨコハケ仕上げ。405は瓦質土器鍋。内面ヨコハケ仕上げ。406は瓦質土器焙烙。把手の大半を欠損する。内面ヨコハケ仕上げ。底部側面には指圧整形痕が残る。407～409は瓦質土器鉢。焙烙かもしれない。口縁端部内面がわずかに内方へ突出するもの（407）、口縁端部がわずかに内外方へ突出するもの（408）、口縁部内面に扁平な断面蒲鉾形状の粘土帯を付加し、端部を肥厚させるもの（409）など



321 SP2327　322 SP1049　323 SP1126　324・326 SP1138　325 SP1191　327 SP1046　328 SP1252
329・334・339・346 SP1357　330 SP2204　331・341 SP1150　332 SP2241　333 SP1154　335 SP1389　336 SP1258
337 SP1279　338 SP1366　340 SP1036　342 SP1052　343 SP1314　344 SP1368　345 SP2010　347 SP1383
348 SP1317　349 SP2125　350 SP1345　351・353・354 SP2320　352 SP1251

第42図　柱穴出土土器実測図

がある。409は口縁部の一部が底部付近まで押圧され、片口状になる。いずれも内面ヨコハケ仕上げ。410は土師質土器の鉢。内面ヘラミガキ。



第43図　SC 2 ・ 3 出土土器実測図

411・412は貿易陶磁器。口縁部が玉縁状の白磁碗。413～415は陶器壺。413は天目壺。体部は腰折れ。蛇の目高台で、外面は露胎。414は高台が比較的高く削り出される。畳付きは露胎で、離れ砂が付着する。415は底部内面の釉を中央部を残して蛇の目状に掻き取る。畳付き及び体部外面は露胎。416～421は磁器。416は白磁鉢。内面体部中位及び体部と口縁部の境に、それぞれ２重の圏線がめぐる。417は白磁紅皿。418は青磁皿。419・420は青磁碗。419は畳付きが露胎で、内外面に貫入がみられる。420は口縁部が大きく外反する。底部外面は釉を掻き取る。外面蓮弁状文、内面草花文のほか、見込みに印

花文が印刻される。421は染付碗。口縁端部外面に1条、内面に2条の圏線をめぐらし、体部内面に草花文を染付けする。

Ⅰ地区黒褐色土出土土器（第46図　図版13・28）

422は灰釉陶器長頸壺。口縁部はしまりの強い細めの長頸部から緩やかに外反し、端部は玉縁状に肥厚する。内外面ともヨコナデ。須恵質。423は緑釉陶器塊。削り出しの高台内側が接地点よりわずかに上位にある。見込みに円圏状沈線がめぐる。須恵質。424～433は土師器。424～426は皿。424は、厚い器壁の底部から斜め外上方へ直線的に短く引き出す程度の口縁部をもつ。425は底部外面に板目圧痕が残る。426は体部から口縁部まで直線的に立ち上がる。427～430は坏。体部が内湾しながら立ち上がるもの(427～429)、体部から口縁部まで直線的に立ち上がり、先細りの口縁部になるもの(430)がある。429は底部ヘラ切り離し。431～433は塊。431は断面が長めの逆台形状の高台が外下方に開き、裾部が外反する。431・432は、断面が扁平な逆台形状の高台をもつ。431は高台内側が接地点。

434・435は瓦質土器擂鉢。434は口縁端部内面に断面三角形状の扁平な粘土帯を貼付し、口縁部を肥厚させる。内面は使用により摩滅し、平滑。435は口縁端部内面がわずかに内方へ突出する。436は片口の陶器擂鉢。口縁端部を内上方へ突出させる。備前系。

437～442は瓦質土器足鍋。短く屈曲する口縁部の外面に扁平・幅広の粘土帯を付加し、端部を肥厚させるもの（437・438・440）、外面の口縁端部からやや下位に断面蒲鉾形状の粘土帯を付加し、口縁部の一部を部分的に肥厚させるもの（439）、長くのびる口縁部をもち、端部をわずかに肥厚させるもの（441）や端部内面に断面三角形状の狭小な粘土帯を貼付し、内方へわずかに突出させるもの（442）などがある。437・438・441・442は、外面に煤が付着する。内面調整は口縁部ヨコナデ、体部ナデが主体であるが、440は体部内面をヨコハケ、442はヨコ・ナナメハケ仕上げする。443は土師質土器足鍋。口縁部は短く屈曲し、端部内面は尖る。外面に煤が付着する。

444は瓦質土器茶釜。張りの強い肩部をもち、口縁部が直線的に内傾する。口縁部上端は水平な平坦面をもつ。外面ヘラミガキ、内面ヨコハケのちヨコナデ。445は陶器塊。畳付きは露胎。釉は白濁釉で、内面は見込みに施釉する。446は磁器染付碗。内面に草花文を絵付けする。畳付きに離れ砂が付着する。

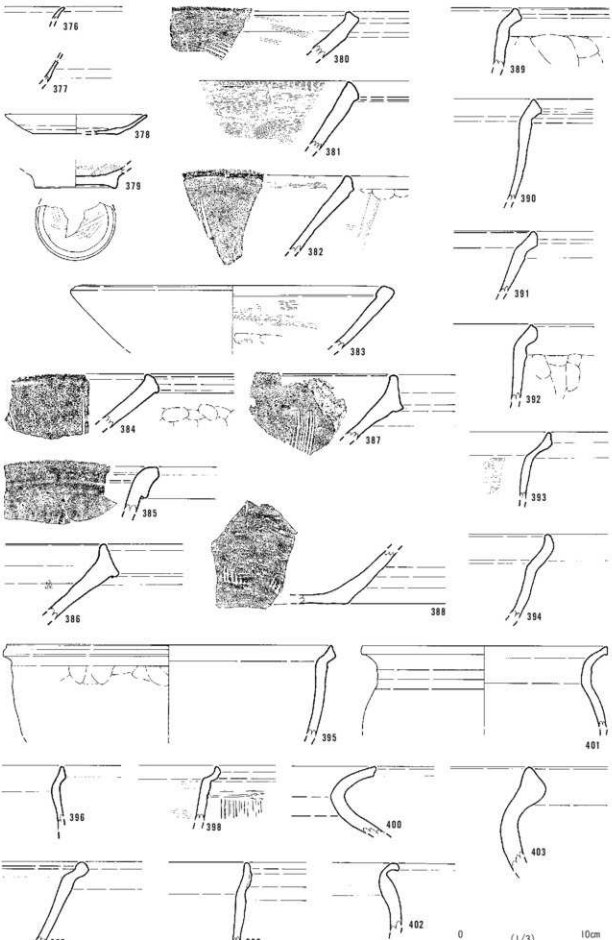
Ⅱ地区赤褐色粘質土出土土器（第46図　図版28）

447～449は土師器坏。体部から口縁部まで直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめるもの(447)、体部から口縁部まで内湾して立ち上がり、口縁端内面が尖るもの（448）、体部が内湾しながら急角度で立ち上がるもの（449）などがある。

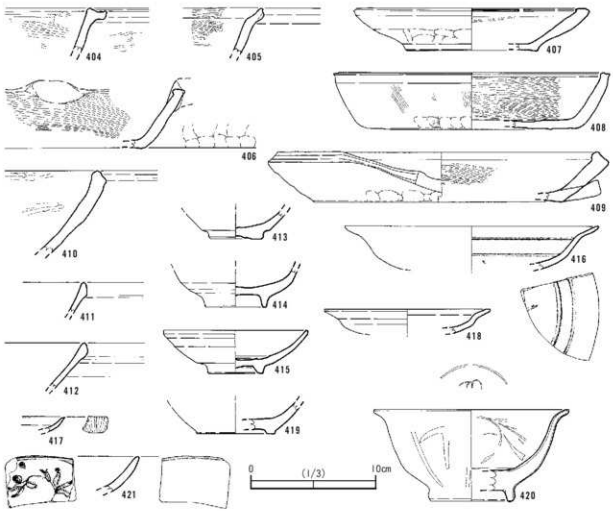
（2）石製品・金属製品ほか（第47図　図版29）

450・451は滑石製石鍋。450は外面の口縁端部からやや下位に、断面台形状の鍔部を削り出す。口縁部上端には水平な平坦面をもつ。452は石臼。安山岩製。453は碁石。黒色で周縁にわずかに面をもつ。玄武岩製。454・455は砥石。直方体状の角礫を素材とし、454は正面及び両側面の3面、455は正裏両面及び両側面の4面を研磨面とする。454は砂岩製、455は凝灰岩製。

456は平瓦。凹面に粗い布目圧痕がみられる。457は桟瓦。内面は板状工具押圧による整形がなされる。458は鉄滓付着品。須恵器坏の口縁部の内面を主体に、破断面にも鉄滓が付着する。459は煙管吸口。小口内面に羅宇竹の一部が残存する。青銅製。460は鉛弾。着弾痕は不明。461は棹秤用分銅。直



第44図　Ⅰ地区灰褐色土出土土器実測図(１)



第45図　Ⅰ地区灰褐色土出土土器実測図(２)

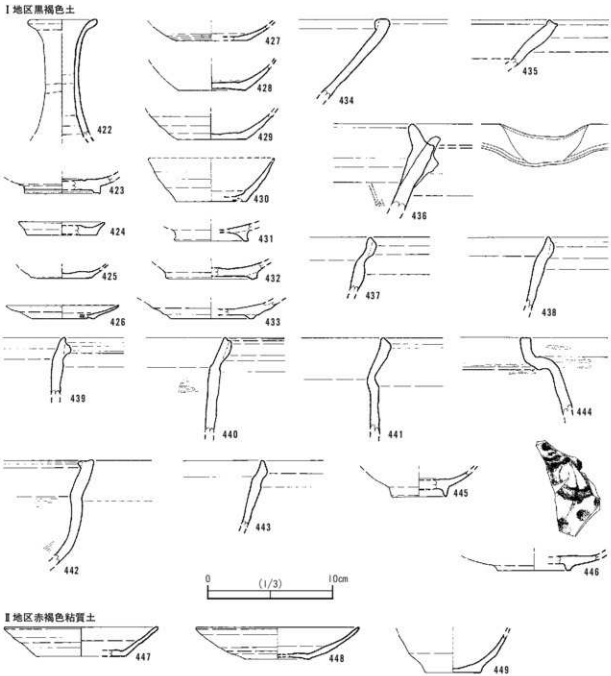
方体の分銅で、上面中央部に円環鉦を造出する。正面中央部に文字が鋳出されているが判読できない。青銅製。

450・456はⅠ地区黒褐色土、451・452・457・458・461はⅠ地区ＳＤ１、453・455・459はⅠ地区灰褐色土、454はＳＫ2367、460はⅡ地区ＳＤ３出土。

出土遺物を簡単にまとめておきたい。土坑出土資料には10世紀後半のＳＫ1001出土の土師器・黒色土器、13世紀代のＳＫ1120出土の土師器皿・坏及び異形の瓦質土器鍋、14世紀後半～15世紀前半のＳＫ1087の土師器皿・坏及び土師質土器羽釜、16世紀前半代のＳＫ2089の土師器皿・坏など、良好な一括資料が含まれている。

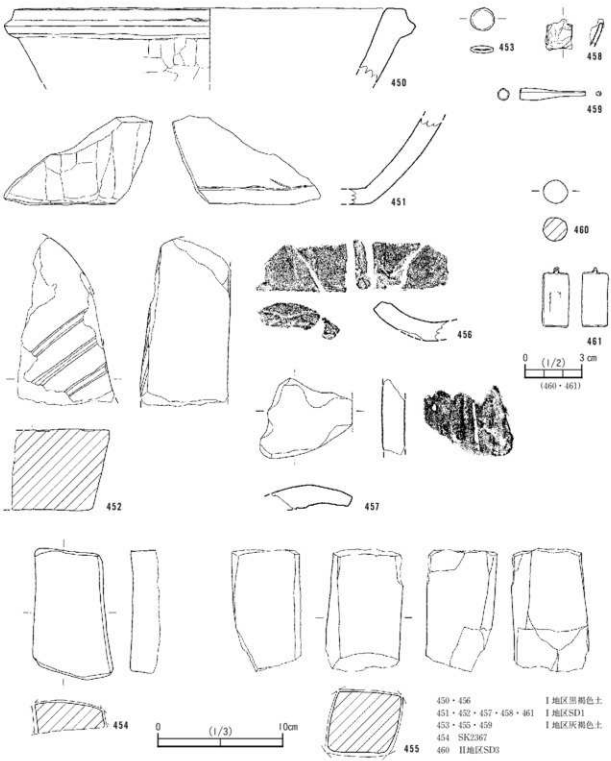
また、Ⅰ地区ＳＤ１からは多量の遺物が出土した。出土遺物には緑釉陶器皿、土師器皿・坏・台付皿、瓦質土器擂鉢・足鍋・茶釜、土師質土器擂鉢・鍋・羽釜・足鍋、陶器擂鉢・壺・甕、磁器碗・皿などがある。一部10世紀代の遺物が含まれているが、主体は15、16世紀のもので、溝が長期間機能していたことが考えられる。Ⅱ地区ＳＤ１出土の一括資料は15世紀後半から16世紀前半代のもので、Ⅱ地区ＳＤ４出土遺物と時期的には大差ない。掘立柱建物跡出土遺物は、12～13世紀及び15、16世紀代のものである。柱穴出土資料には一部10世紀代のものが含まれるが、14～16世紀のものがある。

周防鋳銭司が機能していた時期の資料として、緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などがあげられる。



第46図　Ⅰ地区黒褐色土及びⅡ地区赤褐色粘質土出土土器実測図

緑釉陶器は須恵質で、埦３点、Ⅲ１点計４点が出土した。Ⅰ地区の溝・遺物包含層からの出土で、本来の帰属時期のものではない。今回の調査地域の南に隣接するこれまでの数次の調査では、建物・土坑・井戸などからの出土が報告されていること、またⅠ地区ＳＫ1001出土遺物が同時期の資料であることから、今回の調査地域周辺の広範囲に周防鋳銭司操業時期の集落が展開していたことがわかる。周防鋳銭司は遅くとも11世紀の中ごろにはその機能を停止したと考えられているが、時期幅のある遺物の出土状況・内容などから、その後も当該地域周辺は農村集落の構成員の居住地として土地開発され利用されていたことが想定される。



第47図　石製品・金属製品ほか実測図

第４表　土器観察表

挿図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (復原値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
28	14	1	Ⅱ	ＳＢ15	土師器	皿	7.0	6.3	0.8	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ナデ	回転糸切り
28	14	2	Ⅱ	ＳＢ17	土師器	皿	(6.6)	(5.4)	0.9	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
28	14	3	Ⅰ	ＳＢ７	土師器	皿	(6.4)	(5.2)	1.2	磨滅のため不明 磨滅のため不明	
28	14	4	Ⅱ	ＳＢ９	土師器	皿	(7.9)	(5.2)	1.4	ヨコナデ 磨滅のため不明	
28	14	5	Ⅰ	ＳＢ７	土師器	坏		(5.0)		ヨコナデ ヨコナデ	
28	14	6	Ⅰ	ＳＢ８	土師器	坏		(8.6)		ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
28	14	7	Ⅱ	ＳＢ13	土師器	坏		6.0		ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	板目圧痕
28	14	8	Ⅱ	ＳＢ16	土師器	坏				ヨコナデ ヨコナデ	
28	14	9	Ⅱ	ＳＢ15	土師器	坏				ヨコナデ ヨコナデ	
28	14	10	Ⅰ	ＳＢ５	土師器	坏		(6.6)		ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
28	14	11	Ⅱ	ＳＢ17	土師器	坏	(11.0)	(6.4)	(4.8)	磨滅のため不明 磨滅のため不明	
28	14	12	Ⅰ	ＳＢ５	土師器	坏	(11.8)	(6.2)	4.1	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
28	14	13	Ⅰ	ＳＢ４	土師器	坏	(6.8)	(6.0)	4.2	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
28	14	14	Ⅰ	ＳＢ３	土師器	坏		(4.8)		ナデ ヨコナデ	回転糸切り
28	14	15	Ⅱ	ＳＢ16	土師質土器	擂鉢				磨滅のため不明 磨滅のため不明	板目圧痕
28	14	16	Ⅰ	ＳＢ６	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
28	14	17	Ⅰ	ＳＢ６	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ後ナデ ヨコナデ，ナデ	
29	14	18	Ⅰ	ＳＫ1001	土師器	坏	11.2	5.0	3.6	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	14	19	Ⅰ	ＳＫ1001	土師器	坏	(12.0)	5.6	3.7	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	
29	14	20	Ⅰ	ＳＫ1001	土師器	坏	(16.2)	6.9	最大6.6 最小6.2	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，強いヨコナデ	静止糸切り
29	14	21	Ⅰ	ＳＫ1001	黒色土器	坏	10.6	5.35	3.65	ヨコナデ，ヘラミガキ ヨコナデ，ヘラミガキ	黒色土器Ⅲ類
29	14	22	Ⅰ	ＳＫ1001	瓦質土器	坏				ヨコナデ ヨコナデ	
29	14	23	Ⅰ	ＳＫ1001	土師質土器	甕				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
29	15	24	Ⅰ	ＳＫ1087	土師器	皿	6.6	4.6	最大1.4 最小1.1	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	25	Ⅰ	ＳＫ1087	土師器	皿	(6.8)	(4.5)	1.0	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	26	Ⅰ	ＳＫ1087	土師器	皿	8.7	4.9	最大1.15 最小0.9	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	27	Ⅰ	ＳＫ1087	土師器	皿	(7.4)	(5.7)	(1.4)	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	28	Ⅰ	ＳＫ1087	土師器	皿	6.8	4.4	最大1.0 最小0.85	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	29	Ⅰ	ＳＫ1087	土師器	皿	(9.0)	(6.2)	(1.7)	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	30	Ⅰ	ＳＫ1087	土師器	坏		6.4		ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	31	Ⅰ	ＳＫ1087	土師器	坏	(10.4)			ヨコナデ ヨコナデ	
29	15	32	Ⅰ	ＳＫ1087	土師器	坏	(16.2)	(8.3)	5.1	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り後ナデ
29	15	33	Ⅰ	ＳＫ1087	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ナナメハケ ヨコナデ	外面に煤付着
29	15	34	Ⅰ	ＳＫ1087	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ナナメハケ ヨコナデ，ナデ	
29	15	35	Ⅰ	ＳＫ1087	土師質土器	擂鉢		(13.1)		ヨコハケ後ヨコナデ タテハケ，タテハケ後ナデ	
29	15	36	Ⅰ	ＳＫ1087	土師質土器	羽釜				ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，指圧整形後ナデ，平行タタキ	底部外面に煤付着
29	15	37	Ⅰ	ＳＫ1120	土師器	皿	(7.2)	(5.4)	0.7	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	38	Ⅰ	ＳＫ1120	土師器	皿	(6.0)	(5.0)	0.9	ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	回転糸切り
29	15	39	Ⅰ	ＳＫ1120	土師器	坏		5.9		ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	40	Ⅰ	ＳＫ1120	土師器	坏	(13.4)			ヨコナデ ヨコナデ	
29	15	41	Ⅰ	ＳＫ1120	土師器	坏	(12.3)	5.4	4.2	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り

挿図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (現存値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
29	15	42	I	SK1120	土師器	坏	12.3	6.0	4.5	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り 口縁部内面に煤付着
29	15	43	I	SK1120	土師器	坏	12.4	5.0	4.45	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	44	I	SK1120	瓦質土器	鍋	(18.2)			ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，ナデ	防長産とは別系統品
29	15	45	I	SK1113	土師器	皿				ヨコナデ ヨコナデ	口縁部内面に赤色塗彩
29	15	46	I	SK1113	土師器	坏	(8.2)	(4.6)	1.7	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り 口縁部内外面に赤色塗彩
29	15	47	I	SK1113	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ	
29	15	48	I	SK1113	瓦質土器	足鍋	(25.0)			ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，ヨコナデ後ナデ	外面一部に煤付着
29	15	49	I	SK1364	土師器	坏		(5.6)		ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り 板目圧痕
29	15	50	I	SK1364	土師器	坏	(11.2)			ヨコナデ ヨコナデ	
29	15	51	II	SK2210	土師器	皿	(6.2)	(5.4)	(0.7)	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
29	15	52	II	SK2210	土師器	坏	(10.4)	(5.6)	(1.9)	磨滅のため不明 ヨコナデ	回転糸切り
29	15	53	II	SK2354	土師器	坏		(7.0)		磨滅のため不明 ヨコナデ	回転糸切り 板目圧痕
30	16	54	II	SK2089	土師器	皿	(5.2)	4.0	1.35	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
30	16	55	II	SK2089	土師器	皿	(5.4)	(3.8)	(2.0)	ヨコナデ，ナデ 磨滅のため不明	
30	16	56	II	SK2089	土師器	皿	(6.7)	4.8	(0.6)	磨滅のため不明 ヨコナデ	回転糸切り 板目圧痕
30	16	57	II	SK2089	土師器	坏	(9.5)			ヨコナデ ヨコナデ	
30	16	58	II	SK2089	土師器	坏	(11.8)	(7.0)	(1.5)	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り 板目圧痕
30	16	59	II	SK2089	土師器	坏	(13.2)	(7.8)	(2.55)	磨滅のため不明 ヨコナデ	
30	16	60	II	SK2089	土師器	坏	(16.6)	(8.8)	(2.75)	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り 板目圧痕
30	16	61	II	SK2089	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
30	16	62	II	SK2359	土師器	皿	7.0	4.7	1.0	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
30	16	63	II	SK2359	土師器	皿	(7.0)	(5.6)	(1.2)	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
30	16	64	II	SK2359	土師器	皿	7.0	5.1	1.1	磨滅のため不明 磨滅のため不明	
30	16	65	II	SK2359	土師器	皿	(7.6)	(5.4)	(0.9)	磨滅のため不明 ヨコナデ	回転糸切り
30	16	66	II	SK2359	土師器	坏		(5.2)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	
30	16	67	II	SK2359	土師器	坏		(7.0)		ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
30	16	68	II	SK2359	土師器	坏	(11.9)	(6.1)	(5.4)	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
30	16	69	II	SK2359	土師器	坏	12.0	6.1	3.9	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
30	16	70	II	SK2115	瓦質土器	擂鉢		(14.8)		ナデ 回圧整形後ヨコナデ	板目圧痕
30	16	71	II	SK2367	土師器	坏	(12.2)	(4.8)	(2.45)	磨滅のため不明 磨滅のため不明	板目圧痕
30	16	72	II	SK2367	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
30	16	73	II	SK2367	瓦質土器	鍋				ヨコハケ後ヨコナデ ヨコナデ，平行タタキ後ヨコナデ，ナナメハケ後ヨコナデ	
30	16	74	II	SK2222	土師器	坏		(6.3)		ヨコナデ，ナデ 磨滅のため不明	回転糸切り
30	16	75	II	SK2228	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ	
30	16	76	II	SK2370	土師器	坏	(10.6)	(7.8)	(1.45)	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
30	16	77	II	SK2370	土師質土器	擂鉢	(29.4)	(17.0)	(8.7)	ヨコナデ，ナデ 磨滅のため不明	
31	17	78	I	SE1002	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	
31	17	79	I	SE1002	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
31	17	80	I	SE1002	土師質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ，タテハケ，ナデ	
31	17	81	I	SE1002	陶器	擂鉢		(12.4)		使用による摩耗 ヨコナデ	
31	17	82	I	SE1002	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
31	17	83	I	SE1002	土師質土器	火鉢				ヨコナデ ヨコナデ	

挿図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (現存値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
31	17	84	I	SE1002	瓦質土器	火鉢				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
31	17	85	I	SE1002	瓦質土器	香炉		(8.0)		ナデ ナデ	脚部：手づくね成形
31	17	86	I	SE1002	瓦質土器	香炉(?)		(7.4)		ナデ(ハケ状工具使用) ヘラミガキ、ヨコナデ	
32	12	87	I	SD1	緑釉陶器	皿				ヨコナデ ヨコナデ	素地：須恵質 釉の発色やや不良
32	17	88	I	SD1	土師器	坏		(6.0)		磨滅のため不明 ヨコナデ	回転糸切り
32	17	89	I	SD1	土師器	坏		(5.4)		ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り
32	17	90	I	SD1	土師器	坏	(12.8)	(5.6)	2.3	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	
32	17	91	I	SD1	土師器	坏	(14.0)	(7.0)	2.0	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	
32	17	92	I	SD1	土師器	台付皿		6.0		ナデ ヨコナデ	回転糸切り
32	17	93	I	SD1	土師器	台付皿		5.8		磨滅のため不明 磨滅のため不明	回転糸切り
32	17	94	I	SD1	土師器	埦				ナデ ヨコナデ	
32	17	95	I	SD1	土師器	埦		(5.2)		ヘラミガキ ヨコナデ	
32	17	96	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
32	17	97	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ	
32	17	98	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
32	17	99	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	
32	17	100	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ、ナデ	
32	17	101	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
32	18	102	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
32	18	103	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ、ヨコハケ後ナデ ヨコナデ	
32	18	104	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ、タテハケ ヨコナデ、タテハケ	
32	17	105	I	SD1	瓦質土器	擂鉢	(27.4)			磨滅のため不明 磨滅のため不明	
32	18	106	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
32	17	107	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ、指圧整形	板目圧痕
32	18	108	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ、粗いヨコナデ ヨコナデ、粗いヨコナデ	
32	18	109	I	SD1	瓦質土器	擂鉢	(21.9)			ヨコナデ、ヨコハケ後ナデ ヨコナデ、指圧整形後ナデ	
32	18	110	I	SD1	瓦質土器	擂鉢	(23.4)			ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ、ナデ、タテハケ後ヨコナデ、タテハケ	
32	18	111	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				使用による磨耗のため不明 指圧整形	
32	18	112	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ナデ ナデ	
32	18	113	I	SD1	瓦質土器	擂鉢		(14.0)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	
33	18	114	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ	115と同一個体
33	18	115	I	SD1	瓦質土器	擂鉢		(15.4)		ヨコナデ ヨコナデ、指圧整形	板目圧痕 114と同一個体
33	18	116	I	SD1	瓦質土器	擂鉢	19.0	13.8	10.4	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、指圧整形後ナデ	板目圧痕
33	18	117	I	SD1	瓦質土器	擂鉢	(34.4)			ヨコナデ ヨコナデ、指圧整形後ナデ	口縁部内面に指頭による押圧整形痕
33	18	118	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ、ヨコハケ、ナデ ヨコナデ、指圧整形後ナデ	
33	18	119	I	SD1	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ	
33	18	120	I	SD1	土師質土器	擂鉢				ナナメハケのちヨコナデ ヨコナデ、指圧整形	
33	18	121	I	SD1	土師質土器	擂鉢				ハケ後ヨコナデ、ナナメハケ ヨコナデ、タテハケ後ナデ	
33	18	122	I	SD1	土師質土器	擂鉢				ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ	
33	18	123	I	SD1	土師質土器	擂鉢				ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ	
33	18	124	I	SD1	土師質土器	擂鉢				ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ	
33	18	125	I	SD1	土師質土器	擂鉢	(25.6)			ヨコナデ ヨコナデ	

挿図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (現存値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
33	18	126	I	SD1	土師質土器	擂鉢	(26.4)			磨滅のため不明 磨滅のため不明	
34	18	127	I	SD1	陶器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
34	18	128	I	SD1	陶器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
34	18	129	I	SD1	陶器	擂鉢				ヨコハケ、ナナメハケ ヨコナデ、ナデ	
34	19	130	I	SD1	陶器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
34	19	131	I	SD1	陶器	擂鉢				ヨコナデ、施釉 ヨコナデ、施釉	
34	19	132	I	SD1	陶器	擂鉢		(9.2)		ナデ ヨコナデ	回転糸切り
34	19	133	I	SD1	陶器	擂鉢				タテハケ、ナデ タテハケ	
34	19	134	I	SD1	陶器	擂鉢		(14.9)		ヨコナデ ヨコナデ後ナデ	備前系
34	19	135	I	SD1	土師質土器	羽釜				ヨコハケ ヨコナデ	
34	19	136	I	SD1	瓦質土器	羽釜(茶釜)				ヨコナデ ヨコナデ	外面に炭化物・煤付着
34	19	137	I	SD1	土師質土器	鍋				ヨコハケ後ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ	
34	19	138	I	SD1	土師質土器	鍋				ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ、ナデ	外面に煤付着
34	19	139	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
34	19	140	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
34	19	141	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
34	19	142	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
34	19	143	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ナナメハケ後ヨコナデ ヨコナデ	
34	19	144	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ	
34	19	145	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
34	19	146	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ、ヨコハケ後ヨコナデ ヨコナデ	
34	19	147	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ、ナデ	
34	19	148	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
34	19	149	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	外面下部に煤付着
34	19	150	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	
34	19	151	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
34	19	152	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ、ナデ	
34	19	153	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
34	19	154	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
35	19	155	I	SD1	瓦質土器	足鍋				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
35	19	156	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
35	20	157	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	外面一部に炭化物・煤付着
35	20	158	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
35	20	159	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ、ヨコハケ後ナデ ヨコナデ	
35	20	160	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ、ナナメハケ ヨコナデ、ナデ	
35	20	161	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ、ヨコハケ、ナデ ヨコナデ、ナデ	
35	20	162	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ	
35	20	163	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ、タテハケ	
35	20	164	I	SD1	瓦質土器	足鍋				ハケ後ヨコナデ ヨコナデ	外面に炭化物付着
35	19	165	I	SD1	瓦質土器	足鍋	(17.6)			ヨコナデ、ヨコハケ、ナデ ヨコナデ、ナデ	
35	19	166	I	SD1	瓦質土器	足鍋	(18.8)			ヨコハケ ヨコナデ、指圧整形後ナデ、格子タタキ	内面に付着物
35	20	167	I	SD1	瓦質土器	足鍋	(19.6)			ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
35	20	168	I	SD1	瓦質土器	足鍋	(24.2)			ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	

挿図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (現存値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
35	20	169	I	SD1	瓦質土器	足鍋	(28.8)			ヨコナデ，ヨコハケ後ナデ，ナデ ヨコナデ，ナデ	
35	20	170	I	SD1	瓦質土器	足鍋	(40.0)			ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ナデ	外面に炭化物付着
35	20	171	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	外面に炭化物付着
35	20	172	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，指圧整形後ナデ	外面下部に煤付着
35	20	173	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	外面全体に煤付着
35	20	174	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，ナデ	
35	20	175	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	外面に煤付着
35	20	176	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，タテハケ	外面に煤付着
35	20	177	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
35	20	178	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ後ナデ ヨコナデ，ナデ	
35	20	179	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，ナデ	
35	20	180	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
35	20	181	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	
36	20	182	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	外面に煤付着
36	20	183	I	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ	
36	20	184	I	SD1	土師質土器	足鍋	(24.8)			ヨコナデ ヨコナデ	
36	20	185	I	SD1	土師質土器	足鍋	(25.4)			ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，指圧整形後ナデ	内外面全体に煤付着
36	20	186	I	SD1	瓦質土器	鉢				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	外面全体に煤付着
36	20	187	I	SD1	瓦質土器	鉢				ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ナデ	
36	20	188	I	SD1	瓦質土器	鉢	(25.6)			ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ヘラミガキ	
36	21	189	I	SD1	土師質土器	鉢				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	
36	21	190	I	SD1	土師質土器	鉢				磨滅のため不明 ヨコナデ	
36	21	191	I	SD1	土師質土器	鉢	(19.4)	(13.2)	(3.7)	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ナデ	外面に煤付着
36	20	192	I	SD1	陶器	鉢				施釉 施釉	口免，藁灰釉 萩系
36	20	193	I	SD1	陶器	鉢				施釉 施釉	藁灰釉 肥前系
36	21	194	I	SD1	陶器	鉢				ヨコナデ，施釉 ヨコナデ，施釉	
36	21	195	I	SD1	陶器	鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
36	21	196	I	SD1	陶器	鉢				ヨコナデ ヨコナデ	備前系
36	21	197	I	SD1	陶器	鉢		(7.8)		施釉 ヨコナデ，施釉	
36	21	198	I	SD1	陶器	鉢		(11.2)		施釉 ヨコナデ	鉢土目
36	21	199	I	SD1	瓦質土器	茶釜	13.3			ヨコナデ，ナデ，ヘラミガキ ヨコナデ，ヘラミガキ，格子タタキ	
36	21	200	I	SD1	瓦質土器	茶釜	(17.0)			ヨコナデ ヨコナデ	
36	21	201	I	SD1	瓦質土器	茶釜	(10.4)			ヨコナデ，ヨコハケ後ヨコナデ ヨコナデ	
36	21	202	I	SD1	瓦質土器	茶釜	(13.4)			ヨコナデ ヨコナデ，ヨコナデ後ナデ	
36	21	203	I	SD1	瓦質土器	茶釜	(15.6)			ヨコナデ ヨコナデ	
36	21	204	I	SD1	瓦質土器	火鉢				ヨコナデ，ナナメハケ ヨコナデ	
36	21	205	I	SD1	瓦質土器	火鉢				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ	
36	21	206	I	SD1	土師質土器	火鉢（脚部）				ヨコハケ，ナデ ナデ	
37	12	207	I	SD1	陶器	おろし皿		(8.6)		ナデ ヨコナデ後ナデ	回転糸切り
37	12	208	I	SD1	瓦質土器	焙烙	(16.4)	(9.2)	3.6	ヨコハケ後ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ヨコナデ後ナデ	
37	12	209	I	SD1	貿易陶磁器（白磁）	碗				施釉 施釉	
37	12	210	I	SD1	貿易陶磁器（白磁）	碗				施釉 施釉	
37	12	211	I	SD1	陶器	壺	(12.0)			施釉 施釉	天目椀

挿図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (現存値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
37	12	212	I	SD1	陶器	坏	(9.0)	(4.6)	7.1	施釉 施釉	
37	12	213	I	SD1	陶器	坏	(11.0)			施釉 施釉	
37	12	214	I	SD1	陶器	坏	(10.4)			施釉 施釉	
37	12	215	I	SD1	陶器	坏		(4.2)		施釉 施釉	
37	12	216	I	SD1	陶器	坏		(5.0)		施釉 施釉	
37	12	217	I	SD1	陶器	坏	(10.8)			施釉 施釉	
37	12	218	I	SD1	陶器	坏		(5.0)		施釉 施釉	萩系
37	12	219	I	SD1	陶器	坏		(5.2)		施釉 回転ヘラケズリ、回転ナデ	
37	12	220	I	SD1	陶器	坏		(4.9)		ハケメ釉 ハケメ釉	竹節状高台
37	12	221	I	SD1	陶器	坏		5.7		施釉 回転ナデ、施釉	
37	12	222	I	SD1	陶器	坏		(4.2)		施釉 施釉	
37	12	223	I	SD1	陶器	皿	(12.5)	5.4	3.0	施釉 ヨコナデ、施釉	
37	12	224	I	SD1	陶器	皿	(13.2)	(4.3)	(3.4)	施釉 施釉	竹節状高台
37	12	225	I	SD1	陶器	皿		(4.6)		施釉 施釉	内面に貫入
37	12	226	I	SD1	陶器	皿		(4.3)		施釉 ヨコナデ	胎土目３ヶ所
37	12	227	I	SD1	陶器	小杯	(6.2)	3.0	4.6	施釉 施釉	
37	12	228	I	SD1	陶器	火鉢(脚部)		(9.4)		施釉 施釉	
37	12	229	I	SD1	陶器	鉢	(14.6)			施釉 施釉	
37	12	230	I	SD1	磁器(白磁)	碗		(5.4)		施釉 施釉	釉の発色悪い
37	13	231	I	SD1	磁器(青磁)	碗	15.2	5.6	7.8	施釉 施釉	
37	12	232	I	SD1	磁器(白磁)	小杯	(6.6)	3.0	4.9	施釉 施釉	肥前系
37	13	233	I	SD1	磁器(青磁)	湯呑み				施釉 施釉	内外面に貫入
37	13	234	I	SD1	磁器(青磁)	水注				施釉 施釉	
37	12	235	I	SD1	磁器(染付)	碗				施釉 施釉	
37	12	236	I	SD1	磁器(染付)	碗		(4.0)		施釉 施釉	
37	12	237	I	SD1	磁器(染付)	碗				施釉 施釉	
37	13	238	I	SD1	磁器(染付)	皿	(9.0)	3.3	2.7	施釉 施釉	外底面「大川手長」銘 高台端部に離れ砂付着
38	21	239	I	SD1	瓦質土器	甕				ヨコナデ、ヨコハケ、ハケ後ナデ ヨコナデ、ナデ、ハケ後ナデ	
38	21	240	I	SD1	瓦質土器	甕				ヨコナデ、ヨコハケ、ハケ後ナデ ヨコナデ、ナデ	
38	21	241	I	SD1	瓦質土器	甕				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
38	21	242	I	SD1	瓦質土器	甕				ヨコナデ、ヘラナデ後ヨコナデ ヨコナデ	
38	22	243	I	SD1	瓦質土器	甕				ヨコナデ、ナナメハケ後ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
38	22	244	I	SD1	瓦質土器	甕				ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ、ナデ	
38	22	245	I	SD1	土師質土器	甕				ヨコナデ、ヘラミガキ ヨコナデ	
38	21	246	I	SD1	土師質土器	甕				ヨコナデ ヨコナデ	
38	22	247	I	SD1	土師質土器	甕		(14.7)		ナデ ナデ	板目圧痕
38	22	248	I	SD1	陶器	甕				ヨコナデ ヨコナデ	備前系
38	22	249	I	SD1	陶器	甕				ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ	備前系
39	22	250	I	SD2	土師器	坏		(5.6)		ナデ ヨコナデ	回転糸切り 板目圧痕
39	22	251	I	SD2	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
39	22	252	I	SD4	土師器	坏		(5.6)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	
39	22	253	I	SD4	土師器	坏		(6.0)		ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り
39	22	254	I	SD4	土師質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	

挿図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (現存値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
39	22	255	I	SD4	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	
39	13	256	I	SD4	磁器(青磁)	碗				施釉 施釉	
39	22	257	I	SD4	磁器	碗				施釉 施釉	
39	13	258	I	SD4	磁器(青磁)	小杯		(3.4)		施釉 施釉，ヨコナデ	
39	22	259	I	SD4	陶器	おろし皿		(5.0)		ナデ ヨコナデ	回転糸切り
39	22	260	II	SD1	土師器	皿		(4.2)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	
39	22	261	II	SD1	土師器	皿		(4.2)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	回転糸切り
39	22	262	II	SD1	土師器	坏		(4.8)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	回転糸切り
39	22	263	II	SD1	土師器	坏		(4.2)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	回転糸切り
39	23	264	II	SD1	土師器	坏		(6.6)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	回転糸切り
39	22	265	II	SD1	土師器	坏	(10.6)	(4.6)	(2.85)	磨滅のため不明 磨滅のため不明	回転糸切り
39	22	266	II	SD1	土師器	坏	(11.6)	(4.4)	(2.7)	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	
39	22	267	II	SD1	土師器	坏	(12.2)	(4.8)	(2.75)	磨滅のため不明 磨滅のため不明	回転糸切り
39	22	268	II	SD1	土師器	坏				ヨコナデ ヨコナデ	
39	22	269	II	SD1	瓦質土器	擂鉢				ナデ ナデ，ヨコナデ	
39	23	270	II	SD1	土師質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
39	23	271	II	SD1	土師質土器	擂鉢				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
39	23	272	II	SD1	土師質土器	擂鉢		(18.2)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	
39	23	273	II	SD1	瓦質土器	足鍋	(23.2)			ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，指圧整形後ナデ，指圧整形	外面一部に炭化物・煤付着
39	23	274	II	SD1	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ，ナナメハケ後ナデ ヨコナデ，ナデ	
39	23	275	II	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	外面に炭化物・煤付着
39	23	276	II	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ナデ	外面に炭化物・煤付着
39	23	277	II	SD1	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	
39	23	278	II	SD1	陶器	おろし皿				ナデ ナデ	
39	13	279	II	SD1	磁器(青磁)	碗				施釉 施釉	内外面に貫入
39	23	280	II	SD1	土師質土器	火鉢				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
39	23	281	II	SD1	瓦質土器	焙烙(鉢)	(32.2)			ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	
40	23	282	II	SD2	土師器	坏				ヨコナデ ヨコナデ	
40	23	283	II	SD2	土師器	坏		(5.8)		ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り 板目圧痕
40	23	284	II	SD2	土師器	坏	(10.6)	(7.5)	(1.4)	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
40	23	285	II	SD2	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
40	23	286	II	SD2	瓦質土器	羽釜				ヨコハケ ヨコナデ	
40	23	287	II	SD3	土師器	皿	(7.3)	(4.8)	(2.45)	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	
40	23	288	II	SD3	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ，ヨコハケ後ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，ナデ	289と同一個体
40	23	289	II	SD3	瓦質土器	擂鉢				ヨコハケ，ナデ ナデハケ後ナデ，指圧整形後ナデ	288と同一個体
40	23	290	II	SD3	瓦質土器	擂鉢	(28.0)			ヨコナデ ヨコナデ，指圧整形後ナデ	
40	23	291	II	SD3	瓦質土器	火鉢				ヨコハケ後ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，ナデ	
40	23	292	II	SD3	瓦質土器	甕				ナナメハケ後ヨコナデ，ナナメハケ ヨコナデ，ナナメハケ後ナデ	
40	23	293	II	SD3	瓦質土器	焙烙(把手)				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
40	23	294	II	SD5	土師器	皿		3.0		磨滅のため不明 磨滅のため不明	
40	23	295	II	SD5	土師器	坏				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
40	23	296	II	SD5	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	外面に煤付着
40	24	297	II	SD5	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	

挿図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (現存値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
40	24	298	II	SD5	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
40	24	299	II	SD5	土師質土器	足鍋				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
40	24	300	II	SD6	陶器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	備前系
40	13	301	II	SD7	陶器	小杯	(9.0)	(3.2)	5.2	ヨコナデ 施釉 ヨコナデ 施釉	萩系
40	24	302	II	SD7	陶器	壺	(17.3)			ヨコナデ 施釉 ヨコナデ 施釉	萩系
40	13	303	II	SD7	磁器(染付)	皿	(14.0)	(8.2)	(5.0)	施釉 施釉	外面：唐草、内面：福・松を染付。輪花状口縁。
40	24	304	II	SD10	土師器	坏				ヨコナデ ヨコナデ	
40	24	305	II	SD10	土師器	坏		(7.0)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	
40	24	306	II	SD10	土師器	坏	(9.8)	(5.0)	(3.8)	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り
40	24	307	II	SD10	土師質土器	擂鉢	(27.2)			磨滅のため不明 磨滅のため不明	
40	24	308	II	SD12	瓦質土器	擂鉢				磨滅のため不明 ナデ	回転糸切り
41	24	309	II	SD4	土師器	坏		(6.3)		ヨコナデ、ナデ 磨滅のため不明	回転糸切り
41	24	310	II	SD4	土師器	坏				磨滅のため不明 ヨコナデ	
41	24	311	II	SD4	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ、ヨコハケ ヨコナデ、ナデ	
41	24	312	II	SD4	土師質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	
41	24	313	II	SD4	土師質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
41	24	314	II	SD4	瓦質土器	足鍋	(23.6)			ヨコナデ ヨコナデ、ナデ	外面全体に炭化物・煤付着
41	24	315	II	SD4	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ、ヨコハケ後ヨコナデ、回圧整形後ナデ	
41	25	316	II	SD4	土師質土器	足鍋	25.9		21.1	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ、格子タタキ	外面に煤付着
41	24	317	II	SD4	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
41	24	318	II	SD4	瓦質土器	鍋				ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ	外面に炭化物・煤付着
41	24	319	II	SD4	瓦質土器	火鉢		(17.4)		ヨコハケ、ナナメハケ後ヨコナデ、ヨコナデ ナデ、ヨコナデ	
41	24	320	III	SD2	土師器	坏	(11.0)	(5.4)	(2.0)	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り
42	25	321	II	SP2327	土師器	皿				ヨコナデ ヨコナデ	
42	25	322	I	SP1049	土師器	皿	5.7	4.0	0.65	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り
42	25	323	I	SP1136	土師器	皿	7.5	5.7	1.0	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り
42	25	324	I	SP1138	土師器	皿	(7.5)	5.2	1.65	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り
42	25	325	I	SP1191	土師器	皿		(4.2)		ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	板目圧痕
42	25	326	I	SP1138	土師器	皿		5.6		磨滅のため不明 磨滅のため不明	回転糸切り
42	25	327	I	SP1046	土師器	皿		4.6		ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り、板目圧痕。円盤状高台。
42	25	328	I	SP1252	土師器	坏		4.8		ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り、板目圧痕。円盤状高台。
42	25	329	I	SP1357	土師器	坏				ヨコナデ 磨滅のため不明	
42	25	330	III	SP2204	土師器	坏		(6.2)		磨滅により不明 ヨコナデ	回転糸切り
42	25	331	I	SP1150	土師器	坏		(6.7)		ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り
42	25	332	II	SP2241	土師器	坏		(7.4)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	回転糸切り
42	25	333	I	SP1154	土師器	坏		(3.8)	4.5	磨滅のため不明 磨滅のため不明	
42	25	334	I	SP1357	土師器	坏	(11.1)	(7.5)	(3.7)	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
42	25	335	I	SP1389	土師器	坏				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
42	25	336	I	SP1258	土師器	坏	(10.8)	(4.8)	(4.4)	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り
42	25	337	I	SP1279	土師器	坏	(11.6)	4.8	2.6	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	
42	25	338	I	SP1366	土師器	坏	(12.5)	(6.6)	3.95	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	回転糸切り
42	25	339	I	SP1357	土師器	坏	(14.4)	(7.6)	4.8	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り

挿図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (現存値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
42	25	340	I	SP1036	黒色土器	埦		(7.5)		ヘラミガキ ヨコナデ	黒色土器A類
42	25	341	I	SP1150	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ, 指圧整形後ナデ	
42	25	342	I	SP1052	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ, ナデ	
42	25	343	I	SP1314	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	外面に煤付着
42	25	344	I	SP1368	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
42	25	345	II	SP2010	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ, ナデ	外面に煤付着
42	25	346	I	SP1357	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ, 指圧整形後ナデ	
42	25	347	I	SP1383	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
42	13	348	I	SP1317	貿易陶磁器 (白磁)	碗				施釉 施釉	玉縁口縁
42	13	349	II	SP2125	磁器(染付)	碗				施釉 施釉	口縁端部に砂付着(釉と融着)
42	13	350	I	SP1345	陶器	埦	(12.6)	(5.0)	7.2	施釉 施釉	内外面に貫入。体部外面に草花文、肥前系。
42	26	351	II	SP2339	土師質土器	甕				ヨコナデ, ヘラケズリ ヨコナデ, 格子タタキ	SD1出土資料と接合
42	26	352	I	SP1251	土師質土器	甕	(18.8)			ヨコナデ, ナデ ヨコナデ, ナデ, ヘラケズリ	
42	25	353	II	SP2339	土師質土器	甕		(16.8)		ヘラケズリ, ヨコナデ 格子タタキ	
42	26	354	II	SP2339	土師質土器	甕	(36.8)			ヨコナデ, ヘラケズリ ヨコナデ, 格子タタキ	
43	26	355	II	SC2	土師器	皿		(5.4)		ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
43	26	356	II	SC2	土師器	皿				ヨコナデ ヨコナデ	
43	26	357	II	SC2	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ, ヨコハケ ヨコナデ, ナデ	
43	26	358	II	SC2	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ, ナデ	
43	26	359	II	SC2	瓦質土器	擂鉢				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
43	26	360	II	SC2	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
43	26	361	II	SC2	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ, ナデ ヨコナデ	
43	26	362	II	SC2	瓦質土器	鍋				ナナメハケ後ヨコナデ ヨコナデ	
43	26	363	II	SC2	土師質土器	鉢				ナナメハケ後ヨコナデ ヨコナデ	
43	26	364	II	SC2	土師質土器	鉢	5.75	(5.0)	3.35	ヨコナデ, ナデ ヨコナデ	板目圧痕の痕跡
43	26	365	II	SC2	土師質土器	鉢	7.6	6.0	3.8	ヨコハケ後ヨコナデ, ハケ後ナデ ヨコナデ	回転糸切り後ナデ
43	26	366	II	SC2	磁器	皿				施釉 施釉	外面に一筆沈線
43	26	367	II	SC3	土師器	坏				ヨコナデ ヨコナデ	口縁端部内外面に煤付着
43	26	368	II	SC3	土師器	坏		(6.8)		磨滅のため不明 ヨコナデ	回転糸切り
43	26	369	II	SC3	陶器	擂鉢	(24.6)			ヨコナデ ヨコナデ	備前系
43	26	370	II	SC3	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ, ナナメハケ後ナデ ヨコナデ, ナデ	
43	26	371	II	SC3	瓦質土器	擂鉢		(13.1)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	
43	26	372	II	SC3	瓦質土器	鍋				ヨコハケ後ヨコナデ, ヨコハケ後ナデ ヨコナデ	外面全体に煤付着
43	26	373	II	SC3	瓦質土器	火鉢				ヨコナデ, ヨコハケ後ナデ, ヨコハケ ヨコナデ, ナデ	
43	26	374	II	SC3	瓦質土器	火鉢	(39.2)			ヘラミガキ後ヨコナデ, ヨコハケ 後ナデ, ヨコハケ後ヘラミガキ ヨコナデ, ヘラミガキ	
43	27	375	II	SC3	土師質土器	火鉢(脚部)				指圧整形	
44	13	376	I	灰褐色土	緑釉陶器	埦				回転ナデ, 施釉 回転ナデ, 施釉	素地：須恵質
44	13	377	I	灰褐色土	緑釉陶器	埦				回転ナデ, 施釉 回転ナデ, 施釉	素地：須恵質
44	27	378	I	灰褐色土	土師器	坏	(11.1)	(6.7)	(1.55)	ヨコナデ, 指圧整形後ナデ ヨコナデ	回転糸切り 板目圧痕
44	27	379	I	灰褐色土	土師器	埦		(6.3)		ヘラミガキ ヨコナデ, ヘラミガキ	回転糸切り後ヘラミガキ
44	27	380	I	灰褐色土	瓦質土器	擂鉢				ナナメハケ後ヨコナデ ヨコナデ	欠損部分に片口の痕跡
44	27	381	I	灰褐色土	瓦質土器	擂鉢				ヨコハケ ヨコナデ, 指圧整形後ナデ	
44	27	382	I	灰褐色土	瓦質土器	擂鉢				ヨコハケ後ヨコナデ, ナデ ヨコナデ, ハケ後ナデ	

時期	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (現存値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
44	27	383	I	灰褐色土	土師質土器	擂鉢	(23.8)			ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，ナデ	
44	27	384	I	灰褐色土	陶器	擂鉢				ヨコナデ，ナナメハケ ヨコナデ，指圧整形後ナデ	
44	27	385	I	灰褐色土	陶器	擂鉢				施釉 施釉	瑞佐系
44	27	386	I	灰褐色土	陶器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	備前系
44	27	387	I	灰褐色土	陶器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	備前系 388と同一個体
44	27	388	I	灰褐色土	陶器	擂鉢				ナデ(使用により摩滅) ヨコナデ	底部：指圧整形後ナデ 387と同一個体
44	27	389	I	灰褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ 指圧整形後ナデ	
44	27	390	I	灰褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ナデ	
44	27	391	I	灰褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ナデ	
44	27	392	I	灰褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	
44	27	393	I	灰褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，ナデ	
44	27	394	I	灰褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ナデ	
44	27	395	I	灰褐色土	瓦質土器	足鍋	(25.5)			ヨコナデ ヨコナデ，指圧整形後ナデ	
44	27	396	I	灰褐色土	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ	
44	27	397	I	灰褐色土	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ナデ	外面一部に炭化物・煤付着
44	27	398	I	灰褐色土	土師質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ	
44	27	399	I	灰褐色土	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	外面全体に炭化物やや厚めに付着
44	27	400	I	灰褐色土	瓦質土器	甕				磨滅のため不明 磨滅のため不明	
44	27	401	I	灰褐色土	土師質土器	甕	(19.2)			磨滅のため不明 ヨコナデ	
44	27	402	I	灰褐色土	土師質土器	甕				ヨコナデ ヨコナデ	
44	27	403	I	灰褐色土	土師質土器	甕				ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	
45	27	404	I	灰褐色土	土師質土器	羽釜				ヨコハケ後ヨコナデ ヨコナデ，ヨコハケ後ヨコナデ	
45	27	405	I	灰褐色土	瓦質土器	鉢				ヨコハケ ヨコナデ	
45	28	406	I	灰褐色土	瓦質土器	焙烙				ヨコナデ，ヨコハケ，ヨコハケ後ヨコナデ ヨコナデ，指圧整形後ナデ	
45	28	407	I	灰褐色土	瓦質土器	鉢	(17.0)	(3.3)	(10.2)	ヨコナデ，ヨコハケ後ヨコナデ ヨコナデ，指圧整形後ナデ	板目圧痕
45	28	408	I	灰褐色土	瓦質土器	鉢	(20.6)	(16.7)	(4.45)	ヨコハケ後ヨコナデ，ヨコハケ，ハケ後ナデ ヨコナデ，タテハケ後ヨコナデ，指圧整形後ナデ	板目圧痕
45	27	409	I	灰褐色土	瓦質土器	鉢	(27.0)	(19.4)	(3.9)	ヨコナデ，ヨコハケ，ナデ ヨコナデ，指圧整形後ナデ	
45	27	410	I	灰褐色土	土師質土器	鉢				ヘラミガキ ヨコナデ，ナデ	
45	13	411	I	灰褐色土	貿易陶磁器(白磁)	碗				施釉 施釉	玉縁口縁
45	13	412	I	灰褐色土	貿易陶磁器(白磁)	碗				施釉 施釉	玉縁口縁
45	28	413	I	灰褐色土	陶器	埦		4.0		施釉 回転ヨコナデ	天目埦 蛇の目高台
45	28	414	I	灰褐色土	陶器	埦		(4.7)		施釉 施釉	内外面に貫入 肥前系
45	28	415	I	灰褐色土	陶器	埦	(11.3)	(4.3)	(3.4)	施釉 施釉	見込み：蛇の目に釉掻き取り
45	13	416	I	灰褐色土	磁器(白磁)	鉢	(20.0)			施釉 施釉	内外面に貫入
45	27	417	I	灰褐色土	磁器(白磁)	紅皿				施釉 施釉	
45	13	418	I	灰褐色土	磁器(青磁)	皿	(13.0)			施釉 施釉	
45	13	419	I	灰褐色土	磁器(青磁)	碗		(6.1)		施釉 施釉	内外面に貫入
45	13	420	I	灰褐色土	磁器(青磁)	碗	(15.2)	(7.2)	(6.4)	施釉 施釉	外面：蓮弁状文，内面：草花文，見込み：印花文，底部外面：施釉掻き取り
45	13	421	I	灰褐色土	磁器(染付)	碗				施釉 施釉	外面：一重圏線 内面：二重圏線・草花文
46	13	422	I	黒褐色土	灰釉陶器	長頸壺	(5.2)			回転ナデ 回転ナデ	素地：頸垂質
46	13	423	I	黒褐色土	緑釉陶器	埦		(6.0)		回転ナデ 回転ナデ	素地：頸垂質 見込みに一条沈線

掲図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm)(現存値) 口径	底径	器高	調整 (内) (外)	備考
46	28	424	I	黒褐色土	土師器	皿	(6.7)	(5.6)	1.0	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
46	28	425	I	黒褐色土	土師器	皿		(4.8)		ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り 板目圧痕
46	28	426	I	黒褐色土	土師器	皿	(8.8)	(5.0)	1.0	ヨコナデ ヨコナデ	
46	28	427	I	黒褐色土	土師器	坏		(5.6)		ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	
46	28	428	I	黒褐色土	土師器	坏		(5.4)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	回転糸切り
46	28	429	I	黒褐色土	土師器	坏		(5.3)		磨滅のため不明 ヨコナデ	底部：ヘラ切り
46	28	430	I	黒褐色土	土師器	坏		(5.6)		ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
46	28	431	I	黒褐色土	土師器	坏		(5.6)		磨滅のため不明 磨滅のため不明	
46	28	432	I	黒褐色土	土師器	坏		(6.6)		ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
46	28	433	I	黒褐色土	土師器	坏		(6.6)		ナデ ヨコナデ	回転糸切り
46	28	434	I	黒褐色土	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ，ナデ(使用により摩滅) ヨコナデ	
46	28	435	I	黒褐色土	瓦質土器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	
46	28	436	I	黒褐色土	陶器	擂鉢				ヨコナデ ヨコナデ	片口 施釉系
46	28	437	I	黒褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	外面に煤付着
46	28	438	I	黒褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	外面に煤付着
46	28	439	I	黒褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	
46	28	440	I	黒褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，ナデ	
46	28	441	I	黒褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	外面に煤付着
46	28	442	I	黒褐色土	瓦質土器	足鍋				ヨコナデ，ヨコハケ ヨコナデ，ナデ	外面に煤付着
46	28	443	I	黒褐色土	土師質土器	足鍋				ヨコナデ ヨコナデ，ナデ	外面に煤付着
46	28	444	I	黒褐色土	瓦質土器	茶釜				ヨコナデ，ナデ ヨコナデ，ヘラミガキ	
46	13	445	I	黒褐色土	陶器	坏		(4.2)		ヨコナデ ヨコナデ	見込みに蛇の目状釉土目
46	13	446	I	黒褐色土	磁器(染付)	碗		(5.8)		施釉 施釉	高台下部に離れ砂付着
46	28	447	II	赤褐色粘質土	土師器	坏	(12.0)	(7.0)	(2.3)	ヨコナデ ヨコナデ	回転糸切り
46	28	448	II	赤褐色粘質土	土師器	坏	(12.8)	(2.5)	(5.1)	ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
46	28	449	II	赤褐色粘質土	土師器	坏		(4.2)		ヨコナデ，ナデ ヨコナデ	回転糸切り
47	29	456	I	黒褐色土	瓦	平瓦				布目圧痕 ナデ	
47	29	457	I	ＳＤ１	瓦	桟瓦				ヨコナデ，板状工具押圧による整形 ヨコナデ	

第５表　石製品・金属製品ほか観察表

掲図	図版	番号	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm)(現存値) 長さ	幅	厚さ	重量 (g)(現存値)	石材	備考
47	29	450	I	黒褐色土	石製品	石鍋	(30.8)				滑石	
47	29	451	I	ＳＤ１	石製品	石鍋					滑石	
47	29	452	I	ＳＤ１	石製品	石臼			6.45	(798)	安山岩	
47	29	453	I	灰褐色土	石製品	碁石	径 1.8～1.9		0.5	2.6	玄武岩	黒色
47	29	454	II	ＳＫ2367	石製品	砥石	10.3	6.4	2.4	171	砂岩	砥石面正・両側面３面
47	29	455	I	灰褐色土	石製品	砥石	9.6	5.8	5.3	460	凝灰岩	砥石面正・裏・両側面４面
47	29	458	I	ＳＤ１	鉄滓付着品							頭巻器坏口縁部及び破断面に鉄滓付着
47	29	459	I	黒褐色土	青銅製品	煙管(吸口)	5.2	小口径 0.9	吸口径 0.4	3.9		小口内面に羅宇竹が一部残存
47	29	460	II	ＳＤ３	鉛製品	鉛弾	径1.2			9.2		青弾痕不明
47	29	461	I	ＳＤ１	青銅製品	分銅	3.1	1.4	1.4	41.7		棹秤用

Ⅳ まとめ

今回の発掘調査により、東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）は中世後半代を中心とした集落跡であることが確認された。検出された遺構総数は、掘立柱建物跡18棟、竪穴状遺構３基、溝状遺構20条、土坑27基、井戸１基、柱穴714個である。Ⅰ地区ではＳＤ１の内側に遺構が密集していたが、調査区北側及び南西側の落ち込み部分では後世の削平により遺構は確認されなかった。Ⅱ地区ではＳＤ１及びＳＤ２を中心とした中央部で遺構が多く検出された。Ⅲ地区では遺構はほとんど検出されなかった。また、出土遺物には土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦質土器、土師質土器、陶磁器（青磁・白磁等）、石製品（石鍋・石臼・碁石等）、金属製品（鉛弾・煙管・分銅）などがあり、古代から近世まで広範囲にわたっている。

以下に本遺跡における特徴的な事項をいくつか取り上げて、まとめとしたい。

掘立柱建物跡について

Ⅰ地区から８棟、Ⅱ地区から10棟、合計18棟の掘立柱建物跡を検出した。床面積が30㎡前後の比較的大型の建物は３棟検出された。いずれも南北方向に棟をそろえている。20～30㎡の中型建物はなく、10～20㎡の建物が10棟、10㎡未満の建物が５棟であった。また、これらの建物は建て替えられた形跡はなく、Ⅰ地区は４期、Ⅱ地区は５期にわたって集落が営まれたと考えられる。18棟のうち一部は13世紀代のものと考えられるが、遺物の出土状況や埋土の状況から大部分は14世紀から16世紀代の年代幅におさまると考えられる。本遺跡から南西に約400ｍ離れた東禅寺・黒山遺跡の５次にわたる過去の調査では、概ね金毛川に近く、なおかつ旧海岸線に近い場所で古代の建物が多く検出され、北東側の若干標高が高くなる場所ではほとんどの建物が中世以降のものであった。このことは本遺跡周辺地域の集落分布の歴史的変遷を如実に物語っているといえよう。すなわち、古代から中世にかけて集落の中心域が西側から東側へ、低地から微高地へと移動するという事実と符合する。

溝状遺構について

溝状遺構は大小合わせて20条を検出した。時期はほとんどの溝が中世～近世前半と考えられる。中でもⅠ地区のＳＤ１とⅡ地区のＳＤ１は規模も大きく、Ｌ字状に曲折している。遺物も大量に出土した。Ⅱ地区ＳＤ２は流路幅及び流長は前述の２条には劣るものの、やはりＬ字状に曲折していることから、この三つの溝は集落の区画の機能も兼ね備えていたものと考えられる。鋳銭司地区周辺遺跡でもこのような区画割が確認されており、この地域における共通性がうかがえる。

また、Ⅰ地区ＳＤ１とⅡ地区ＳＤ２の屈折部では溜め枡状の遺構が検出された。このような形状の遺構は東禅寺・黒山遺跡の過去の調査では検出されておらず、また、周辺の遺跡からの検出例もない。類例がないので断定することはできないが、おそらくは雨水又は伏流水を溜めて耕作施設に水を供給する機能をもった灌漑用施設の可能性も考えられる。

井戸について

Ⅰ地区において素掘の井戸が１基検出された。出土遺物から16世紀半ば頃までにはその機能を果たしていたと考えられるが、掘削された時期については明確でない。今回の調査を含めて東禅寺・黒山遺跡でこれまでに検出された井戸は１基を除いてすべて素掘である。(12) この要因については、遺跡周辺地

域が崩落しにくい地盤であること、地下水位が高いこと、経済的負担が少ないことなどが推定されている。(2)

竪穴状遺構について

II地区において竪穴状遺構を3基検出した。これらの規模は、SC1が現状で約8㎡、SC2・SC3が共に8㎡超で、SC1が調査区外に延びていることを考慮すると、この三つの遺構の規模はほぼ同じである。SC1は周囲に遺構がほとんどなく、また遺物も出土していないため、時期の特定は難しい。SC2・SC3は遺物の出土状況から推定すると15～16世紀代に比定される。中世における竪穴状遺構については、東禅寺・黒山遺跡周辺では検出例がなく、防府市の下右田遺跡第4次調査で5基検出例があるのみである。そのうちの1基は遺構の状況や出土遺物などから鍛冶工房的な性格と推定されているが、本遺跡の竪穴状遺構は木炭・鉄滓・焼土の出土も認められないため、工房跡の可能性は乏しいと考えられる。また、柱穴も伴わないことから、住居とも考えにくく、どのような性格をもつものかは不明であり、今後の類例を待ちたい。

緑釉陶器・灰釉陶器について

今回の調査で緑釉陶器4点（埦3点、皿1点）、灰釉陶器1点（長頸壺）が出土した。出土場所はI地区SD1埋土内と包含層の灰褐色土層、黒褐色土層からで、いずれも遺構に伴うものではなく、周辺からの二次堆積物である。いずれも須恵質の素地をもち、10世紀代の所産と考えられる。これまでの東禅寺・黒山遺跡における調査や近隣地域の調査でも緑釉陶器や三叉トチン、坩堝などが出土しており、周防鋳銭司跡との関連性が指摘されているが、今回の調査結果からは本遺跡もしくは本遺跡周辺でも周防鋳銭司と同時期に集落が営まれていたことは推定できるが、本集落の性格が周防鋳銭司と直接的な関連性をもつものであったかどうかは定かでない。

おわりに

東禅寺・黒山遺跡に関しては、周防鋳銭司跡との関連性がこれまで指摘されながら、今回の調査でもそれを明確に裏付ける遺構や遺物の発見には至らなかった。しかしながら、古代から中世にかけての鋳銭司地域における集落の様相や歴史的推移の状況などがより明らかになった点もあり、さらに今後周辺一帯での調査の進展に期待したい。

註

（1）小林善也「山口県の井戸跡についての覚書」『陶塤』第14号　2001年

（2）山口県埋蔵文化財センター「東禅寺・黒山遺跡（東大円・上徳田地区）」　2003年

参考文献

山口県教育財団「東禅寺・黒山遺跡Ⅰ・Ⅱ」1996・1997年

山口県埋蔵文化財センター「東禅寺・黒山遺跡Ⅲ～Ⅴ」1998～2000年

山口県教育委員会文化課編「下右田遺跡第4次調査概報」日本道路公団・建設省山口工事事務所・山口県教育委員会　1980年

山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター編「上辻・鋳銭司大歳・今宿西」山口県教育委員会・建設省山口工事事務所　1984年

図　版

遺跡遠景（南から）

図版　2

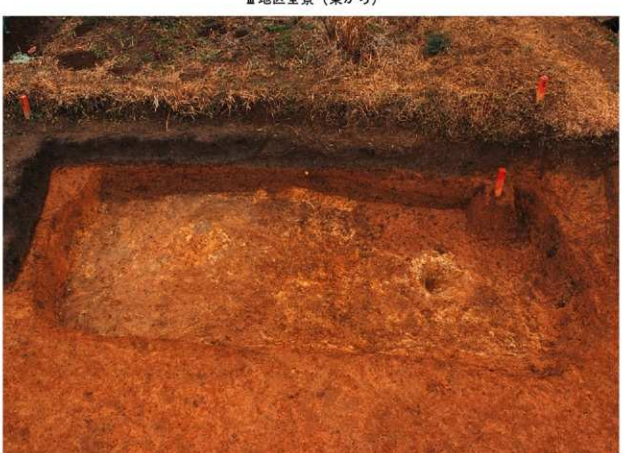
遺跡全景（南から）

Ⅰ地区全景（南から）

図版　4

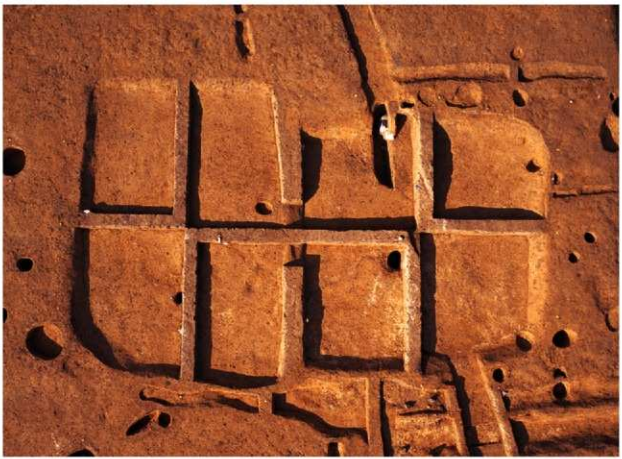
Ⅱ地区全景（南から）

Ⅱ地区全景（東から）

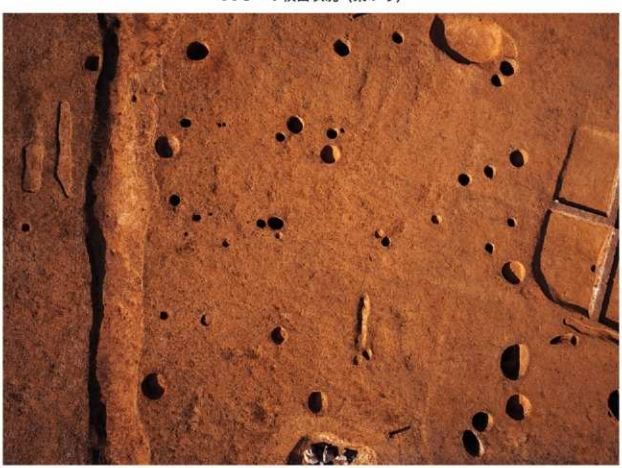


SC１完掘状況（西から）

図版　6



SC 2 ・ 3 検出状況（東から）



SB 9 完掘状況（東から）

SB18完掘状況（東から）

Ⅱ地区SD３・４・５・６・７完掘状況（東から）

Ⅰ地区SD１遺物出土状況（北から）

Ⅰ地区SD１遺物出土状況（東から）

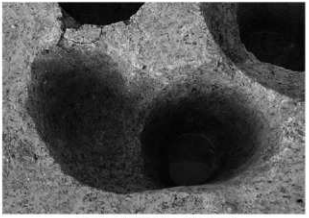
SE1002集石状況（西から）

SK1001遺物出土状況（北から）

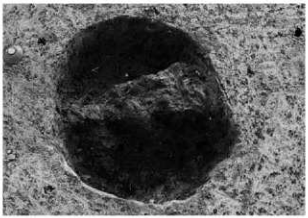
SK1001完掘状況（西から）

SK1120完掘状況（南から）

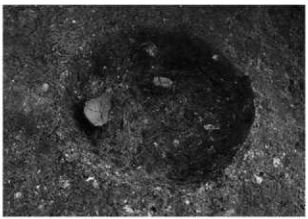
SK1087遺物出土状況（北から）



SK1087完掘状況（南から）

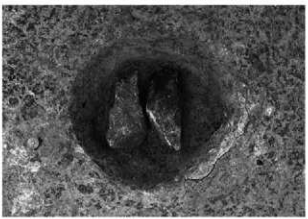

SP1116焼土・木炭充塡状況（北から）

SP1138遺物出土状況（北から）


SP1154遺物出土状況（北から）

SP1186柱根込め石出土状況（北から）

SP1206遺物出土状況（西から）


SP1222柱根込め石出土状況（北から）

SP1251遺物出土状況（東から）

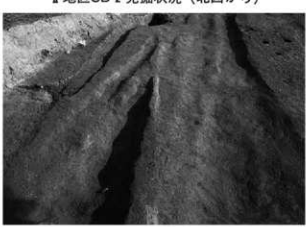
SP1252遺物出土状況（西から）

Ⅱ地区SD１東西流路完掘状況（西から）

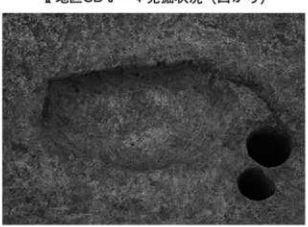
Ⅱ地区SD１以南調査区全景（北から）

Ⅱ地区SD２完掘状況（北西から）

Ⅱ地区SD３・４完掘状況（西から）



Ⅱ地区SD５・６・７完掘状況（西から）



SK2005完掘状況（東から）

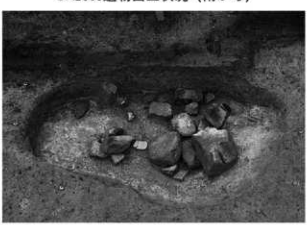
SK2089完掘状況（西から）

SK2115礫出土状況（南から）

SK2358完掘状況（東から）

SK2359遺物出土状況（南から）

SK2359完掘状況（東から）



SK2367遺物出土状況（西から）

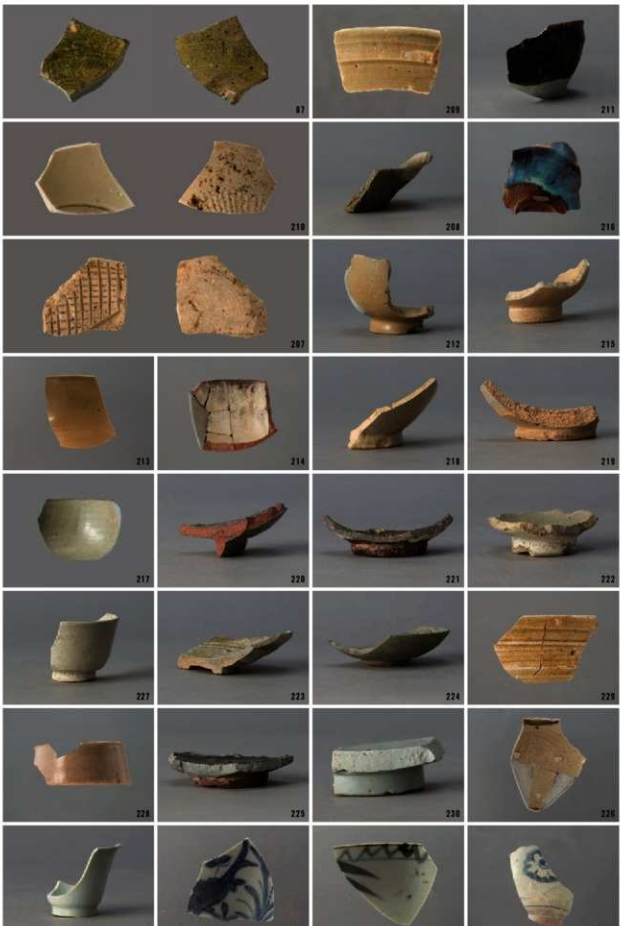
SP2160礫出土状況（西から）

SP2320遺物出土状況（東から）

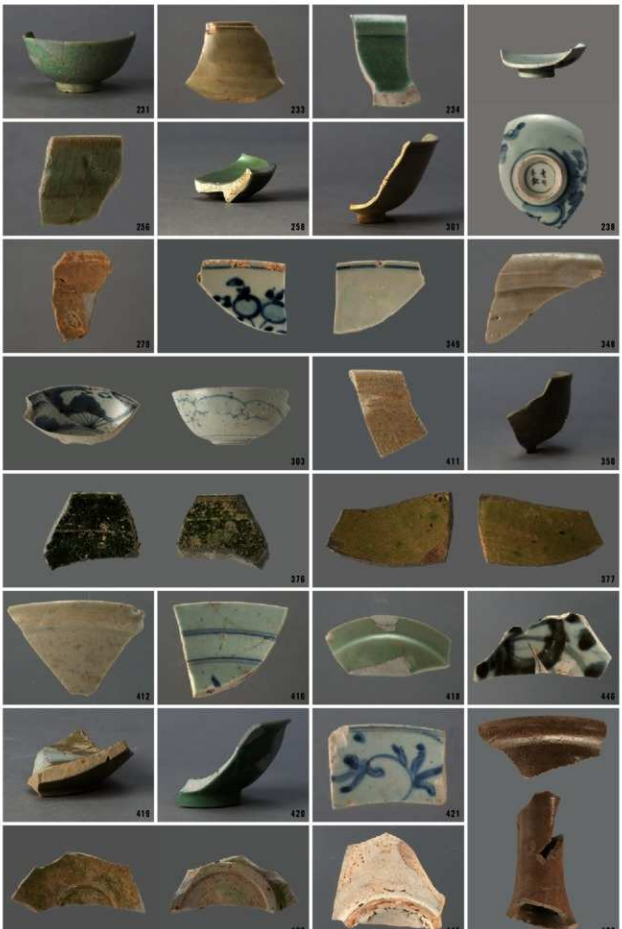
SP2241遺物出土状況（南から）

Ⅲ地区SD１・２完掘状況（西から）

図版　12

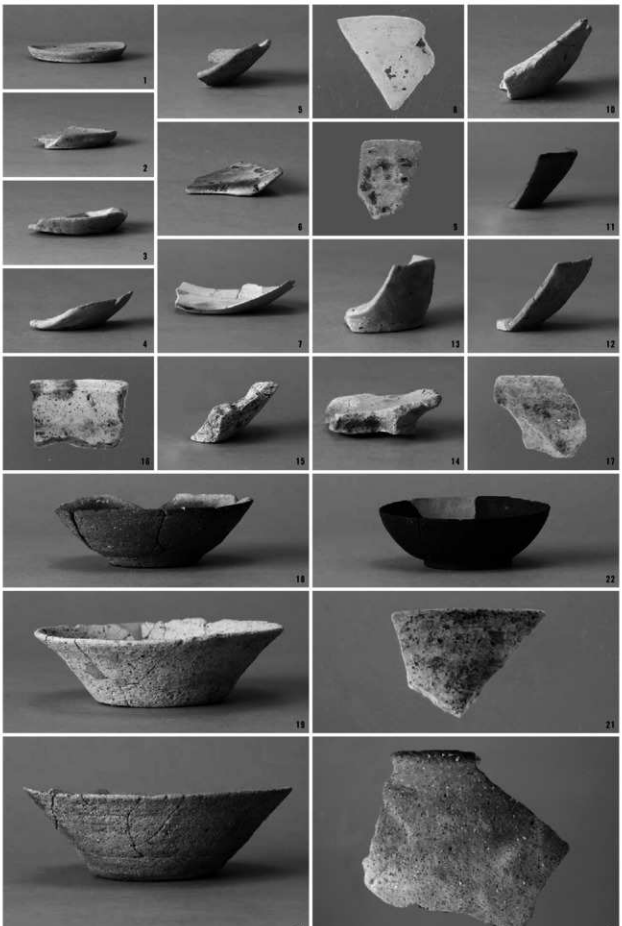

87
209
211
210
208
216
207
212
215
213
214
218
219
217
220
221
222
227
223
224
229
228
225
230
226
232
235
237
236

出土土器①


231
233
234
256
258
301
238
279
349
348
303
411
358
376
377
412
416
418
440
419
420
421
423
445
422

出土土器②

図版　14

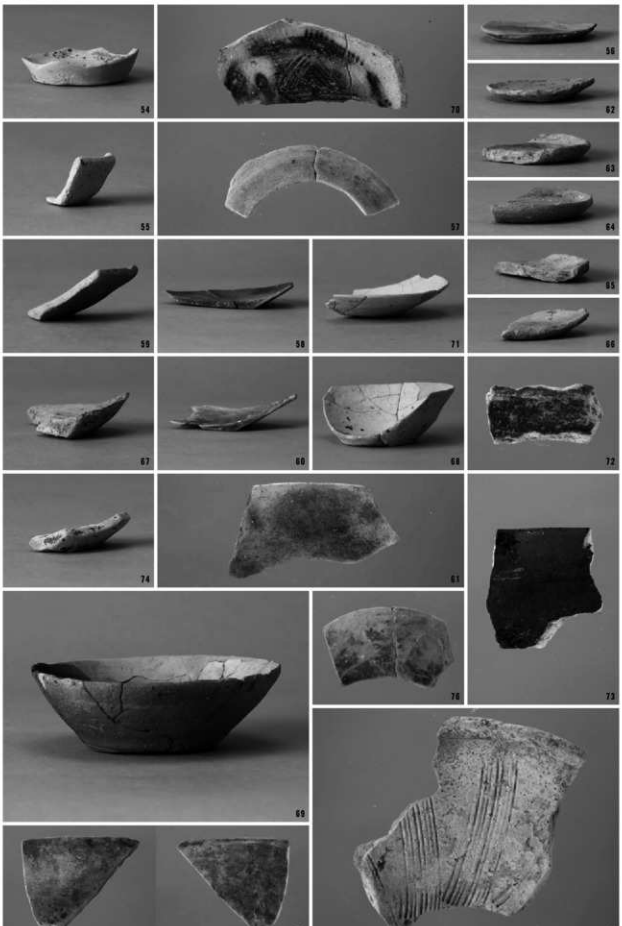


出土土器③

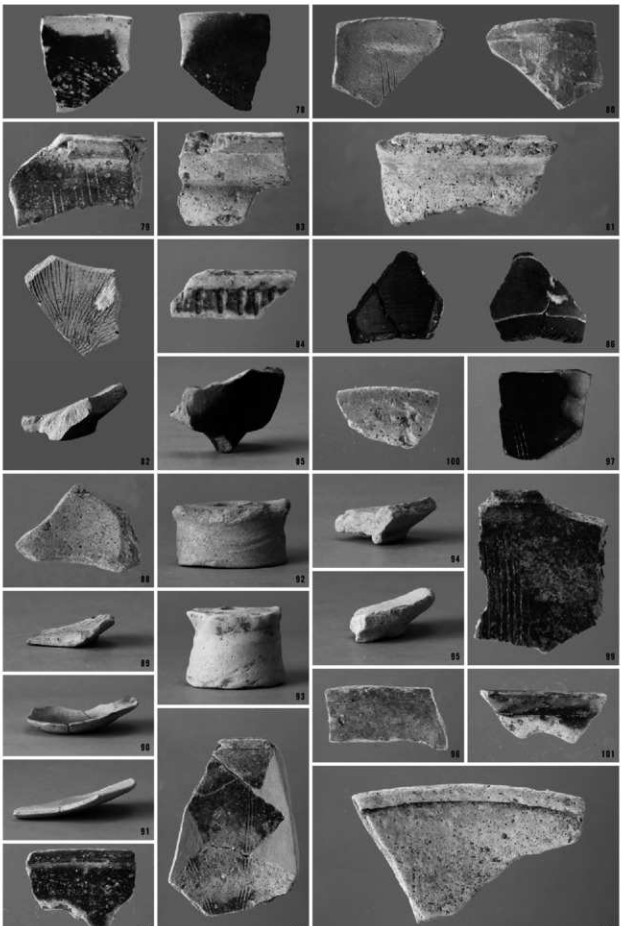
24
32
39
40
25
34
41
44
26
33
42
27
35
43
28
45
47
29
46
31
30
48
36
50
51
49
37
38
52
53

出土土器④

図版　16

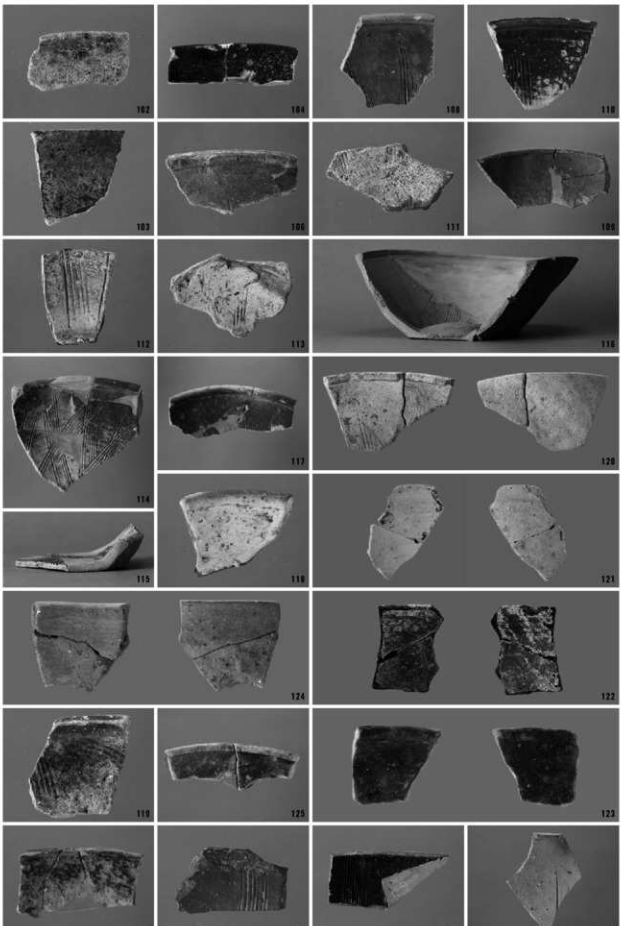


出土土器⑤

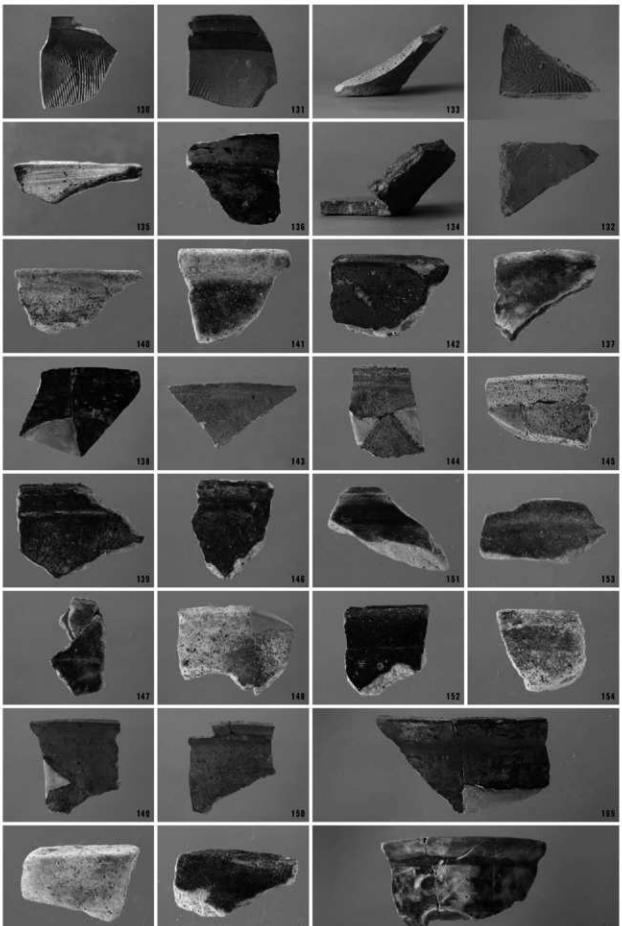

78
80
79
83
81
82
84
86
85
100
97
88
92
94
89
93
95
99
90
96
101
91
98
107
105

出土土器⑥

図版　18

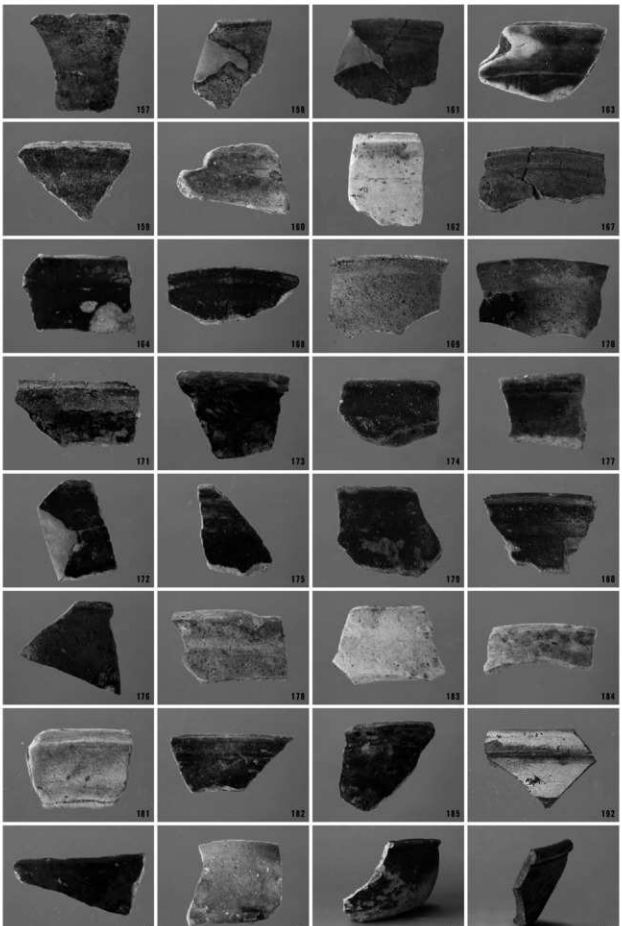

102
104
108
110
103
106
111
109
112
113
116
114
117
120
115
118
121
124
122
119
125
123
126
127
128
129

出土土器⑦

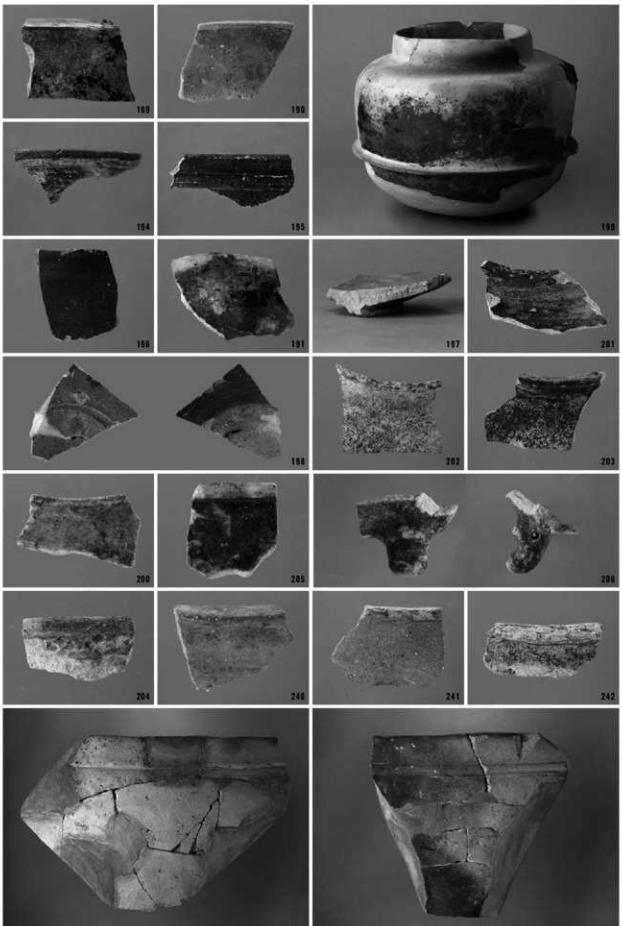

130
131
133
135
136
134
132
140
141
142
137
138
143
144
145
139
146
151
153
147
148
152
154
149
150
155
156
188

出土土器⑧

図版　20

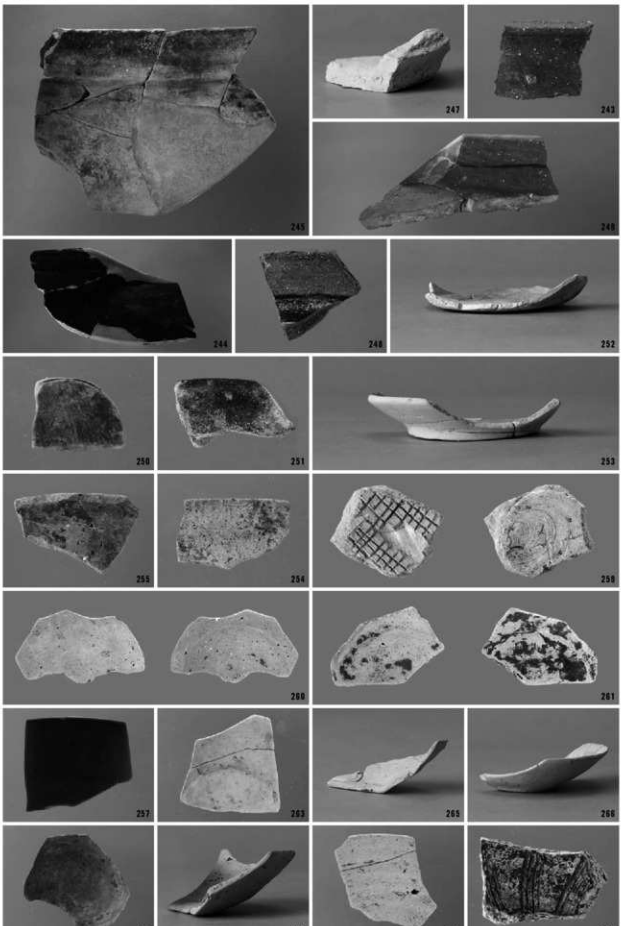

157
158
161
163
159
160
162
167
164
168
169
170
171
173
174
177
172
175
179
180
176
178
183
184
181
182
185
192
186
187
188
193

出土土器⑨

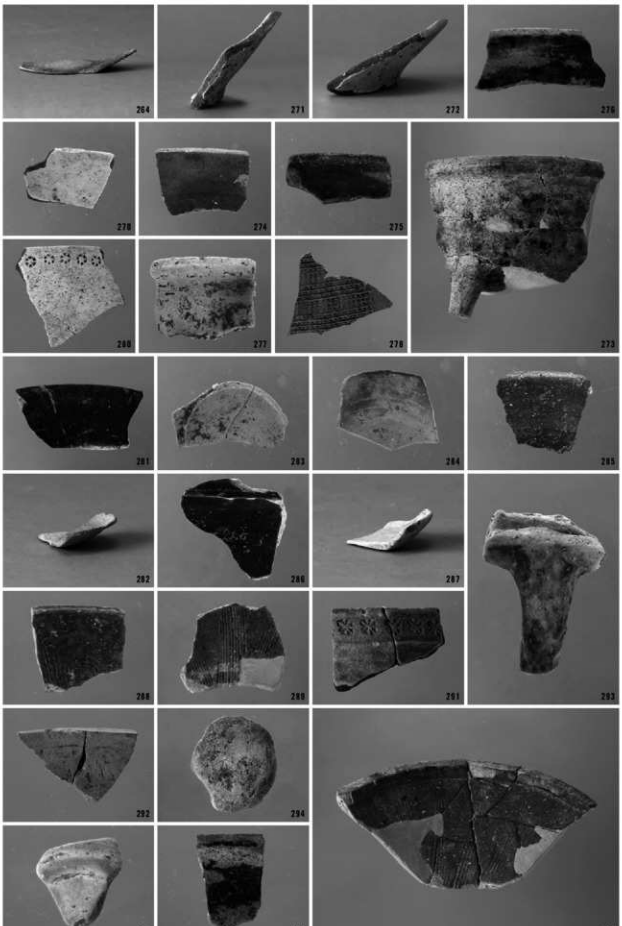

189
190
194
195
196
197
201
198
202
203
200
205
206
204
240
241
242
239
248

出土土器⑩

図版　22

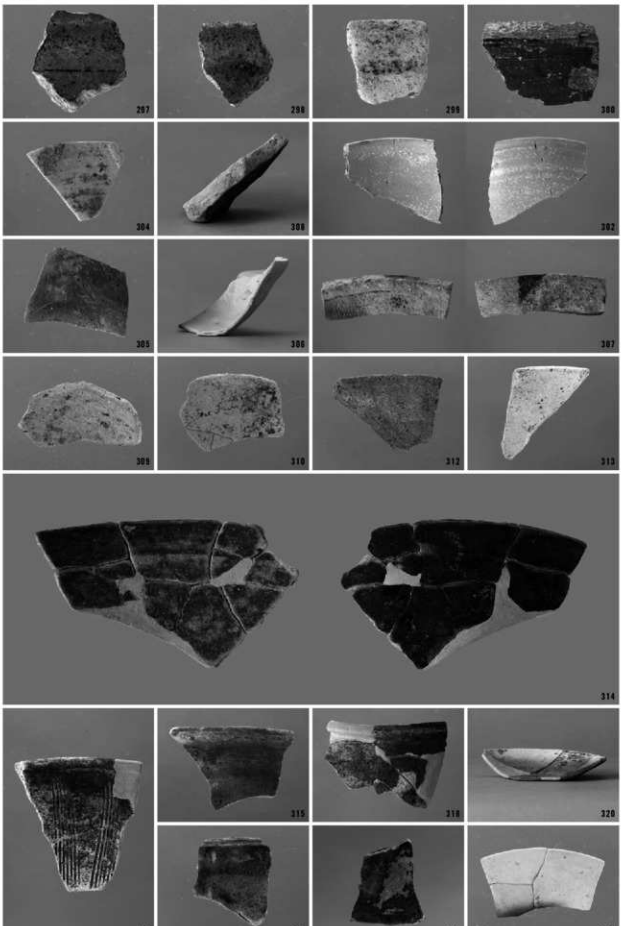

245
247
243
246
244
248
252
250
251
253
255
254
258
260
261
257
263
265
266
262
267
268
269

出土土器⑪

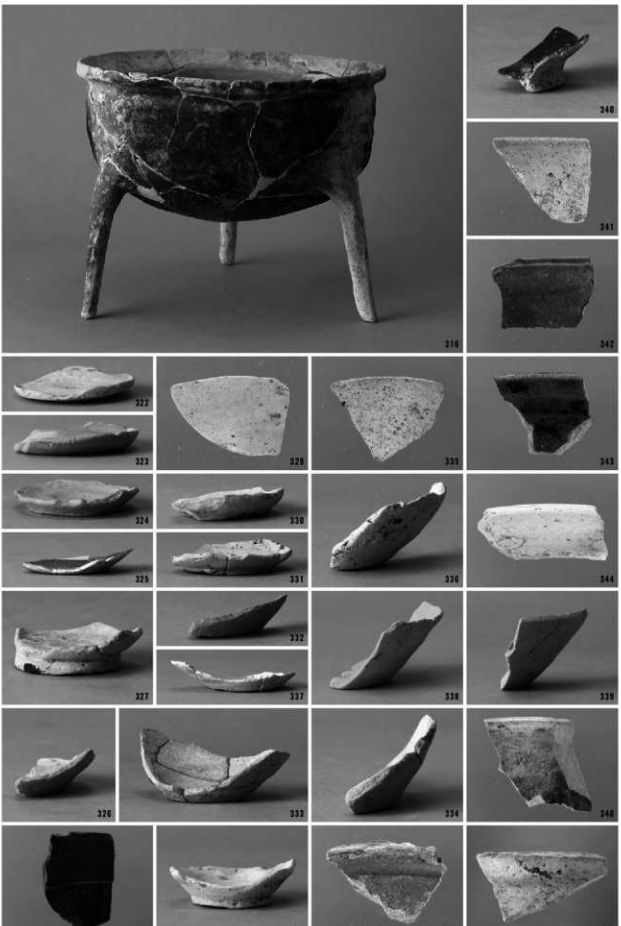

264
271
272
276
278
274
275
280
277
270
273
281
283
284
285
282
286
287
288
289
291
293
292
294
295
296
298

出土土器⑫

図版　24

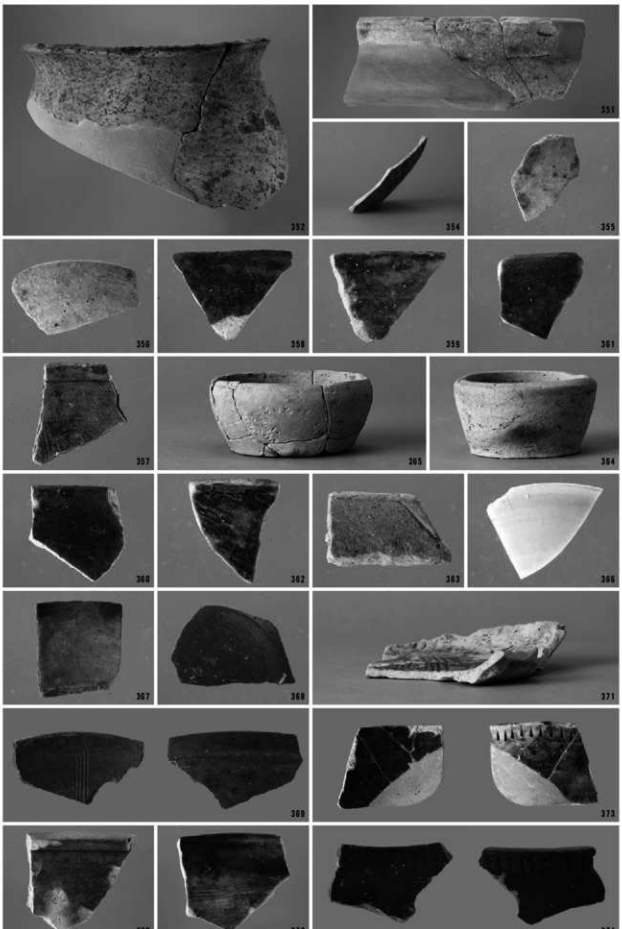

297
298
299
300
304
303
302
305
306
307
309
310
312
313
314
311
315
316
320
317
318
321

出土土器⑬

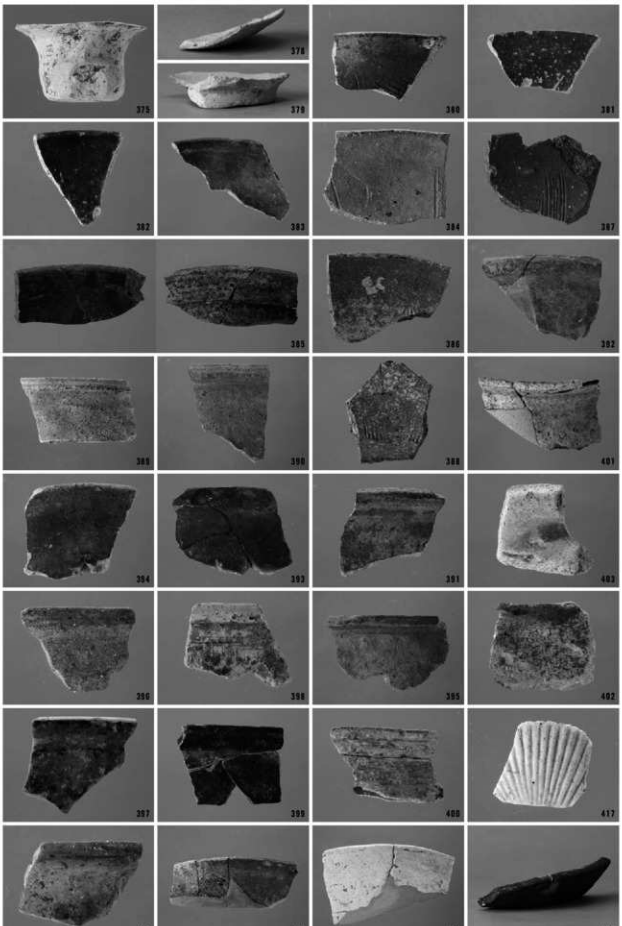

316
340
341
342
322
323
329
335
343
324
330
325
331
336
344
327
332
337
338
339
326
333
334
346
345
328
347
353

出土土器⑭

図版　26

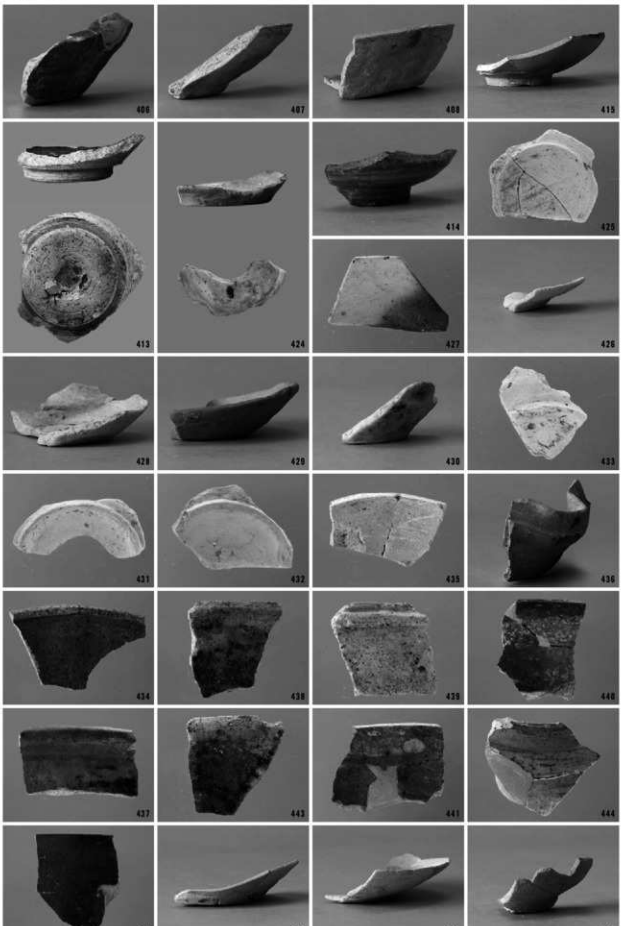

352
351
354
355
350
358
359
361
357
365
364
360
362
363
366
367
368
371
369
373
370
372
374

出土土器⑮

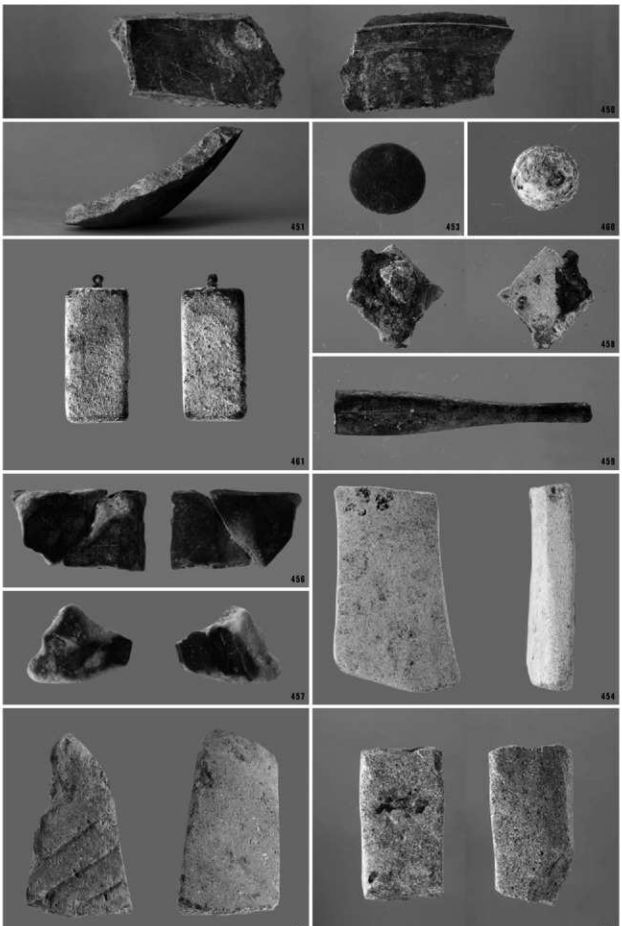

375
378
379
380
381
382
383
384
387
385
386
392
388
398
388
401
394
393
391
403
390
398
395
402
397
399
408
417
404
405
410
409

出土土器⑯

図版　28


406
407
408
415
413
424
414
425
427
426
428
429
430
433
431
432
435
436
434
438
439
440
437
443
441
444
442
447
448
445

出土土器⑰



出土土器⑩、出土石製品・金属製品ほか

報 告 書 抄 録

ふりがな	とうぜんじ・くろやまいせき（おかうえのはら・ごしあんちく）
書名	東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第69集
編集著者名	河村吉行　森下穏雄　松林寛樹　中野　萌
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町３番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2009年３月25日（平成21年３月25日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
とうぜんじ・くろやまいせき 東禅寺・黒山遺跡 （おかうえのはら・ごしあんちく） 岡上ノ原・後子庵地区）	やまぐちけんやまぐちし 山口県山口市 すぜんじ 鋳銭司	35201		34°5′8″	131°27′2″	20081001 ～ 20090109	約1,955	道路整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）	集落跡	中世	掘立柱建物跡　18棟 土坑　27基 井戸　1基 溝状遺構　20条 柱穴　714個 竪穴状遺構　3基	土師器 瓦質土器 土師質土器 貿易陶磁器 国産陶磁器 灰釉陶器 緑釉陶器 金属製品	中世の集落遺跡。溝状遺構を中心に多数の遺物が出土。 遺物包含層からは、灰釉陶器や緑釉陶器が出土。

要約

周防鋳銭司の東側に広がる中世の集落遺跡。掘立柱建物跡18棟、土坑27基、井戸１基、溝状遺構20条、柱穴714個、竪穴状遺構３基を検出した。掘立柱建物跡のうち１棟は総柱建物である。溝状遺構のうち、流路の変換点で、底面を一段と深く掘り下げた溜め枡状の遺構が２基検出された。また、方形プランをもち、見かけ上竪穴住居状を呈するが、柱穴などが確認できない遺構（竪穴状遺構）を３基検出した。

遺物は、土師器、瓦質土器、土師質土器などを中心としたものが出土した。また、ＳＫ1001などでは土師器坏や黒色土器淘の良好な一括資料が出土している。遺物包含層からは緑釉陶器や灰釉陶器、貿易陶磁器などが出土しており、周防鋳銭司操業時期に本遺跡周辺の広範囲に集落が展開していた様子がうかがえる。

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第69集

東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）

2009年３月

編集・発行　財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県山口市春日町３番22号

印　　刷　大村印刷株式会社
〒747-8588　山口県防府市西仁井令一丁目21番55号